港北ニュータウン
タウンセンターサインデザイン・ネーミング計画策定
調査報告書

平成３年１１月

住宅・都市整備公団　港北開発局
株式会社　港北都市開発センター

港北ニュータウンセンター
サインデザイン・ネーミング計画策定

目　　次

0．はじめに ―― 5
　0－1本計画の視点 ―― 6

1．前提条件の整理 ―― 7
　1－1 マスタープランおよび開発の考え方 ―― 8
　1-1-1 渋北ＮＴ開発の考え方
　1-1-2 タウンセンターの開発理念
　1-1-3 公共空間の基本方針

　1－2 タウンセンターの環境構造の把握 ―― 14
　1-2-1 タウンセンターの姿
　1-2-2 地　　形
　1-2-3 公　共　施　設
　1-2-4 街　路　構　成
　1-2-6 土地利用ゾーニング

　1－3 渋北ＮＴサイン計画 ―― 20
　1-3-1 既往報告にみるサイン計画の概要（昭和５８年度）
　1-3-2 既往報告にみるサイン計画の概要（昭和６０年度）
　1-3-3 既往報告にみるサイン計画の概要（平成元年度）

2．基本コンセプトの検討 ―― 24
　2－1 タウンセンターサイン基本計画作業フレーム ―― 25
　2－2 サイン計画のコンセプト ―― 26
　2－3 サイン計画の方針 ―― 27

3．本計画におけるサインの領域 ―― 28
　3－1 サインの分類（狭義のサイン） ―― 29
　3－2 サインの拡がり（広義のサイン） ―― 30
　3－3 本計画の領域と他計画との連携 ―― 31

4．配置計画の検討 ―― 32
　4－1 計画上の留意点 ―― 33
　4-1-1 歩行者動線
　4-1-2 タウンセンターの環境把握
　4-1-3 配置の手順

　4－2 サインアイテムの役割と配置計画 ―― 36
　4-2-1 地図の役割と配置
　4-2-2 名称表示の役割と配置
　4-2-3 誘導表示の役割と配置
　4-2-4 情報板の役割と配置

　4－3 サインシステムの形成 ―― 44
　4-3-1 アイテムの組み合わせとサインシステム
　4-3-2 単体系・複合系・メディアコア系の考え方
　4-3-3 単体系・複合系・メディアコア系の配置

　4－4 配　置　計　画　案 ―― 47
　4-4-1 北地区サイン配置図
　4-4-2 北地区サイン一覧表
　4-4-3 南地区サイン配置図
　4-4-4 南地区サイン一覧表

5．メディアコア ―― 55
　5－1 メディアコアの意味 ―― 56
　5－2 メディアコアの構成 ―― 57
　5-2-1 メディアコアの構成アイテム一覧
　5-2-2 メディアコアの場所別構成アイテム
　5－3 メディアコアの参考例 ―― 60

6．今後の検討事項 ―― 66
　6－1 総合化と設置管理主体の考え方 ―― 67
　6-1-1 関連領域の整理
　6-1-2 設置・管理の考え方
　6－2 経年変化を視座にいれたサイン計画 ―― 69

Ⅱ．タウンセンターネーミング計画策定

０．はじめに ―――― 71

１．従来のネーミング作業とその課題 ―――― 75

２．タウンセンター開発の考え方と手法の反映 ―――― 76

３．ネーミング作業の考え方 ―――― 77

４．ネーミングワーク ―――― 78
　４－１　ネーミング作業の各フェーズ①
　４－２　ネーミング作業の各フェーズ②
　４－３　ネーミング作業の各フェーズ③
　４－４　ネーミング作業フロー

５．タウンセンター開発作業への具体的反映 ―――― 82

資料　ネーミング対象選定のためのシート ―――― 83

Ⅰ．タウンセンターサインデザイン計画策定

０．はじめに

０－１本計画の視点

本計画は、タウンセンターのサイン計画をいかに実現していけば、港北ニュータウンの核としてのタウンセンターがその役割を最もよく果たすかを考えることを目的とする。すなわち、ライブリッドシティならではのサイン計画、タウンセンター方式のサイン計画の創出を目指している。

サインの第一義的役割は、その土地に不案内な人を案内し、目的とする場所や施設・建物に誘導することである。従来のサイン計画の主たる対象者はその土地に不案内な日本人・成人・健常者であったので、表現および内容が限定されていた。対象範囲外の人にとって、有意義なものではなかった。老人、子供、ハンディキャップのある人、外国人など、どんな人たちにも「わかりやすい」サインであるとともに、案内を必要としない人にも楽しめ・親しめるサインにしていくことが求められているのではないか。
本計画でのサインの役割を、大きく二つに分け、考えてみた。
「機能としてのサインの側面」と「表現としてのサインの側面」である。

「機能としてのサインの側面」

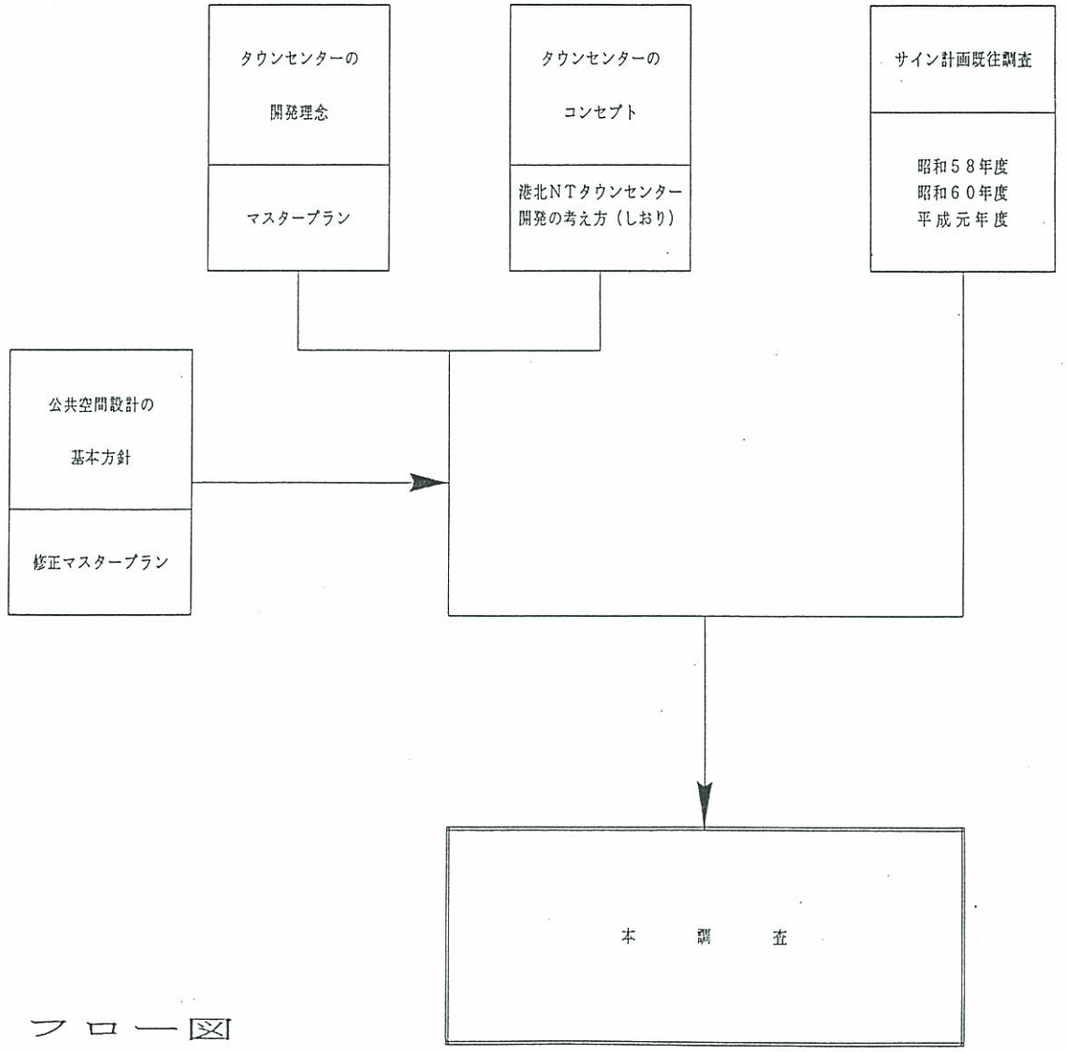
機能としてのサインの側面とは、街のわかりやすい案内を行うということである。その案内には、現在位置を確認するためや目的地へ誘導するための案内、主要施設の案内、生活関連施設（電話・トイレ・水のみ場）の案内、催事案内、禁止・注意の告知、伝言板等がある。これらが、街づくりの中の一つのシステムとして、総合的に計画されることが、わかりやすさの第一歩である。

「表現としてのサインの側面」

表現としてのサインの側面とは、アートとしてのサイン、雰囲気（歩く楽しさ）を醸し出すサイン、遊べるサイン（触る、鳴らす、踏むetc.）、刻々と変わるサインなど、街の景観やおもむきに寄与するものである。
以上のようなサインを計画に組み込むことにより、空間秩序の創出をはかることができよう。

サイン計画は街づくりの要素のなかでも、ハードなものとソフトなものをつなぐ意味のある要素である。
上記の「機能としてのサインの側面」と「表現としてのサインの側面」を実現させるためにも、単独にサインを計画するのではなく、ハードとソフトを柔軟に組み合わせた総合的なサイン計画をつくっていくことこそが大切である。
このサイン計画を通じて地区構造のわかりやすさを確立し、街のアイデンティティー向上のサポートに役立ち、さらにはコミュニティーの広がりを生む装置づくりが行えればと考えている。

本サイン計画を策定するにあたっては、『港北ニュータウン開発の考え方』、『タウンセンターの開発理念』を踏まえ、その主旨をサイン計画の中に十分に反映させることは勿論、昭和５７年度「港北地区サイン計画策定調査」、昭和６０年度「港北ニュータウン・サイン基本計画」、平成元年度「港北ニュータウン・サイン計画」など、既存調査の成果を活かし、タウンセンターならではのサイン計画を実現することが必要であろう。
以下に、本計画の前提条件となる既存調査のフロー図を示す



フロー図

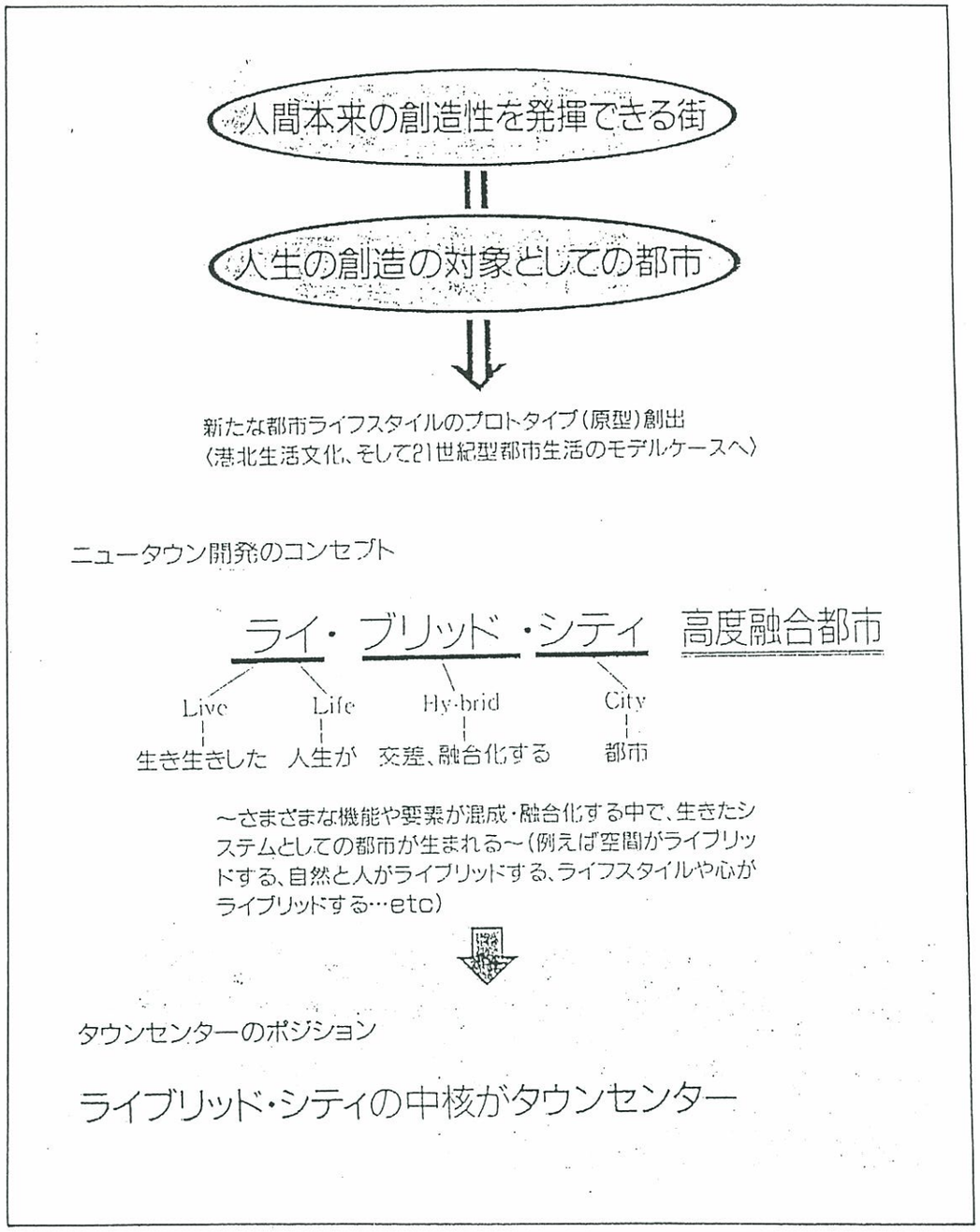
１．前提条件の整理

１－１ マスタープランおよび開発の考え方
1-1-1 港北ＮＴ開発の考え方
1-1-2 タウンセンターの開発理念
1-1-3 公共空間の基本方針
１－２ タウンセンターの環境構造の把握
1-2-1 タウンセンターの姿
1-2-2 地形
1-2-3 公共施設
1-2-4 街路構成
1-2-6 土地利用ゾーニング
１－３ 港北ＮＴサイン計画
1-3-1 既往報告にみるサイン計画の概要（昭和５８年度）
1-3-2 既往報告にみるサイン計画の概要（昭和６０年度）
1-3-3 既往報告にみるサイン計画の概要（平成元年度）

港北ニュータウン開発のコンセプトは『ライ・ブリッド・シティー』、すなわち『高度融合都市』という言葉に象徴される。これは、生き生きした（Live）人生（Life）が交差・融合化する（Hy-brid）都市（City）づくりを目指すことを最大の目標にしていることを示している。

様々な機能や要素が混成・融合化する中で、いきたシステムとしての都市が生まれ（例えば、空間がライブリッドする、自然と人がライブリッドする、ライフスタイルや心がライブリッドする）、発展する。そうした中で、人間本来の創造性を発揮できる街、人生の創造の対象としての都市が形成されることが望ましいということである。

そして、新たな都市ライフスタイルのプロトタイプ（原型）を創出し、港北生活文化、２１世紀型都市生活のモデルケースとなる、そうした人間中心のライブリッド・シティーの中核となるのがタウンセンターである。



出典：港北ニュータウン・タウンセンター基本コンセプト構想検討報告書，㈱港北都市開発センター，1990年3月
港北ニュータウン・タウンセンター開発の考え方（しおり），㈱港北都市開発センター

マスタープランにみるタウンセンターの開発理念とその展開のための基本方針を以下に要約する。

タウンセンターの開発理念

タウンセンター地区は、商業・業務集積地区として首都圏でも有数の規模を有していることから、横浜市北部の商業・業務的な核となるだけではなく、首都圏域までをも視野に入れた広域を対象とする拠点地区の形成を目指す。そうした広域拠点形成のためには、商業施設を中心とした単一機能主体型のセンターではなく、業務・文化・住宅等の多用な機能、大小様々な空間・バラエティーに富んだ形態が存在する多機能複合型のセンターでなければならない。さらに、時代の要請である国際化、情報化等についても港北ニュータウンが主張している方向であり、センター形成にあたっても積極的な対応が望まれる。

センター地区は、良好な住環境のもとに大量に住宅を供給するニュータウン内に立地するため、業務機能を中心とするＭＭ２１地区や新横浜地区とは異なり、あくまでも生活に根差した人間味豊かなセンターづくりを目指す。そのために、既存の都市のセンター地区にみられるような、単に物的消費生活を支えるためだけの生活拠点ではなく、首都圏の中でも文化イメージの高い土地柄や、近年の文化教養指向の高まり等を踏まえ、知的・文化的消費を支える生活文化拠点として将来の望ましい生活文化を提案するような、情報発信性の高い洗練されたセンターの形成が必要である。

また、道路等の都市基盤施設の整備水準や空間の質を高めるとともに、情報系のソフトシステムを充実し、ハード・ソフト両面でバランスのとれた、全体に整備水準の高い都心的魅力のあるセンターを目指す。それだけではなく、グリーンマトリックスの拠点としての公園・緑地等の豊富な自然環境を積極的に活用し、都市的アメニティーと自然的アメニティーの双方を兼ね備えた、これまでの都心にない、ゆったりとして自然が息づく快適なセンターとする。

そして、高い水準の都市的サービスを提供し、計画的施設立地等を通じて空間・機能等を含めたトータルな面で他の商業・業務地との差別化を追求して、ニュータウン内の居住者が誇りに思うような個性豊かなセンター、さらには、他の広域拠点に対してセンターの存在を広範にアピールし、来街者を広域的に吸引するような自己主張をもつセンターを目指す。

以上のような理念を実現してハード的にも、ソフト的にも内外に認められる『光る都市』をタウンセンターの形成目標とする。『光る都市』の空間構成のイメージは、①歩行者にとって快適な街　②車にとってもアクセスしやすい街　③自然と調和し融合する街　④豊かなオープンスペースを充分利用できる街　⑤ゆとりと風格の感じられる街　⑥文化の香り高い街、である。

全体構成の基本方針

それでは、開発理念をタウンセンターの全体構成の中でどのように展開し、実現していくかということになる。

基本的な考え方としては、

①第１・２地区の構成は、空間的に分離されたそれぞれの地区の商業・業務核として独自に機能させるのではなく、それぞれに特徴を持たせるが、相互に補完する

②広大な面積を持つセンター内の特定の部分（例えば駅前）に賑わいが集中しないように、街の骨格となる核施設（核店舗、駐車場等）を適切に分散させるとともに、歩行者ネットワーク等を有機的に関連付けることにより、回遊型の動線を確保し、拡がりのある街を形成する

③画一的な街にならないようにゾーン毎に積極的に個性を演出し、それらを有機的かつ適切に組み合せることにより、タウンセンター全体としてメリハリのある個性を創出する

④ニュータウン内の居住者や、来街者にとって親しみやすいセンター地区を実現させるために、道路や歩行者専用道路そのものに明確な性格を持たせ、それぞれに個性のあるストリートを形成するとともに、街の拠点的な性格を有する要所に核的施設を配置して街の構造を明確にする

以上のような考え方を基本として、

①街区は、部分的に大規模街区を設定したり、沿道利用が可能な街区も設定するなど、多様な街区を設定する

②交通は、道路ネットワーク等を再編し、車利用への積極的対応を図るために、駐車場を大量に確保して適正に配置し、歩車完全立体分離を見直して変化に富んだ快適な歩行車空間を実現する

③施設に関しては、商業機能だけではなく多種多様な機能を導入して、複合化を図り、かつ計画的・戦略的に配置する

④坂の街である地形を活かして自然と都市景観の融合を図る構成とし、シンボル空間を積極的に創出し、公共・公益施設が率先して都市景観を誘導していく

タウンセンターの開発理念

ライブリッドシティ ⇨

1. 多機能複合に基づく広域拠点の形成	・港北N.T.は、鉄道網や広域幹線道路網等が近い将来更に充実することにより、横浜市中心部だけでなく東京都心部との関係性が強まり、発展性の高い拠点的地域を形成する可能性が強い。 ・また、センター地区は商業業務集積地区として首都圏でも有数の規模を有していることから、横浜市北部の商業核となるだけでなく、首都圏域まで視野に治めた広域対象の拠点地区の形成を目指す。 ・広域拠点形成のために、商業施設を中心とした単一機能主体型のセンターでなく、業務・文化・住宅等の多様な機能、大小様々な空間・形態が複合する多機能複合型のセンターを目指す。 ・更に、時代の要請である国際化、情報化等についても港北ニュータウンの主張すべき方向であり、センター形成にあたっても積極的に対応する。
2. 生活・文化の情報発信拠点の形成	・当センター地区は、良好な住環境のもとに大量に住宅を供給するニュータウン内に立地するため、業務機能を中心とするMM21地区、新横浜地区とは異なり、あくまでも生活に根差した人間味豊かなセンターづくりを目指す。 ・従来のセンター地区に見られる様な、単なる物的消費生活を支える為だけの生活拠点ではなく、首都圏の中でも文化イメージの非常に高い土地柄や近年の文化教養志向の高まり等を踏まえ、知的・文化的消費を支える生活文化拠点として将来のあるべき生活文化を提案する様な、情報発信性の高い洗練されたセンターを目指す。
3. 高度の都心性と自然性を備えたセンターの形成	・道路等の都市基盤施設の整備水準や空間の質を高めると共に、情報系のソフトシステムを充実し、ハード・ソフト両面でバランスのとれた、全体に整備水準の高い都心的魅力のあるセンターを目指す。 ・更に、グリーンマトリックスの拠点としての公園、緑地等の豊富な自然環境を積極的に活用し、都市的アメニティと自然的アメニティの両方を兼ね備えた、これまでの都心にない、ゆったりとして自然が息づく快適なセンターを目指す。
4. 個性豊かで自己主張を持つセンターの形成	・高水準な都市サービス、計画的施設立地等を通じて空間、機能等を含めたトータルな面で他の商業業務地との差別化を追求し、ニュータウン内居住者が誇りに思うような個性豊かなセンターを目指す。 ・また、他の広域拠点に対してセンターの存在を広範にアピールし、広域的な来街者を吸引するような自己主張をもつセンターを目指す。

⇨ 光る都市

出典：港北ニュータウン・タウンセンター 市街化誘導方策検討調査

光る都市

● 空間構成のイメージ

1. 歩行者にとっての快適な街をつくる。

駅や主要施設を結ぶ歩行者専用路を骨格に、歩車融合路や歩道を設けて、歩き易く安全で快適な歩行者空間のネットワークをつくる。

2. 車にとってもアクセスしやすい街とする。

車による来街に対して目的の施設にアクセスし易く、道路通行や駐車場の利用に際して、混雑しない街とする。

3. 自然と調和し融合する街とする。

都市空間の中に読画され、豊かな水や緑の自然を持ち、ガーデンシティの趣をもつ街を創る。

4. 豊かなオープンスペースを充分利用できる街とする。

シンボル通りやシンボル広場等の基幹空間を中心とした公共空間と、三地のセミパブリックスペースにより都市空間をつくり出す。

5. ゆとりと風格の感じられる街とする。

混雑した雑踏の街ではなく、軽やかでさわやかな清涼感の大きさとゆとりを感じさせる街並を構成する。

6. 文化の香り高い街とする。

落ち着いた本物の美しさ、時が経つにつれて味わいの増す美しさを持つ街をつくる。

● タウンセンターの生活のイメージ

1. 時間に追いかけられず流されずマイペースを保ち、緊張の連続でない都心の暮らしが営める。
2. 自然と一体化した健やかで安らかな暮らしを楽しめる。
3. ホスピタリティ、対人的アメニティが豊かに用意され、色々な世代の人々が安心して暮らせる。
4. 働き・遊び・学び・住むといった暮らしの全ての場面が展開される。
5. 経済的繁栄や表面的な華やかさの生活でなく、文化を育ててゆく生活が展開される。
6. 住む人・働く人それぞれの立場で協同のコミュニティをつくり、街を運営してゆく自主的な営みが展開される。

● 施設整備のイメージ

1. 商業施設を主体として多機能複合型の施設展開を行う。

地域対応型の施設を含めて、多様な来街者の様々な要求に対応する為に、商業系施設を中心にしつつも業務系、文化・芸術系、ｽﾎﾟｰﾂ・ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ系等の施設を積極的に立地させ、複合センターを形成する。

2. 話題性のある先進的な施設展開を行う。

常に活性化しているセンターとする為に、高度な情報性を備えた施設や先進的施設をできるだけ立地させると共に、イベント空間を創出することによって、話題性豊かなセンターを形成する。

3. 国際性豊かな施設展開を行う。

世界に窓口を開いた様々な施設の立地を図ると共に、国際情報の受発信基地となる施設やコンベンション、国際交流の場を提供することによって、ニュータウンの持つ国際性を体現するセンターを形成する。

4. 24時間対応型の施設展開を行う。

ニュータウンの要となるセンターとして、利便性・機能性を高める施設立地を図ることは当然であるが、都心としての付加価値を高める為に、24時間活動するセンターを形成する。

5. 自然と調和した施設展開を行う。

来街者に“ゆとり”と“うるおい”を与え、レクリエーショナルな機能を併せ持った自然の要素を導入し、高度な都心性と調和した自然が息づくセンターを形成する。

6. シンボル性を追求した施設展開を行う。

タウンセンターのアイデンティティを追求し、優れた空間形成を図る為に、センター全体の景観計画やデザインコントロールを行い、ニュータウンを超える広域圏にアピールするシンボリックなセンターを形成する。

出典：港北ニュータウン・タウンセンター 市街化誘導方策検討調査

● 全体構成の基本方針

1. 第1・2地区それぞれに特徴を持たせ、相互に補完する一体的な構成とする。

・第1・2地区の構成は、空間的に分離されたそれぞれの地区の商業業務核として独自に機能させるのではなく、広域拠点としてより一層の機能展開を促進する為、各地区住民の生活を支える為に必要かつ充分な機能を持たせることを前提としつつも、各々に独自の特徴を持たせ、相互に機能補完する一体的な構成とする。
・尚、1・2地区間の地区外部分については、将来的に両地区を連担させる開発が望まれており、開発に当たっては、地域の状況を踏まえた上で、センター地区内立地施設と競合せず、かつセンター地区の開発を補完する施設立地を誘導する必要がある。

2. 極端な駅前集中型でなく回遊型の動線を計画し、街の拡がりを確保する。

・広大な面積を持つセンター内の特定の部分に賑わいが集中しないよう、街の骨格となる核施設（核店舗、駐車場等）を適切に分散させると共に、歩行者ネットワーク等と有機的に関連付けることにより回遊性を確保し、拡がりのある街を形成する。

3. 特徴あるゾーンをつくり、機能の複合化・建物の共同化を図る。

・広大な拡がりを持つセンターが、画一的な街にならないようゾーン毎に個性を積極的に付与し、その有機的な組合せにより全体としてメリハリのある土地利用構成を図る。
・特定の機能に特化するゾーンや多様な用途・機能、空間・形態が複合するゾーンを適切に組合せることにより、全体としての個性を創出する。

4. ストリート、核的施設により街の構造を明確にする。

・ニュータウン内の居住者や、来街者にとって親しみ易いセンター地区を実現させる為には、利用面や景観面から分かり易い全体構造を、実現することが重要と思われる。
・そのため、道路、歩行者専用道路そのものに明確な性格を付与し、その沿道にも性格に適した機能を導入する等、それぞれに個性のあるストリートを形成すると共に、人が集まる地点、象徴的な意味を持つ地点、周辺から目立つ地点等、街の拠点的な性格を有する要所に核的施設を配置する。

⇨

●街区構成の基本方針

1. 部分的に大規模街区を設定する。
2. 沿道利用が可能な街区も設定する。
3. 多様な街区を設定する。

●交通計画の基本方針

1. 道路ネットワーク等を再編し、車利用への積極的対応を図る。
2. 歩車完全立体分離を見直し、変化に富んだ快適な歩行者空間を実現する。
3. 駐車場を大量に確保し、適正に配置する。

●施設整備の基本方針

1. 商業機能だけではなく多種多様な機能を導入し、かつ複合化をはかる。
2. 街全体として整合性を図る為、施設を計画的、戦略的に配置する。

●景観形成の基本方針

1. 坂の街である地形を生かした景観構成とする。
2. シンボル空間を積極的に創出する。
3. 公共・公益施設により景観形成を誘導する。
4. 自然と都市景観の融合を図る。

出典：港北ニュータウン・タウンセンター 市街化誘導方策検討調査

港北ニュータウン・タウンセンターのマスタープランは、昭和５１～５２年に計画された。その後平成２年に、社会環境の変化を勘案し、修正マスタープランが作成された。その骨子は、①モータリゼーションへの対応、②多様で豊かな歩行者空間の形成、③大規模商業業務施設立地への対応の３点に集約される。

この修正マスタープランの開発理念をうけて、タウンセンターの公共空間の基本方針である １.アクセスし易い公共空間のヒエラルキー体系を確立する。 ２.タウンセンター内部は、歩行者・自転車に優しい空間づくりを行う。３.シンボル広場を中心とした歩行者空間のネットワーク編成を行う。４.水と緑の自然を生かした空間づくりを行う。５.高低差の演出により、眺望やビスタのある奥行きを持った空間づくり、を行う。６.立体利用により、公共空間の高度利用を図る。が設定された。

公共空間計画の考え方

1. 車でアクセスし易い公共空間のヒエラルキー体系を確立する。

- 来街者のうち、車利用者の割合が最も多く、全体の約６割を占めると推定されており、タウンセンター自体が成立するためにも、より広域圏からの車利用の来街者を積極的に吸引することが重要である。
- このため、周辺幹線道路からの動線を確保すると共に、タウンセンター内での道路ネットワークの段階構成を明確にし、合わせて大規模駐車場の整備を行い、来街者がスムーズかつ快適にタウンセンターを利用出来るようにする。

2. タウンセンター内部は、歩行者・自転車に優しい空間づくりを行う。

- 歩行者専用道路、歩車融合道路、時間規制による歩行者空間は、歩行者や自転車利用者にとって優しい空間づくりを行う。
- 重要な歩行者動線と幹線道路の交差は歩車立体分離とし、その他の歩行者動線は平面交差・歩車融合により余計な昇り降りのない快適でわかい易い空間づくりを行う。
- 駐輪場等の計画的な配置により、自転車・バイク利用者にとっても利用し易いタウンセンターを目指す。

3. シンボル広場を中心とした歩行者空間のネットワーク構成を行う。

- タウンセンターの歩行者空間は、これまでの日本の都市空間にはなかったスケールの都市広場（シンボル広場）を中心としてネットワークを形成する。
- タウンセンターの入口であり出口であり、全ての歩行者空間が束ねられるシンボル広場は、ゆったりとした大きな空間として整備する。

4. 水と緑の自然を生かした空間づくりを行う。

- 21世紀の都市空間として、自然環境や自然の生態と共存する空間づくりを目指す。
- タウンセンターのデザインテーマである、光・音・風を自然の要素で表現する。

5. 高低差の演出により、眺望やビスタのある奥行きを持った空間づくりを行う。

- 坂の街・タウンセンターの地形の構造を活かして、アップタウン・ダウンタウンの結節部は眺望やビスタ、見下ろしや見上げの楽しめる空間づくり（橋やテラス）を行う。
- 昇り降りも、スロープ、 1/4階段、エスカレーターなどを導入するとともに、階段も昇り降りの装置としてだけでなく、休息したり、周囲を眺めたりする場としてのしつらえをする。

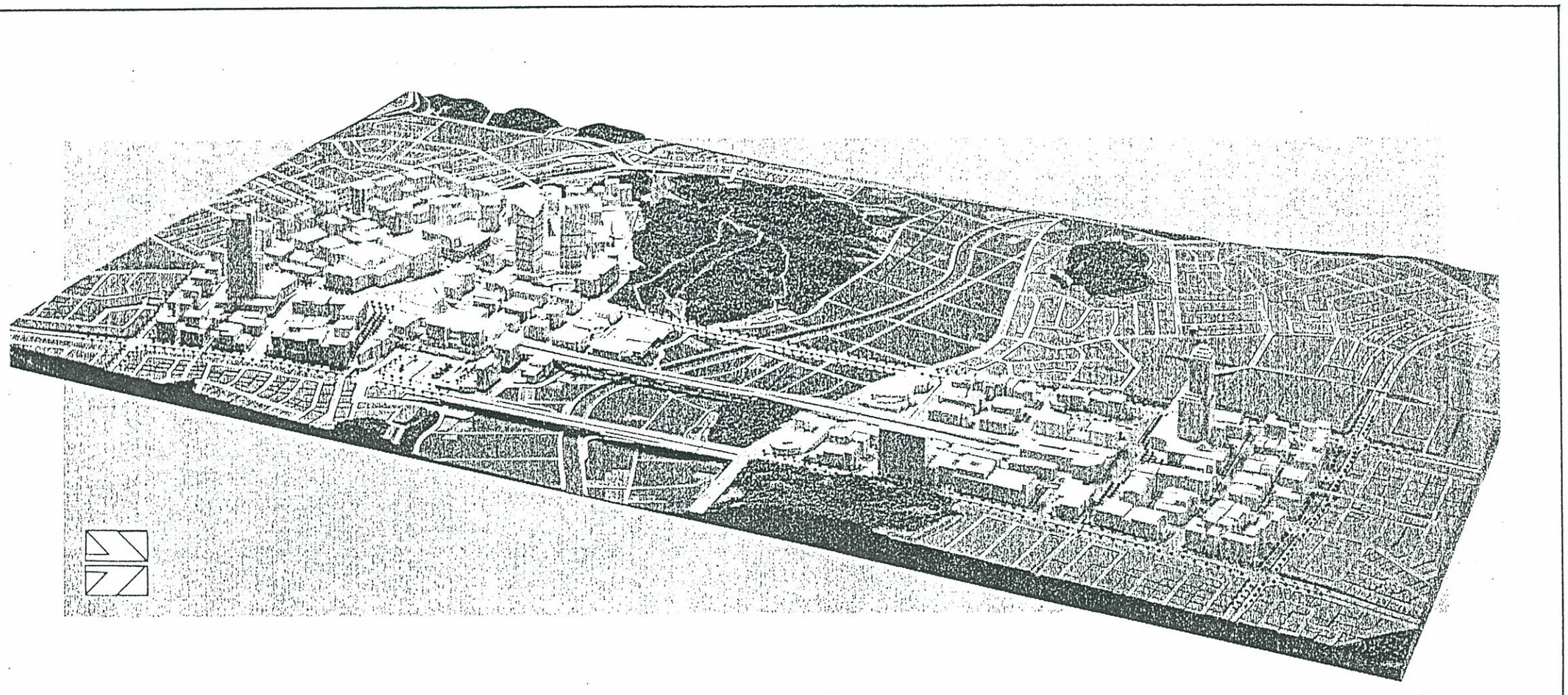
6. 立体利用により、公共空間の高度利用を図る。

- タウンセンター全体の約40%を占める公共用地を、単に平面的に利用するだけでなく、地下空間を含めて立体的に利用し、タウンセンターの基盤として有効に活用する。
- 高低差を利用した駐車場・駐輪場の設置、地下街を整備することよる高低差の解消など３次元の視点を持った空間利用を図る。

出典：港北ニュータウン・タウンセンター公共空間基本設計

タウンセンター計画は早淵川を挟んで、第１地区は東西400m、南北700m、第２地区は東西650m、南北700mに及び、その面積は約73haであり、床面積は約130万mという大規模な都市開発である。タウンセンター中央を流れる早瀬川をはさんで、南の第１地区と、北の第２地区とに二分される。この２地区はそれぞれに特徴を持たせるが、独自に機能するのではなく相互に補完性を持って機能する。

下図に、その姿を概観、想定してみる。

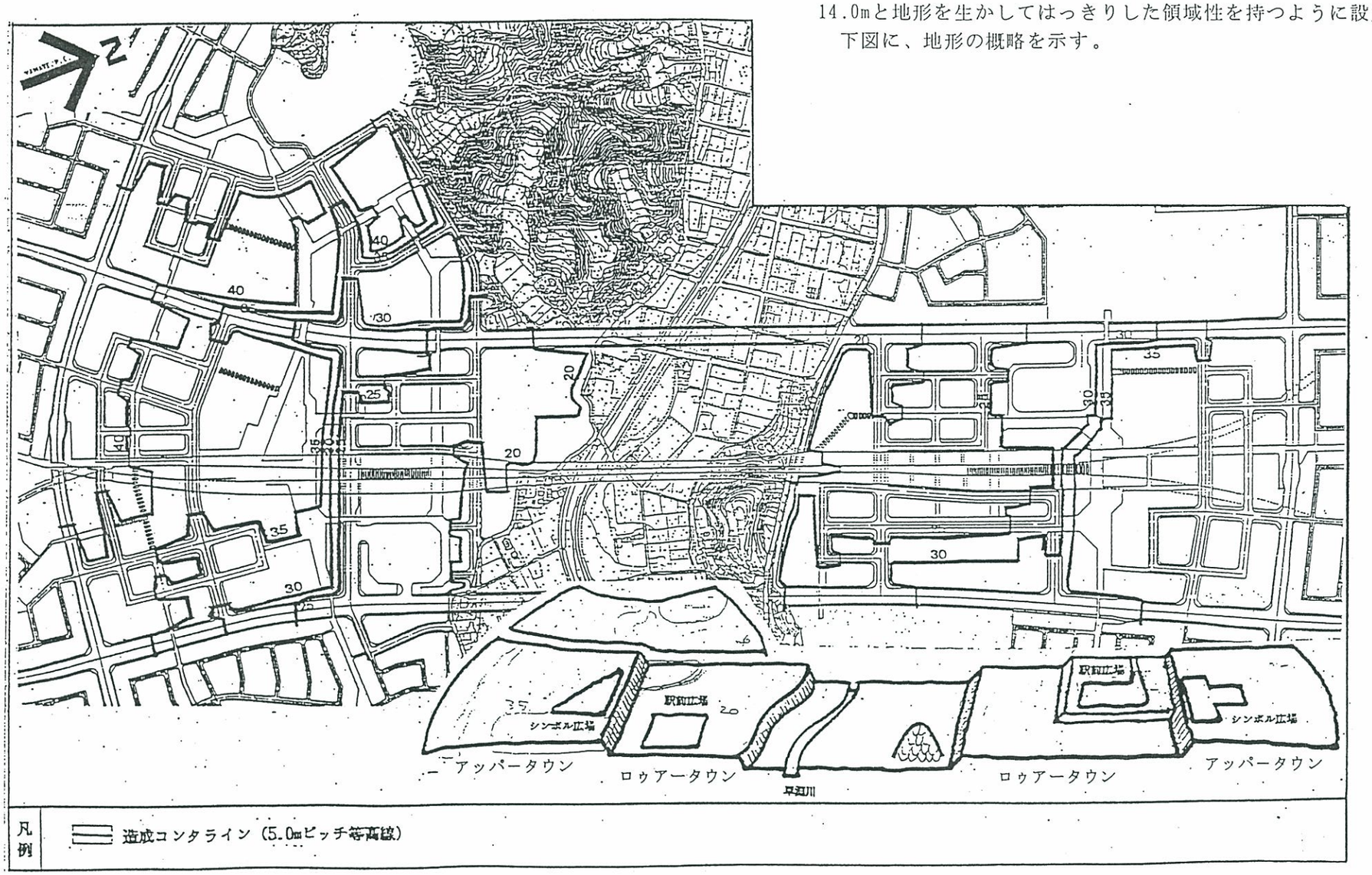


出典：港北ニュータウン　タウンセンター修正整備計画

中央に早淵川が流れ、それを挟んで南北の第１・２地区は向かい合う形で早淵川に向かって、アッパータウンからロゥアータウンへと低くなっていく。その結果、道路勾配も南北方向は坂道であり、東西方向は比較的平坦であるという特性がある。

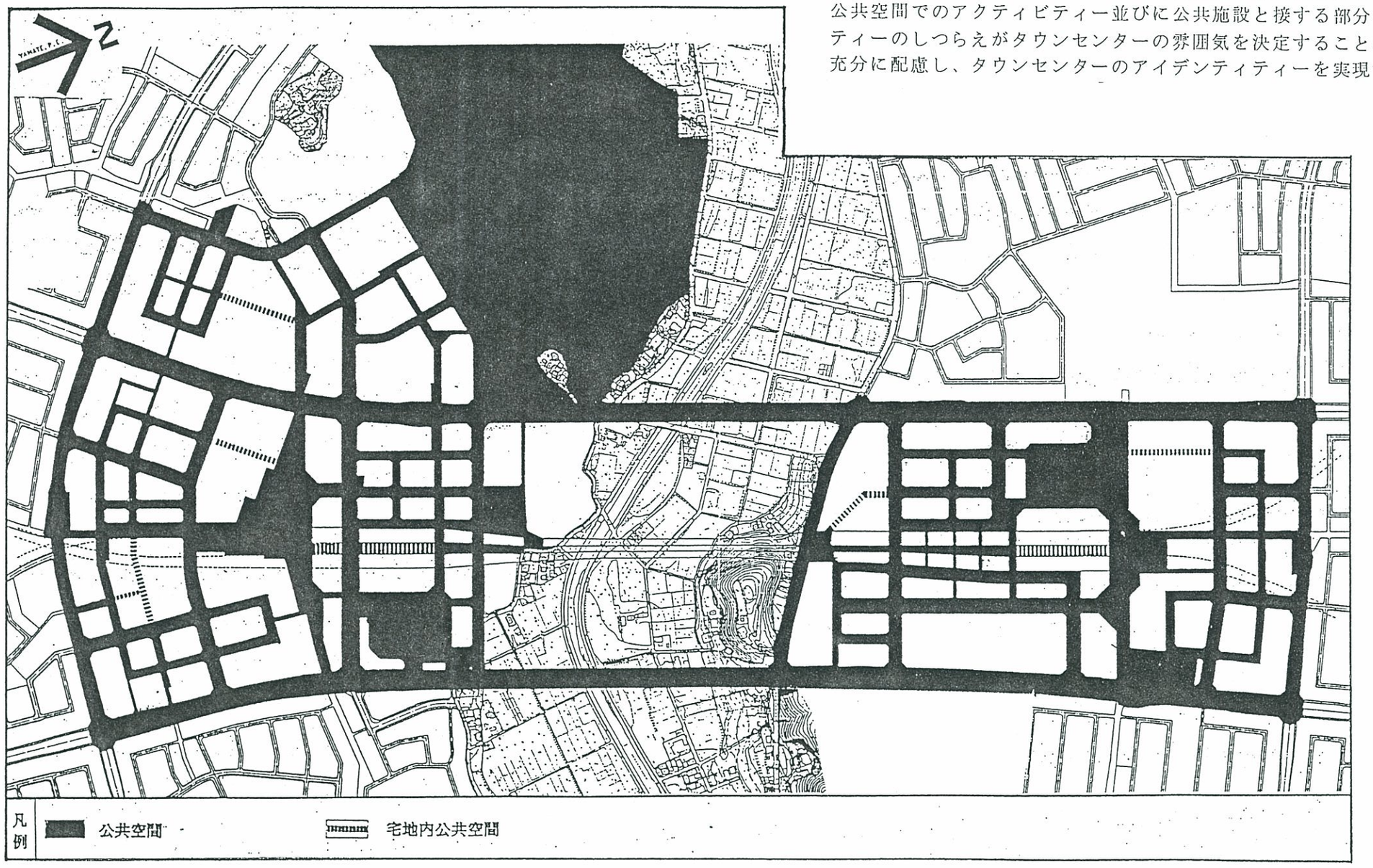
アッパータウンからロゥアータウンの標高差は第１地区約13.0m、第２地区約14.0mと地形を生かしてはっきりした領域性を持つように設定されている。

下図に、地形の概略を示す。



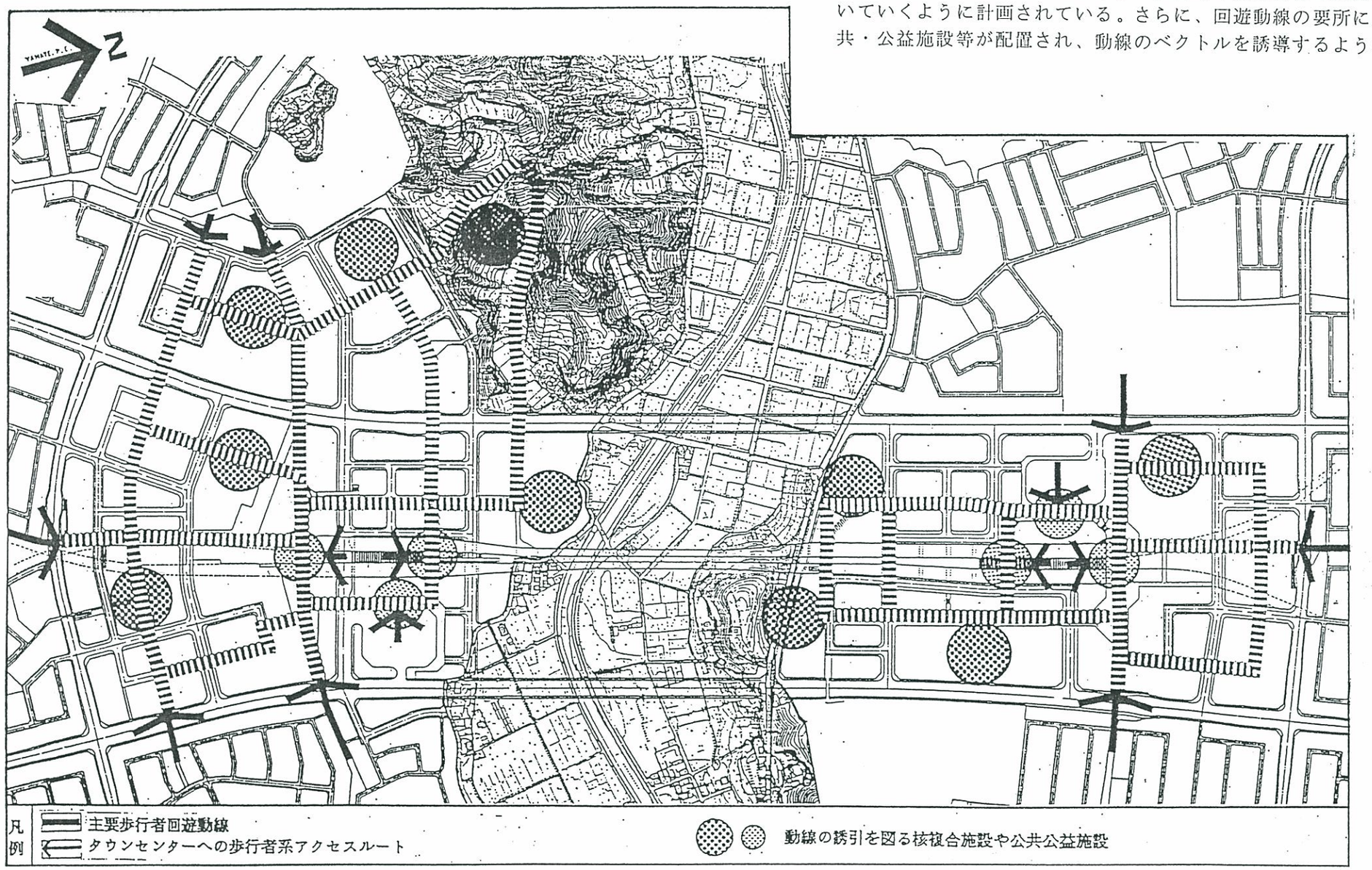
出典：港北ニュータウン・タウンセンター 市街化誘導方策検討調査

タウンセンター約73haのうち公共用地は約30haを占め、全体の約40％と大きく、公共施設の景観及び公共施設と接する部分の建築景観が街並の質を大きく規定すると考えられる。そうであるから、公共施設の役割は他にもまして重要である。公共空間でのアクティビティー並びに公共施設と接する部分の民地のアクティビティーのしつらえがタウンセンターの雰囲気を決定することになるので、双方が充分に配慮し、タウンセンターのアイデンティティーを実現することが望まれる。



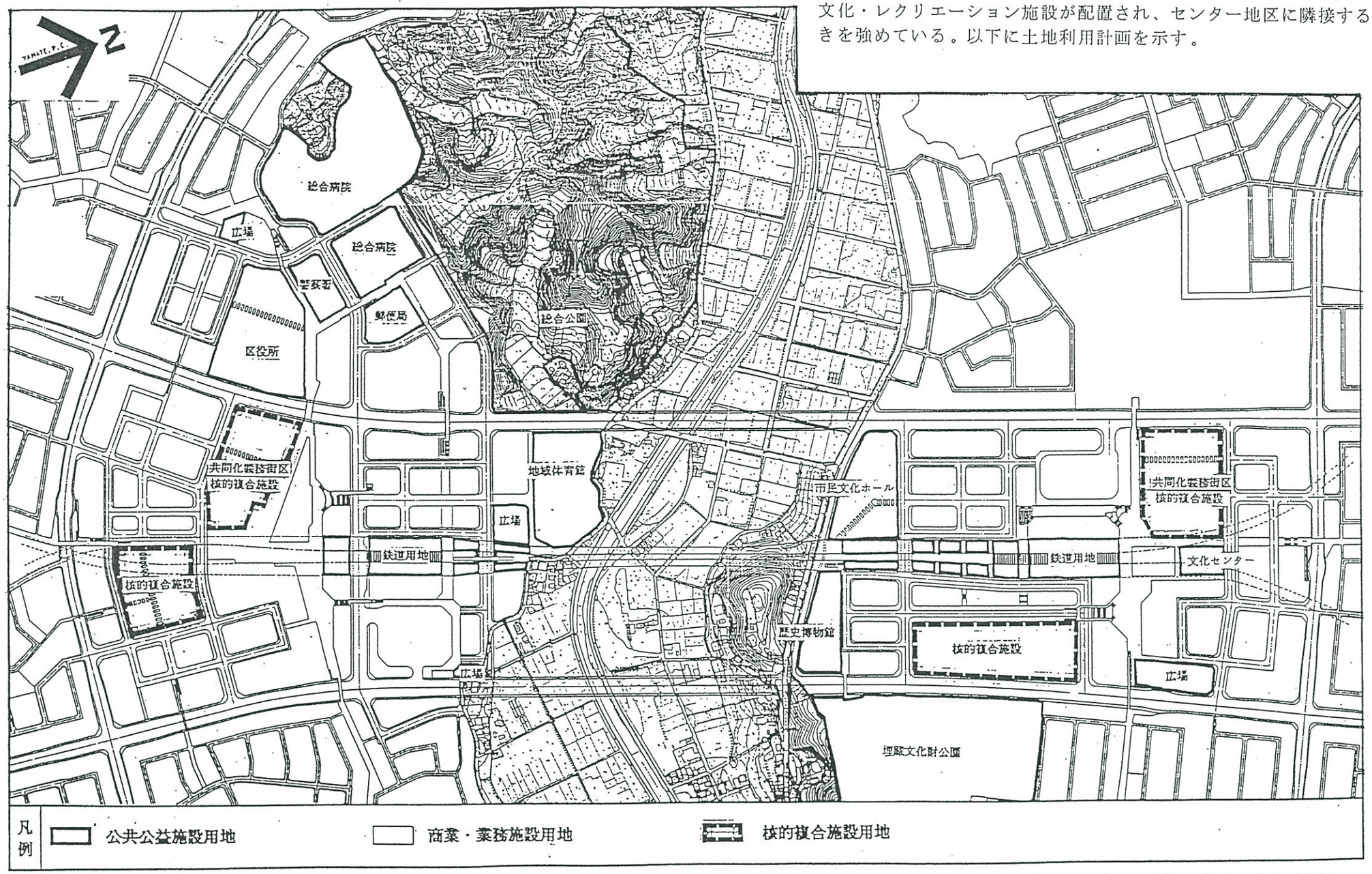
出典：港北ニュータウン・タウンセンター 市街化誘導方策検討調査

タウンセンター内は、歩道、シンボル道路、歩行者専用道路、歩行者広場、歩車融合道路と様々な歩行者空間が、沿道の土地利用や歩行者の動線に合わせて設定されており、歩行者交通のネットワークをつくり上げている。また、それらを補完する敷地内の通り抜け歩行者ルートについても、主要なものはその位置が想定されていて、駅を中心に大小の回遊動線が歩行者の動脈として地区内の隅々まで人々を導いていくように計画されている。さらに、回遊動線の要所には、核的複合施設や公共・公益施設等が配置され、動線のベクトルを誘導するよう考えられている。



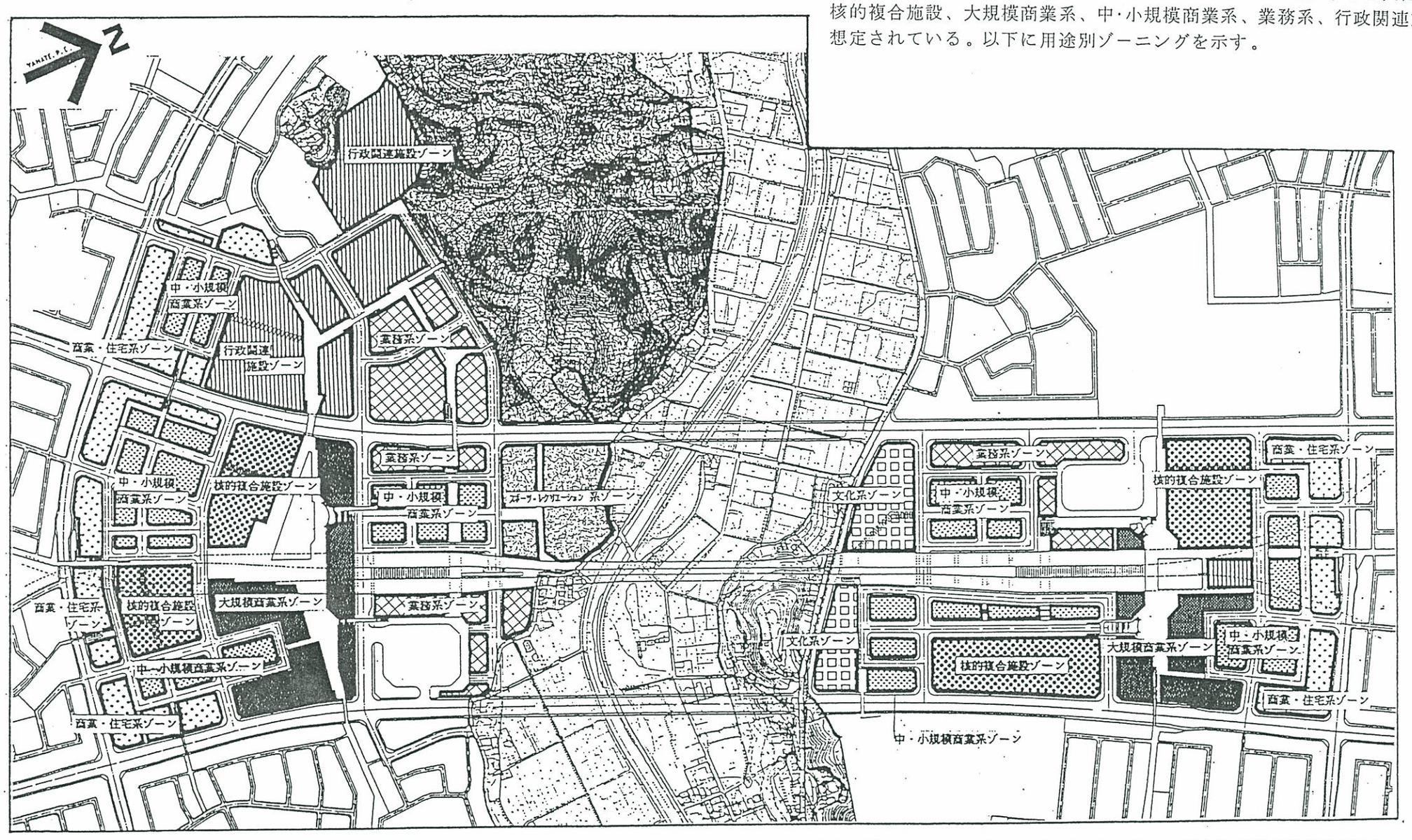
出典：港北ニュータウン・タウンセンター 市街化誘導方策検討調査

第１・２地区共に核的複合施設ゾーン、共同化業務街区ゾーンが設定されているが、公共・公益施設は主に第１地区に設定されていて、第２地区、西側ブロックには行政関連の業務施設ゾーンは設定されていない。また、両地区とも早淵川寄りに文化・レクリエーション施設が配置され、センター地区に隣接する公園との結び付きを強めている。以下に土地利用計画を示す。



出典：港北ニュータウン・タウンセンター 市街化誘導方策検討調査

第１・２地区共にアッパータウンの幹線道路沿いは、集合住宅を主体とした商業住宅系ゾーンである。またロッアータウンの早淵川周辺は、文化・リクリエーション系ゾーンで公共公益施設が設定されている。この住宅区域と公共区域の間には、核的複合施設、大規模商業系、中･小規模商業系、業務系、行政関連施設ゾーンが想定されている。以下に用途別ゾーニングを示す。

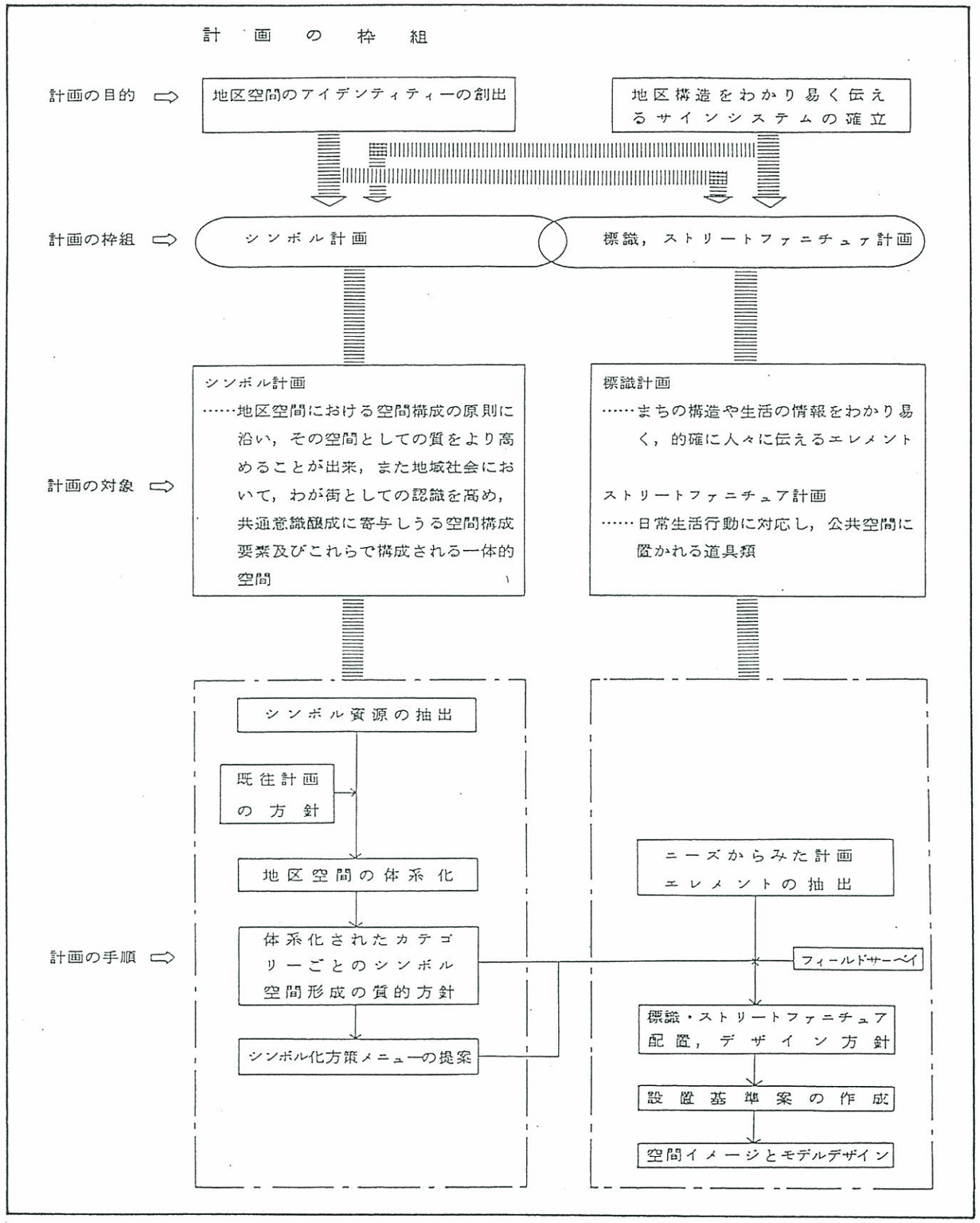


出典：港北ニュータウン・タウンセンター 市街化誘導方策検討調査

昭和58年度調査におけるサイン計画の枠組みは、「シンボル計画」と「標識・ストリートファニチュア」とに大きく分けられる。

「シンボル計画」では、地区空間の質をより高めるために、
①地区空間を体系化し
②体系化されたカテゴリーごとのシンボル空間形成の質的方針を設定し
③シンボル化方策のメニューの提案をしている。

そしてその方針の元に、「標識計画」と「ストリートファニチュア計画」を検討し、その配置とデザイン方針を設定して設置基準案を作成し、空間イメージとモデルデザインを提案している。



出典：港北地区サイン計画策定調査報告書

この調査は、
①街のアイデンティティー向上へのサポート
②地区構造のわかり易さの確立
③コミュニティーの広がりを生む装置づくり
④集約化・簡素化の確立
をサイン計画の目標とした。

そして、
①歩行者専用道路、一般道路において外来者および居住者に対し道案内を行うサインを「道しるべ」
②広大なニュータウンをまとまったイメージで結びつけるためのサインを「まちしるべ」
③人と人、人と街とのふれあいを育み、豊かなコミュニティー形成を助けるサインを「コミュニティーしるべ」
と名づけた。

配置の原則は、
①領域、圏域ごとに特徴・個性を持たせる
②必要最小限のサインで情報を伝えるために配置システムを考える
としている。また、配置場所としては、一般道路及び歩行者専用道路上、人の活動の中心となる場所やセンター広場、公園・緑道内などを想定している。

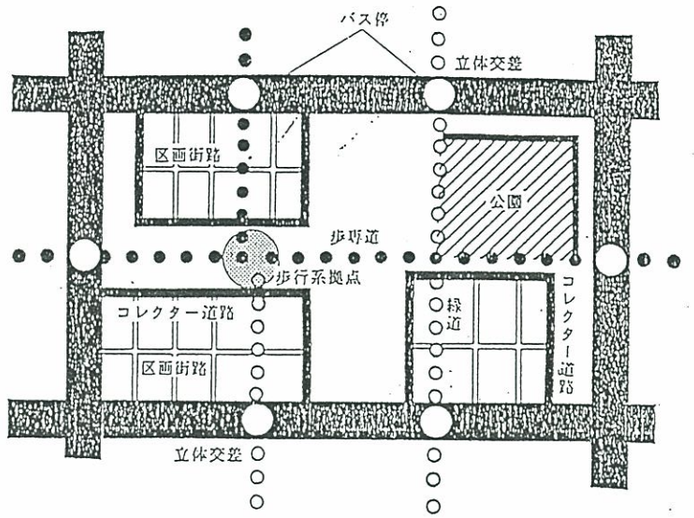
● サイン計画の目標	● サイン構成の方針	● 配置の原則
1　街のアイデンティティ向上へのサポート ・ニュータウン全体のアイデンティティをつくり、対外的にニュータウンの良好なイメージを伝達する。 ・各地区のアイデンティティをつくる。	→ まちしるべ （まちのアイデンティティを高める要素） ・シンボル・ロゴタイプ・カラリング ・形態・表示デザイン	＊ 領域、圏域ごとに特徴・個性を持たせたい。
2　地区構造のわかり易さの確立 ・居住者・外来者・通勤者を安全快適に目的地に誘導する。 ・電車・バス利用者及び、車・自転車利用者を主に対象とする。 ・人の多様な活動を補助する。	→ みちしるべ ・案内サイン　（総合案内・地区案内） ・方向指示サイン（施設へ・街区へ等） ・到達（名称表示）サイン（TEL.BOX, BUS STOP）	＊ 必要最小限のサインで情報を伝えるために配置システムを考える。 ＊ 利用者の交通手段により主に一般道路、及び歩行者専用道路上に配置。
3　コミュニティの広がりを生む装置づくり ・住民の地域社会形成を育むサイン ・人とまち、人と人とのふれあいを育むサイン	→ コミュニティしるべ・ひとしるべ ・コミュニケーション系 ・掲示板 ・コミュニティボード ・安全サイン ・レクリエーション系 ・史跡・解説サイン ・動植物解説サイン ・樹名サイン ・ジョギング・散策サイン	＊ コミュニケーション系は人の活動の中心となる場所、センター広場などに配置する。 ＊ レクリレーション系は主に公園・緑道内に配置する。
4　集約化・簡素化の確立	→ わかり易い配置システムとデザイン	

出典：港北ニュータウン・サイン基本計画

昭和58年度、60年度調査の成果を事業化するために検討が行われ、サインの利用者を歩行者、バス利用者、自動車の三つに分けて動線を検討し、サイン設置の拠点と軸を設定してモデル地区における配置案を作成した。

また、サイン計画に関係する市民局、道路局、交通局、緑政局から設置・管理に関するヒアリングと調整を行い、サイン種別・設置数・設置者・管理者・設置場所・属性・表示内容に関する具体案をまとめた。

■街路構成と利用者の動線



■モデルスタディ地区におけるサイン設置の拠点と軸

● サイン拠点	・幹線歩行者専用道路の広場部分、おおむね半径300mに1か所
	・センター広場
	・バス停
	・幹線道路の交差点
	・コレクター道路導入部
	・ニュータウン入口
● サイン軸	・幹線歩行者専用道路
	・幹線道路
	・緑道

出典：港北ニュータウンサイン計画

■港北ニュータウンにおけるサインの表示内容および設置・管理区分（案）

サイン種別	設置数	設置者	費用負担	管理者	設置場所	属性	表示内容	備　考
バス停案内板	134 バス停上り下り	公団		本体：道路局 情報：市民、道路局	バス停、シェルター付近	付属物	地区案内板（バス停中心に300mの範囲、町丁名、公共施設） 道路名称（愛称）	・案内板については、公団は事業中に、区画道路以上の全ての街路、公共施設、バス停、町丁名を記入する。 ・公団事業中に施設名称等が決定せず、事業後に情報を加える場合は、関係局が担当するのが望ましいが、版下が一つのため「原本管理」を行う局もしくは組織を決定したほうがよい。 ・上記の一元管理の場合、内容の管理は関係局が担当し、定期的に情報の行進に対応。物も書換えのみ「管理局」が行う。
バス停上（下）サイン	134	公団	公団	道路局、緑政局（底地による）	バス停上（下）、歩行者専用道路、緑道	付属物	ピクトグラム（名称、方面表示はしない）	
交差点名称サイン	交差点に4つ	公団	公団	道路局	自動車幹線道路交差点	付属物	交差点名称は既存のもの（信号機）	
駅への誘導サイン		公団	公団	道路局	同上*	付属物	駅への方向、距離*	* ニュータウン内の6駅のそれぞれに関して誘導ルートを検討。方面サインに絡めた表示が可能か。
主要公共施設への誘導サイン	124	公団	公団	道路局（市民局）	コレクター道路導入部	付属物	ブランチする公共公益施設* に限る 町丁名（街区）	（バス停案内板を同じ） * 小・中学校、主要行政施設、総合病院。
コレクター道路表示（誘導）		公団	公団	道路局	コレクター道路全線	付属物	センターライン* 、縁石等	コレクター道路と区画道路（地先道路）の区別。 * 幅員9m道路には、将来的にセンターラインが入る予定。
歩行者専用道路拠点サイン	30	公団	公団	本体：道路、緑政局（底地による） 情報：市民、道路、緑政局	近隣センター、歩行者専用道路サイン拠点	付属物	町丁名、地番 広場名称 地区案内板（センター中心に300mの範囲、町丁名、公共施設）	（バス停案内板と同じ） ・ただし、底地が緑道の場合、公園の案内板として設置できるものであるならば緑政局管理。タウンセンターは別途に検討。モニュメント的にすると占用物扱い。
駅前センター総合案内板	6	3号線は公団 4号線は未定	公団 交通局*	本体：道路、交通局（底地による） 情報：市民、道路、交通局	駅前センター	付属物	1km徒歩圏案内図（町丁名、公共施設） バス路線図（広域）	（バス停案内板と同じ） * 現在交通局で地下鉄出入口部に設置を検討。主体の調整をはかっていく。 ニュータウン外部との調整など表示内容の検討。 バス路線図に関しては交通局。
公園・緑道系サイン		公団	公団	緑政局（道路局* ）	公園内、緑道上	付属物	公園・緑地名称、ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ的ｻｲﾝﾈｯﾄﾜｰｸ、（ｸﾞﾘｰﾝﾏﾄﾘｯｸｽ 等）	* 歩専道と緑道が重なるところは、道路局と緑政局との調整が必要。
ゲート性を持たせたサイン		公団	公団	道路局		付属物 *	照明灯、ゲートツリー、彫刻、既存の橋梁を利用	* 照明および案内標識と兼ね、付属物扱いとすることを検討。例がないので扱いが難しい。
橋梁サイン		公団	公団	道路局	橋梁側面	付属物	橋梁名称のみ	
方面表示		公団	道路局 公団	道路局	幹線道路	付属物	主要方面、距離	既存のサインを補足するサインとして設置。

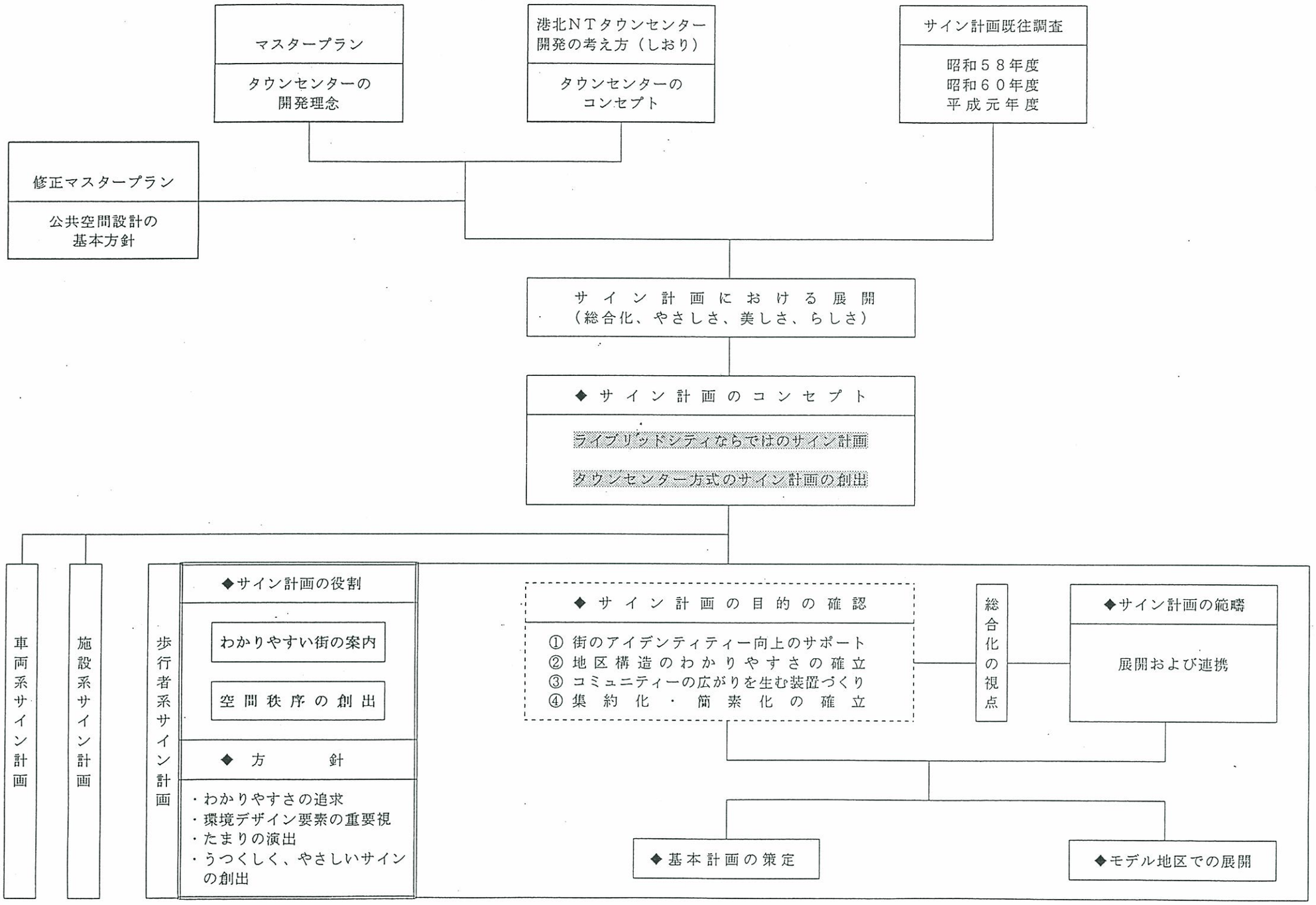
出典：港北ニュータウンサイン計画
ーサイン設置及び管理における基本方針の検討ー

２．基本コンセプトの検討

２－１ タウンセンターサイン基本計画作業フレーム
２－２ サ イ ン 計 画 の コ ン セ プ ト
２－３ サ イ ン 計 画 の 方 針

2－1 タウンセンターサイン基本計画作業フレーム

以下に、タウンセンターサイン基本計画作業フレームを示す



本計画のコンセプトとなる「ライブリッドシティーならではのサイン計画」すなわち
「タウンセンター方式のサイン計画の創出」とは、タウンセンターの開発コンセプト
をうけたサイン計画の展開であり、タウンセンターの《うつくしさ》《らしさ》を
追求するとともに、人間（生活者）中心の、使う人に《わかりやすく》《やさしい》
サイン計画を目指す。
また、総合化の促進により、都市の多機能複合に伴うわかり難さを解消し、使う人にとって
《わかりやすい》サインとする。
さらには、サイン利用者、サインの情報の対象を拡大し、都市の情報をまとめて提供する拠点を
つくることにより、コミュニティーの形成の助けとし、街の活性化を促進し、
生活・文化の情報発信拠点としてのタウンセンターの機能を十分に発揮させる。

〈 タウンセンターの開発理念 〉

1．多機能複合に基づく広域拠点の形成

2．生活・文化の情報発信拠点の形成

3．高度の都心性と自然性を備えたセンターの形成

4．個性豊かで自己主張を持つセンターの形成

〈 サイン計画における展開 〉

1．有機システムとしてのサイン計画

タウンセンター地区とその周辺、各施設の内と外、公共建築物と民間系、パンフレット系とサイン系等々の密接な融合連携をめざし有機的システムの確立をめざす。 《わかりやすさ》

2．ヒューマンメディアとしてのサイン計画

人間主体の都市の情報メディアとして、充分な機能をめざす。 《やさしさ》

3．アメニティー向上サポートとしてのサイン計画

都市的アニメティと自然的アメニティが両立した快適なタウンセンターの案内役として充分な機能をめざすとともに、サイン自体のアメニティを追求する 《うつくしさ》

4．アイデンティティー形成に寄与するサイン計画

センターの個性をアピールするシステムとデザインをめざす。 《らしさ》

〈サイン計画のコンセプト〉

ライブリッドシティーならではのサイン計画

タウンセンター方式のサイン計画の創出

本サイン計画の方針は、タウンセンターのサイン計画における展開をうけて、
《わかりやすさ》《やさしさ》《うつくしさ》《らしさ》の
創出を基本としている。

◇ サイン計画のベースであるわかりやすさを追求する → 《わかりやすさ》

・総合化の促進　・タウンセンター内でのデザインの統一
・サイン情報の集約、簡素化　・サインシステムの創出
・表示面、表示方法の工夫　・夜間の照明
・対象者の拡大

◇ 環境デザインの要素としてのサイン計画という視点を重視する → 《うつくしさ》 → 《らしさ》

・街の景観との調和　・デザインモチーフの活用
・交通標識との共架　・ＳＦ、ＳＥの利用
・ランドマークビルディング、壁面の利用
・路面の利用

◇ コミュニティーの活性化を促すたまり（情報拠点）をつくる → 《やさしさ》

・スポット（滞留型サイン拠点）の演出
・情報交換の場、コミュニティー形成の場の設定

わかりやすいだけではなくうつくしく・やさしいサイン計画が、
タウンセンターらしさを形成すると考えられる

３．本計画におけるサインの領域

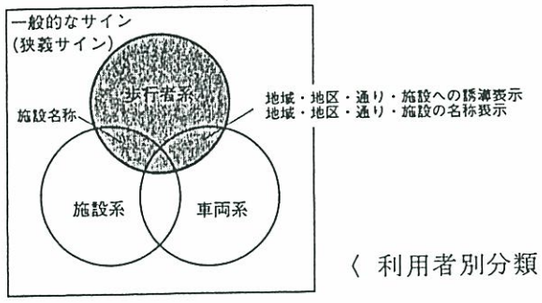
３－１ サインの分類（狭義のサイン）
３－２ サインの拡がり（広義のサイン）
３－３ 本計画の領域と他計画との連携

本計画は、歩行者系の公共サインを中心に検討を行う。ただし、施設系や車両系の接点部分は、歩行者系として取り扱う。

右図は、サインを利用者および、サインアイテムにより分類したものであり、▒▒部分は、本計画の対象部分である。

①利用者による分類（よこ軸）

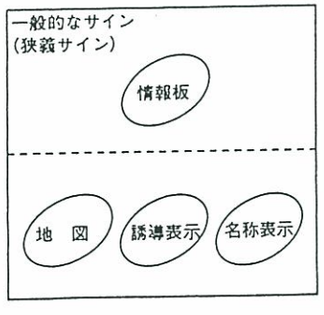
歩行者系	歩行者
施設系	交通施設利用者
	一般施設利用者
車両系	ドライバー



〈 利用者別分類 〉

②サインアイテムによる分類（たて軸）

地　図	空間の構成を示す面的な情報
誘導表示	目的地・方向・距離を表示する線的な情報
名称表示	地点や施設を特定する点的な情報
情報板	空間認識に関するハードな情報（地図・誘導表示・名称表示）以外のソフトな情報



〈 アイテム別分類 〉

〈 サインの分類 〉

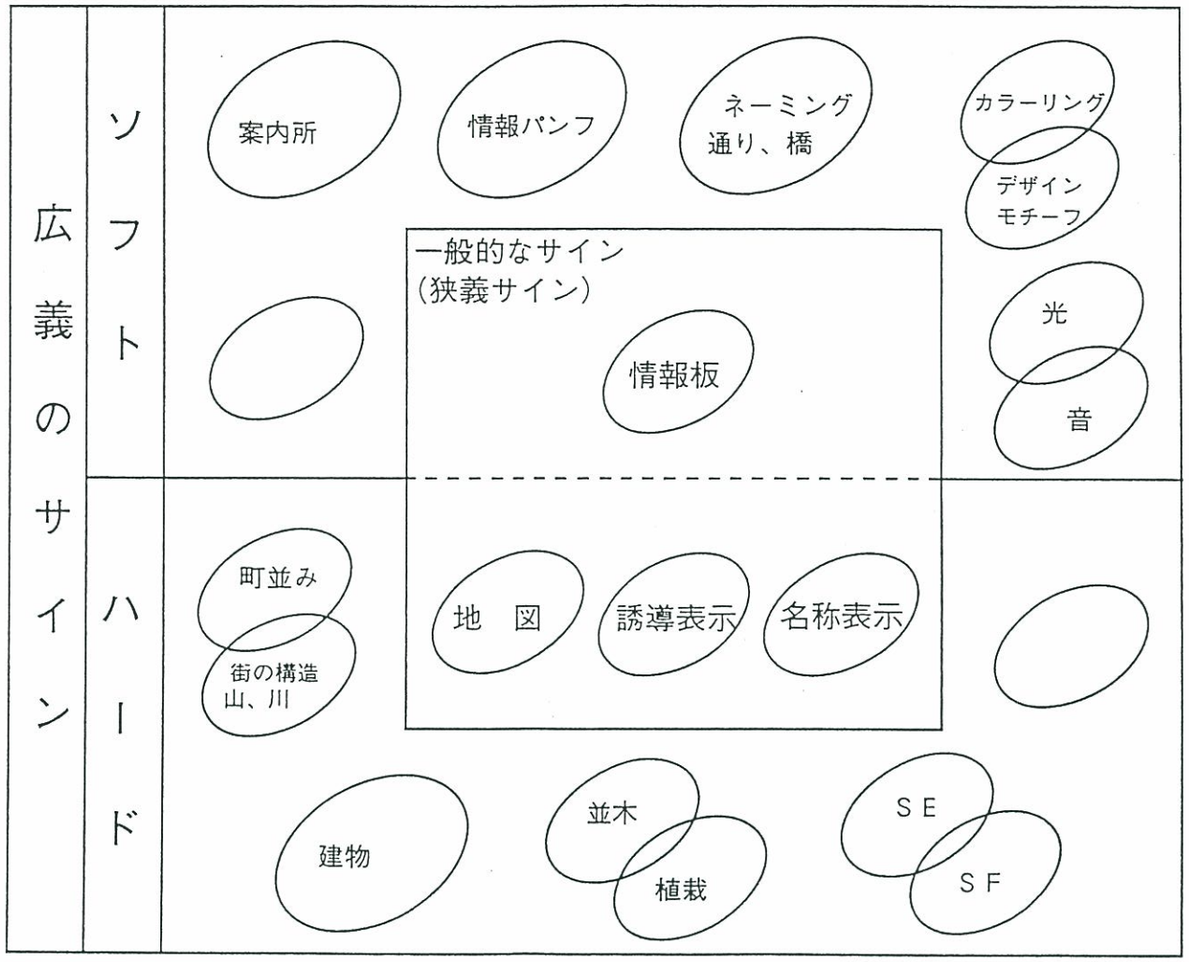
利用者 ＼ アイテム	歩行者系	施設系		車両系
	歩行者	交通施設利用者（鉄道・バス・タクシー）	一般施設利用者	ドライバー
地　図	▒広域図▒ ▒港北ＮＴ全体図▒ ▒港北ＮＴセンター▒ ▒センター南・北地区▒	▒駅周辺図▒ 構内案内図	施設内案内図	駐車場案内図
誘導表示	▒地域・地区・地点への誘導▒ ▒通りへの誘導▒ ▒主要施設への誘導▒ ▒生活関連施設への誘導▒ ▒▒▒▒(トイレ・電話等)▒	施設内での誘導 （バスターミナル・タクシー乗場 等）	施設内での誘導 （出入口・受付・案内等）	▒地域・地区・地点への誘導▒ ▒通りへの誘導▒ ▒主要施設への誘導▒ 駐車場の誘導
名称表示	▒地域・地区・地点の表示▒ ▒通りの表示▒ ▒主要施設の表示▒ ▒生活関連施設の表示▒	施設名の表示 （駅名表示・バス停等） 施設内の表示 （出入口　等）	▒施設名の表示▒ 施設内の表示 （出入口・受付・トイレ・エレベーター・エスカレーター・公衆電話）	▒地域・地区・地点名の表示▒ ▒通り名の表示▒ ▒主要施設名の表示▒ 駐車場の表示
情報板	▒案内板▒ ▒掲示板▒ ▒伝言板等▒	施設利用案内板 （地下鉄情報） （バス情報）	施設利用案内板 （利用方法　等）	交通情報板 （事故・渋滞・注意）
その他のサイン	仮設標識・路面サイン 交通標識の歩行者用 （規制・指示標識） 位置標識 避難場所案内図 避難場所への誘導板 避難場所の表示 防災用具の表示	仮設標識 非常口誘導板	仮設標識 非常口案内板 非常口誘導板	交通標識の車両用 （警戒・規制・指示標識） 仮設標識

一般的な意味でのサイン（狭義のサイン）について、３－１で検討したが、
ここでは視野を少し広げ、広義のサインについて述べる。

広義のサインの概念図を右図に整理した。（図中、狭義サインはアイテム）

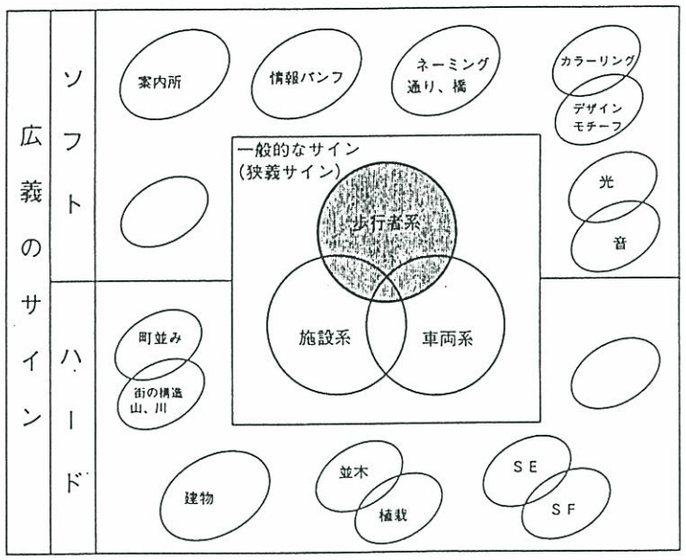
町並みを形成する構成要素（例えば、山、川、樹木、建物、ストリートファニチャー）は、我々歩行者の行動をガイドする重要な情報といえる。
また、案内所での説明や情報パンフレット、 通り名や町名や交差点名などのネーミング、時報や鐘の音等の音、レーザー光線やライトアップ効果の光、などの要素も、我々歩行者の行動をガイドする情報となる。
以上を広義のサインと呼び、前者を広義のサインのハードな情報、後者を広義のサインのソフトな情報と位置づけ、検討の対象に加える。

〈ハードな情報〉
◆自　　然…街の構造、地形（高低差）、山、川、街並、
◆土木・造園物…並木、植栽、橋、ゲート、噴水、ポケットパーク
◆建　　築…特徴的な建物、建築壁面
◆Ｓ　　Ｆ…街路灯、信号、ベンチ、電話ボックス、ポスト、ごみ箱、水のみ場、公衆トイレ
◆Ｓ　　Ｅ…マンホール、消火栓、ボックス類（配電箱）
〈ソフトな情報〉
◆案　内　所…人による案内
◆情報パンフ…地図と内容をそろえ、街の主要ポイントに設置
◆ネーミング…通り、交差点、町名、橋
◆　　ＣＩ　…カラーリング、ロゴ、シンボルマーク、デザインモチーフ
◆音　・　光…時報、光の発信、ライトアップ



サイン計画対象領域概念図

サインが対象とする範囲は広く、様々な分野に及ぶが、本計画ではそのうち、狭義のサインのなかの歩行者系を主体として展開している。
しかし、《わかりやすさ》《やさしさ》《うつくしさ》《らしさ》の創出には、歩行者系サインの整備だけでは限界があり、他計画との連携が今後のサイン計画の重要な課題となる。
他計画との連携の内容を下の表に示す。他計画との連携についての具体的な内容や問題点等は、６章　今後の検討事項で整理する。ここでは、ソフト面、ハード面において、どのような計画との連携を考慮すべきかを述べるにとどめ、参考事例を次頁以降に揚げる。



（図中、狭義サインは利用者別分類）

歩行者系サインと連帯すべき計画

ソフト	内容の整合	・施設系（交通、一般）サイン ・車両系サイン ・タウンセンター周辺地区（ＮＴ全体）サイン ・民間サイン ・情報パンフ
ソフト	デザインの統一	・施設系サイン　・ロゴ ・車両系サイン　・シンボルマーク ・ＳＦ　・シンボルカラー ・ＳＥ　・デザインモチーフ
ハード	共架の推進	・施設系サイン ・車両系サイン
ハード	付帯化の推進	・建築計画（壁面） ・土木、造園計画（親柱等 etc.） ・ＳＦ ・ＳＥ

タウンセンターらしさの創出

わかりやすさ
やさしさ
うつくしさ
らしさ

４．配置計画の検討

４－１ 計画上の留意点
4-1-1 歩　行　者　動　線
4-1-2 タウンセンターの環境把握
4-1-3 配　置　の　手　順
４－２ サインアイテムの役割と配置計画
4-2-1 地図の役割と配置
4-2-2 名称表示の役割と配置
4-2-3 誘導表示の役割と配置
4-2-4 情報板の役割と配置
４－３ サインシステムの形成
4-3-1 アイテムの組み合わせとサインシステム
4-3-2 単体系・複合系・メディアコア系の考え方
4-3-3 単体系・複合系・メディアコア系の配　置
４－４ 配置計画案
4-4-1 北地区サイン配置図
4-4-2 北地区サイン一覧表
4-4-3 南地区サイン配置図
4-4-4 南地区サイン一覧表

3章で述べたとおり、歩行者系サインを中心に計画を行う。
歩行者にとって、やさしく、わかりやすい計画とするためには、人の流れ（歩行者動線）に留意した配置計画の検討が必要である。
まずタウンセンターの環境把握（次頁参照）を行った。

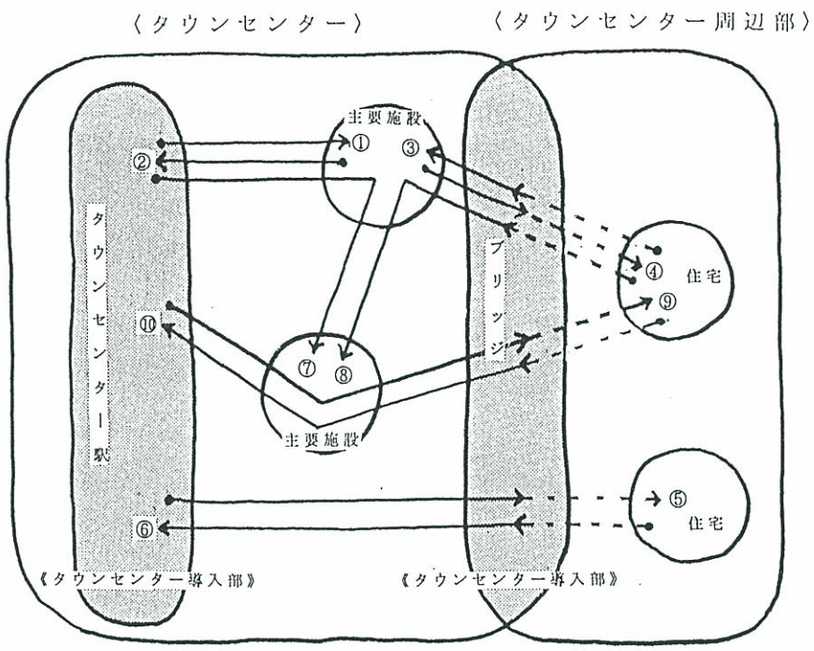
①タウンセンター地区の地形を的確にとらえて、その高低差やVIEW POINTを把握する
②タウンセンターへのアクセスポイント（導入部）を把握する
アクセスの方法としては鉄道、バス、車、徒歩があり、その場合のタウンセンターへの導入部は、駅、バスターミナル・バス停、駐車場、ブリッジである。
③街区の特色や建物構成、ランドマークとなる建物を把握し、タウンセンター内の主要ポイントを明確にする
主要ポイントとは、目的地となる主要施設のことで、区総合庁舎、歴史博物館等、次頁の　図中に示した。

次に、上記のポイントを考慮して、人の流れ（歩行者動線）を分類した。
（右図参照）

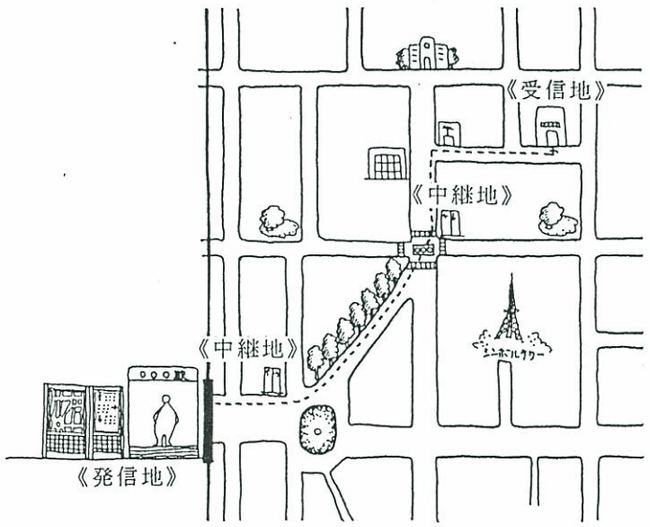
① タウンセンター駅から主要施設へ
② 主要施設からタウンセンター駅へ
③ 周辺住宅から主要施設へ
④ 主要施設から周辺住宅へ
⑤ タウンセンター駅から周辺住宅へ
⑥ 周辺住宅からタウンセンター駅へ
⑦ タウンセンター駅からある主要施設を経由して他の主要施設へ
⑧ 周辺住宅からある主要施設を経由して他の主要施設へ
⑨ タウンセンター駅からある主要施設を経由して周辺住宅へ
⑩ 周辺住宅からある主要施設を経由してタウンセンター駅へ

上記ルートの
導入部において、街の構造や現在地・目的地の確認、
　→地　図が有効　いわば情報の《発信地》としての機能を果たす。
中継地において、現在地の確認と目的地までの方向や距離の確認、
　→誘導表示が有効　いわば情報の《中継地》としての機能を果たす。
目的地において、確かに目的地であることの確認、
　→名称表示が有効　いわば情報の《受信地》としての機能を果たす。
が、必要である。

この情報の《発信地》 → 《中継地》 → 《受信地》というネットワーク概念（右下図参照）を導入してサイン計画を進めることとする。
なお、サイン配置の間隔は、“５分以上迷わない”ことを原則に、最低３５０ｍを目安とする。

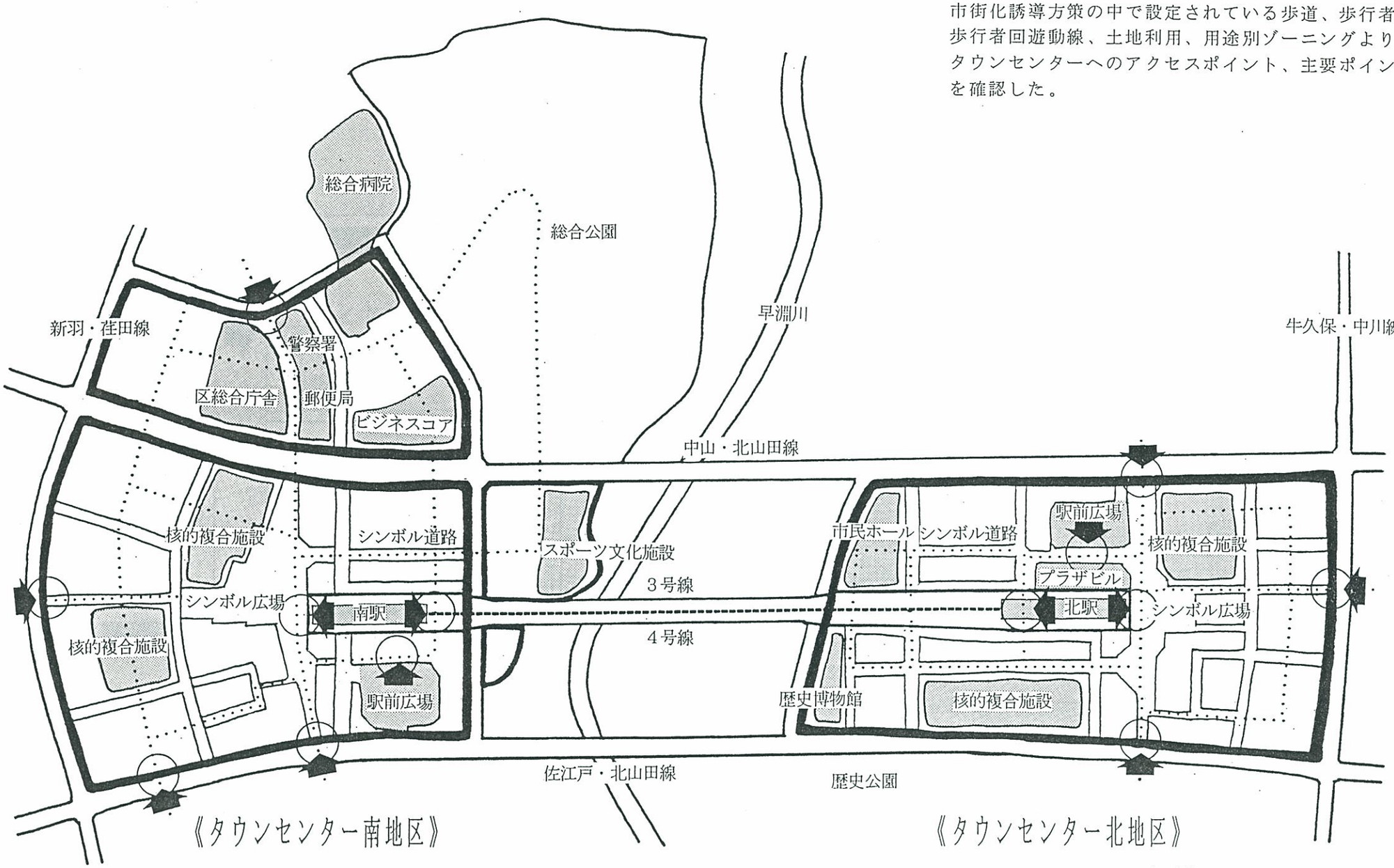


〈タウンセンターでの人の流れ〉



情報のネットワーク

市街化誘導方策の中で設定されている歩道、歩行者専用道路構成、歩行者回遊動線、土地利用、用途別ゾーニングより、歩行者のタウンセンターへのアクセスポイント、主要ポイント、人の流れを確認した。



〈凡例〉
- ：アクセスポイント
  主に駅、バスターミナル、
  タウンセンター周辺のブリッジである
- ：主要ポイント
  主に公共公益施設をさす
- ・・・・・：人の流れ（歩行者の主要動線）

街路構成

土地利用
ゾーニング

タウンセンターの環境把握

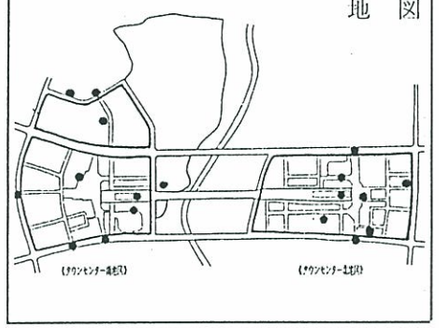
アクセスポイント

主要ポイント

人の流れ

地図の設置
タウンセンター導入部の選択
コミュニティ形成拠点の選択

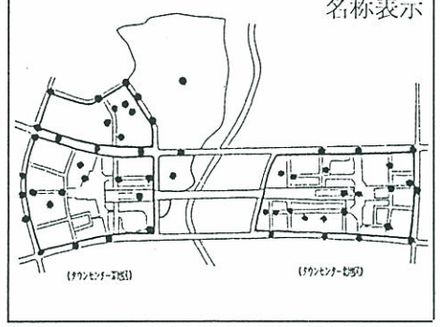
発信



ＥＸ：駅、バスターミナル、駐車場
タウンセンター周辺ブリッジ
シンボル広場
区総合庁舎前

名称表示の設置
目的地の選択
目印の選択

受信



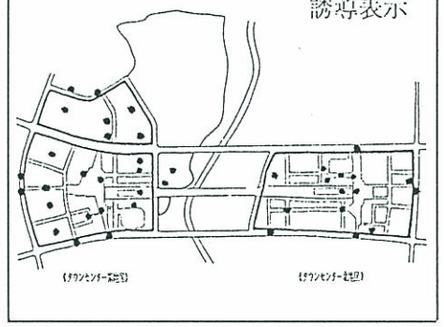
ＥＸ：主要施設、
通り、ブリッジ、交差点

5分以上迷わないか
を確認

不足を追加
（最低350mごと）

誘導表示の設置
誘導地点の選択

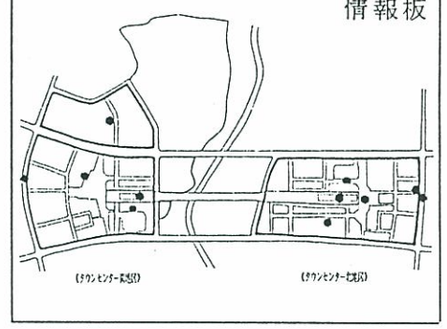
中継



ＥＸ：人の流れの分岐点
主要施設で誘導の必要な地点

情報板の設置
コミュニティ形成拠点の選択

発信



ＥＸ：駅、
シンボル広場
区総合庁舎前
東側モールエントランス広場
北側街区入口

サインの数	南　北　計	南　北　計	南　北　計	南　北　計
	１０＋　８＝１８ケ所	３３＋２３＝５６ケ所	２６＋１６＝４２ケ所	３＋　４＝　７ケ所

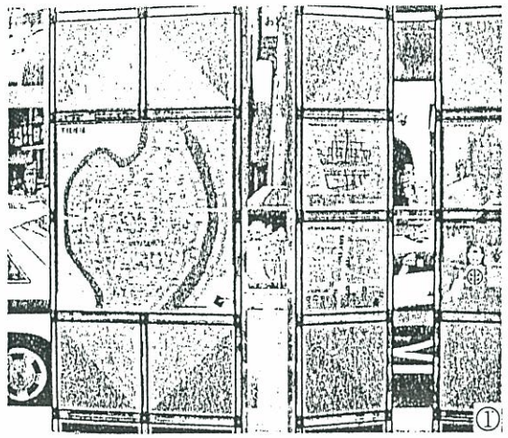
◇地　図

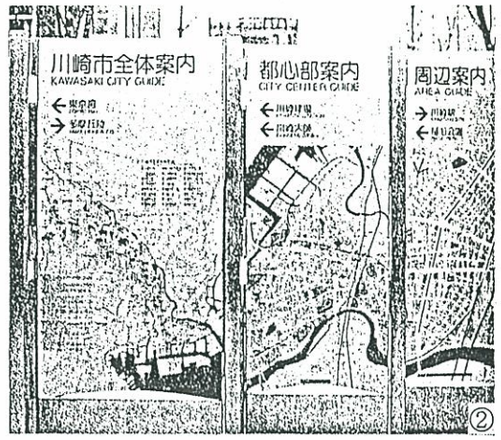
（a）役　　割　空間の構成を示す面的な情報
利用者が選択的に情報を抽出できるので、多様な目的に対応できるが、表現が煩雑にならないように、必要最少限の情報で構成する。

（b）表 示 内 容　広域図
港北ＮＴ全体図
港北ＮＴタウンセンター
タウンセンター南・北街区

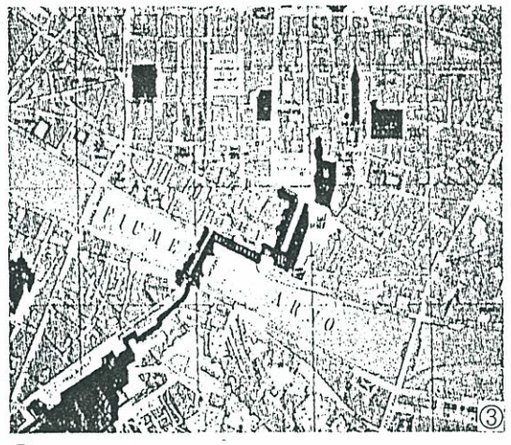
（C）配置の考え方　タウンセンターへの導入部（アクセスポイント）と、人が集まり、コミュニティー形成の拠点となる地点に配置する。
地図のエリアは、配置場所により、適宜選択する。

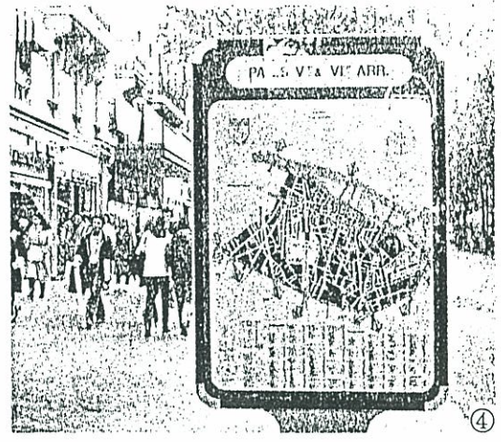
EX. 駅、バスターミナル、立体駐車場、
タウンセンター周辺ブリッジ、シンボル広場、
東側モールエントランス広場、北側街区入口、
区総合庁舎前


①



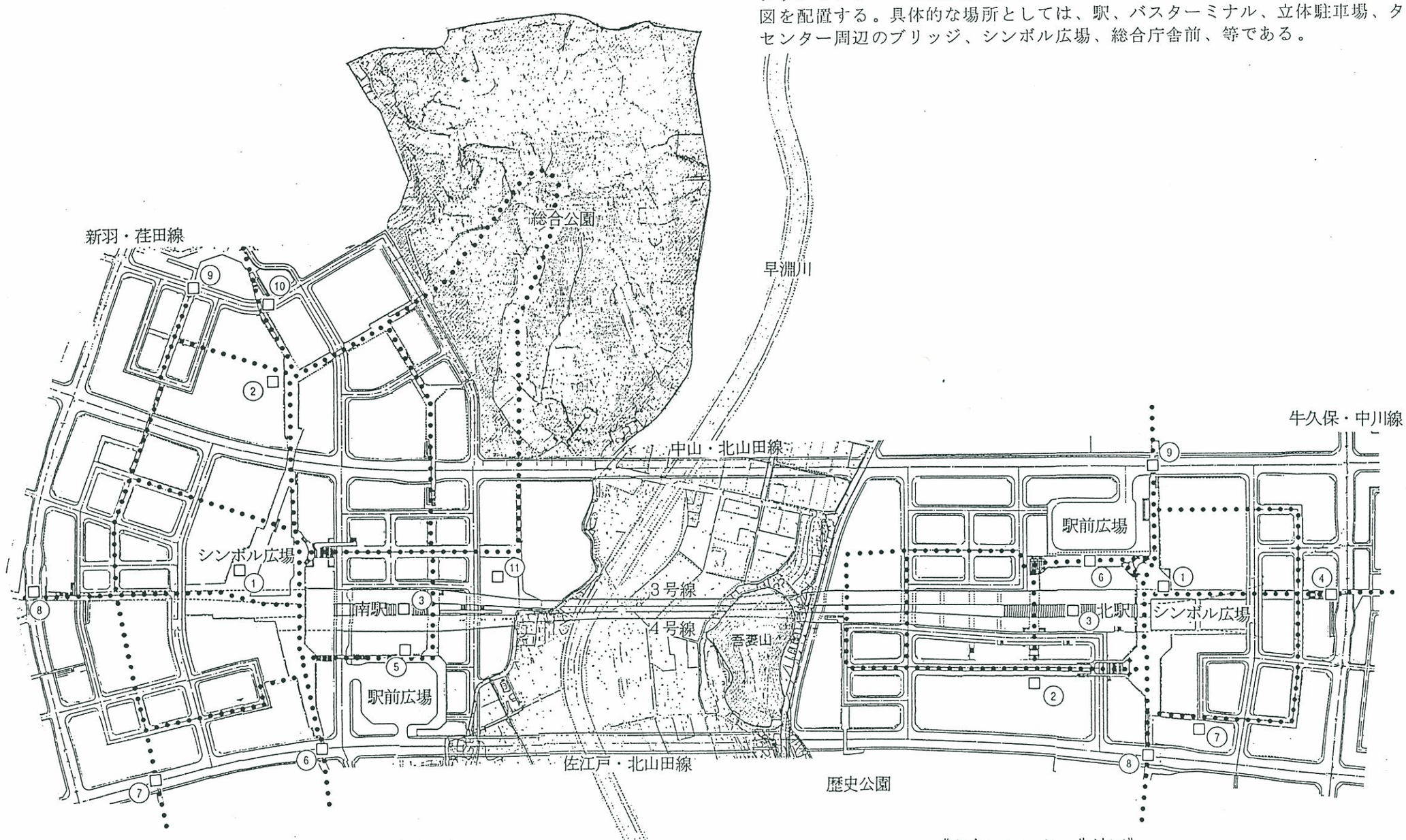
②


③


④

① 様々な内容を案内する総合案内板―東京足立区
② 広い街の地域を段階的に表示案内する―川崎市
③ 特徴ある建物を立体的に表現した案内地図―フローレンス
④ 必要な情報だけを表示し分かりやすくデザインされた路線図―パリ

タウンセンターへの導入部（アクセスポイント）と、コミュニティー形成拠点に地図を配置する。具体的な場所としては、駅、バスターミナル、立体駐車場、タウンセンター周辺のブリッジ、シンボル広場、総合庁舎前、等である。



〈凡例〉

・・・・・ ： 人の流れ（歩行者の主要動線）

□ ： 地　　図

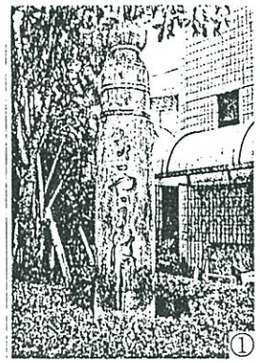
◇名称表示

（a）役　　割　地点や施設を特定する点的な情報。
自己と他を区別し、確かにその地点でありその名称であることを証明する。

（b）表 示 内 容　名称（施設名、通り名等）
地名・地番

（c）配置の考え方　まず、誘導の目的地となる主要施設に配置する。
次に、目印となる通り、交差点、タウンセンター端部の幹線道路やブリッジ等、現在地確認に有効な地点に配置する。特にタウンセンター端部の幹線道路やブリッジは、周辺部からタウンセンターに入ってくる人たちに、ここよりタウンセンターであることを認識させるために必要である。

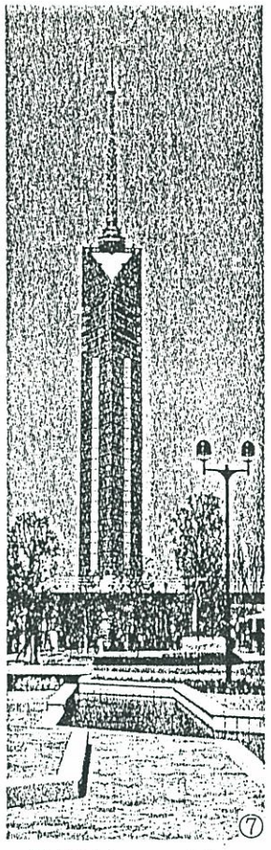
EX.　主要施設：駅、シンボル広場、核的複合施設、
区総合庁舎、市民ホール、警察署、歴史博物館、
スポーツ・文化施設、郵便局、総合病院、
目印：通り、モール、ブリッジ



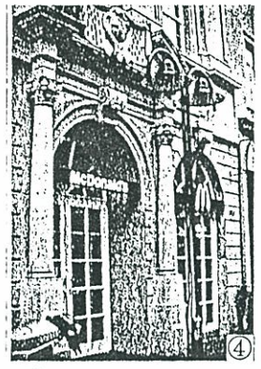
① 京橋の記念碑

② 浅草寺の雷門

③ 東京のバス停

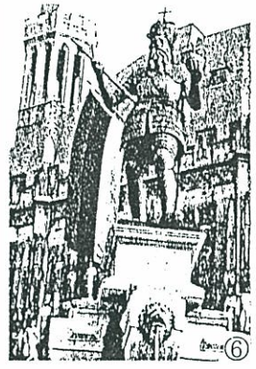


⑦ 福岡タワー、現代の位置標、ランドマークとして機能を発揮



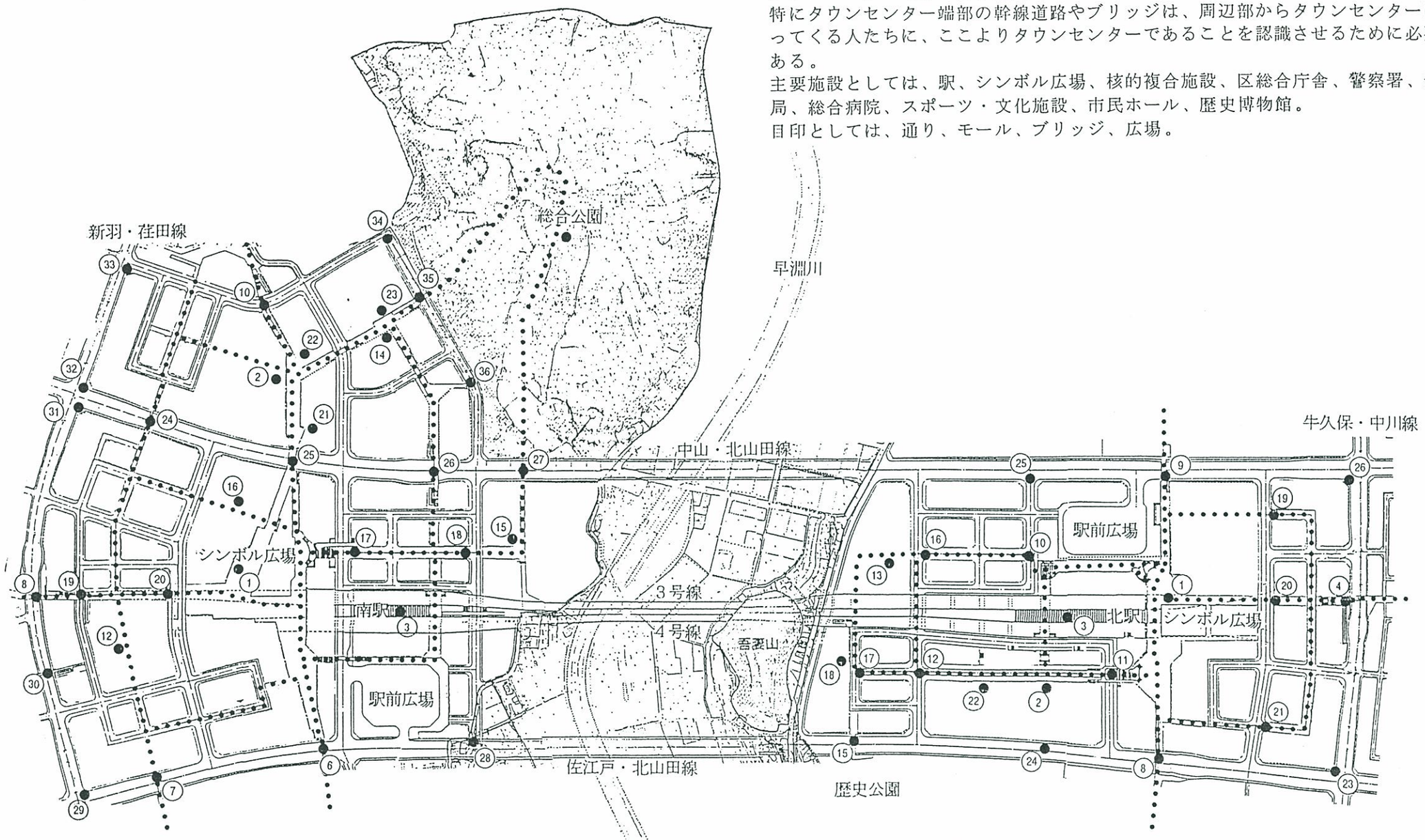
④ 厳しい景観規制で知られるハイデルベルクの店頭サイン

⑤ パリの個性を感じさせる町名街区サイン



⑥ 街を象徴する彫刻（アーヘン）

まず、誘導の目的地となる主要施設に配置する。次に、目印となる通り、交差点、タウンセンター端部の幹線道路やブリッジ等、現在地確認に有効な地点に配置する。特にタウンセンター端部の幹線道路やブリッジは、周辺部からタウンセンターに入ってくる人たちに、ここよりタウンセンターであることを認識させるために必要である。
主要施設としては、駅、シンボル広場、核的複合施設、区総合庁舎、警察署、郵便局、総合病院、スポーツ・文化施設、市民ホール、歴史博物館。
目印としては、通り、モール、ブリッジ、広場。



◇誘導表示

（a）役　　割　目的地、方向、距離などの線的な情報。
地図読み取れない人も、目的地への方向や距離を確認することができる。

（b）表 示 内 容　目的地（方面・施設名称等）
方向（矢印）
距離もしくは所要時間

（c）配置の考え方　タウンセンターの導入部、歩行者の分岐点、コミュニティー形成拠点、手がかりとなるサインが、３５０m以内にない地点に、配置する。

EX.　駅、バスターミナル、立体駐車場、
タウンセンター周辺ブリッジ、シンボル広場、
東側モールエントランス広場、北側街区入口、
区総合庁舎前

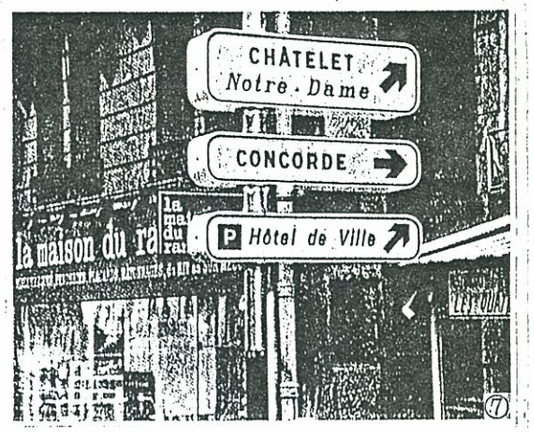
① 自然石の道標
（ラーハーゼー）

② 行先の誘導
（チューリッヒ空港）

③ 西ドイツの道路案内標識
青：アウトバーン
黄：近郊都市
白：市内著名地点

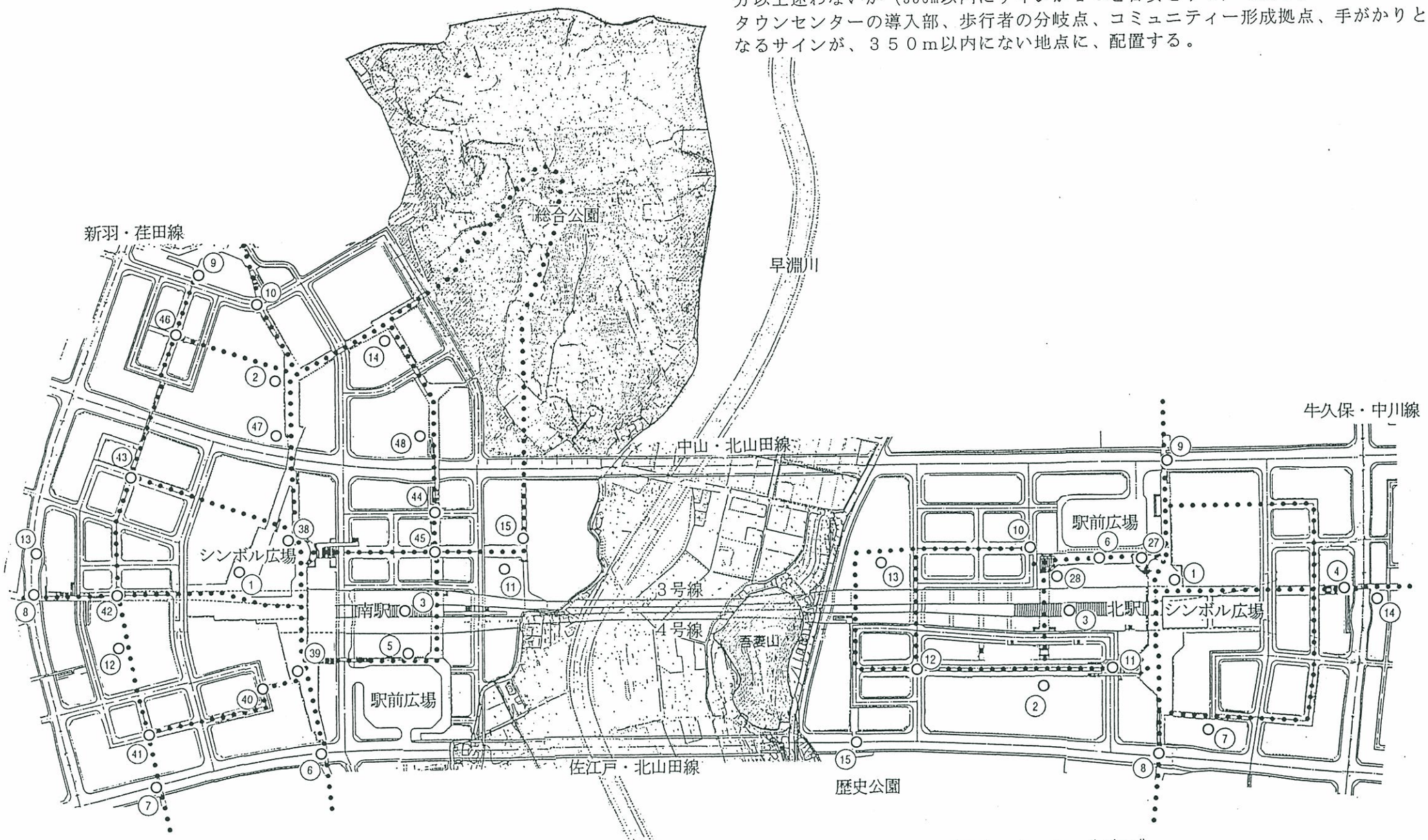
④ ピクトグラムを利用した簡潔な誘導サイン(西ドイツ)

⑤ 親しみやすい町の誘導サイン
（モーゼル）



⑥ 表示板の設置方向が施設の方向を示す
⑦ はっきりと見やすい方向誘導サイン

配置場所の選択基準は、主要施設および外部住宅街への誘導はできているかと、５分以上迷わないか（350m以内にサインが１つを目安とする）である。
タウンセンターの導入部、歩行者の分岐点、コミュニティー形成拠点、手がかりとなるサインが、３５０m以内にない地点に、配置する。



《タウンセンター南地区》　《タウンセンター北地区》

〈凡例〉
・・・・・：人の流れ（歩行者の主要動線）
○：誘導表示

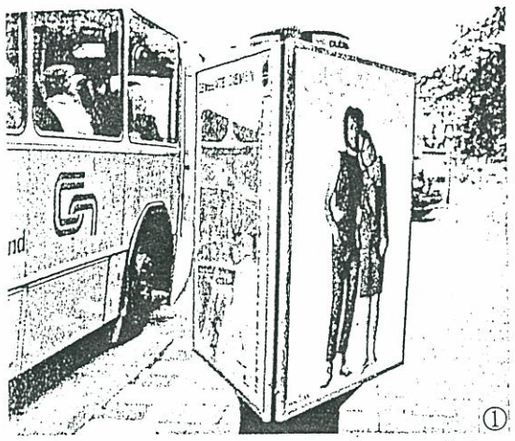
◇情　報　板

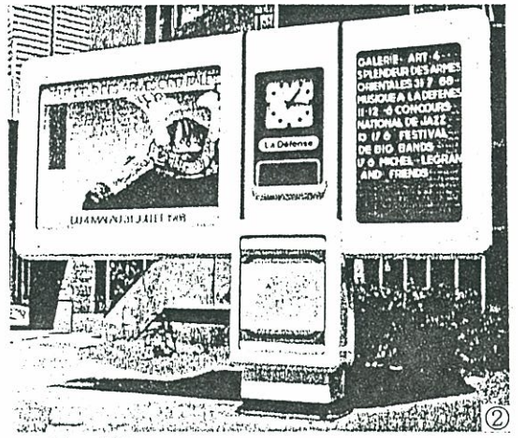
（a）役　　割　空間認識に関わるハードな情報ではなく、街のインフォメーションや情報交換に関わるソフトな情報（街や市の案内・催事、生活関連情報等）を提供する。

（b）内　　容　案内板
伝言板
掲示板

（c）配置の考え方　コミュニティ形成拠点となる情報の《発信地》に配置する

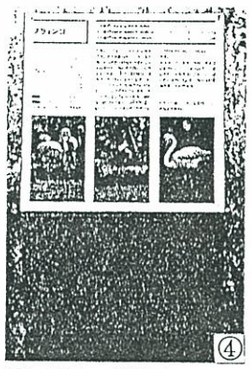
EX. 駅、シンボル広場、区総合庁舎前、
東側モールエントランス広場、北側街区入口





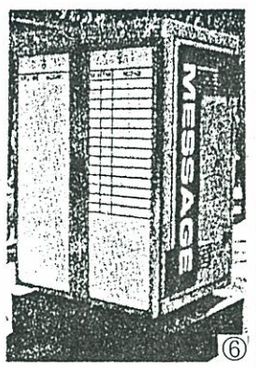
① 町名表示板、地図、ポスターボードの一体化　アムステルダム
② バス停表示板、時計、ポスターボードの一体化　パリ

③ ポスターボード　ブリュッセル



④ 動物の学習サイン

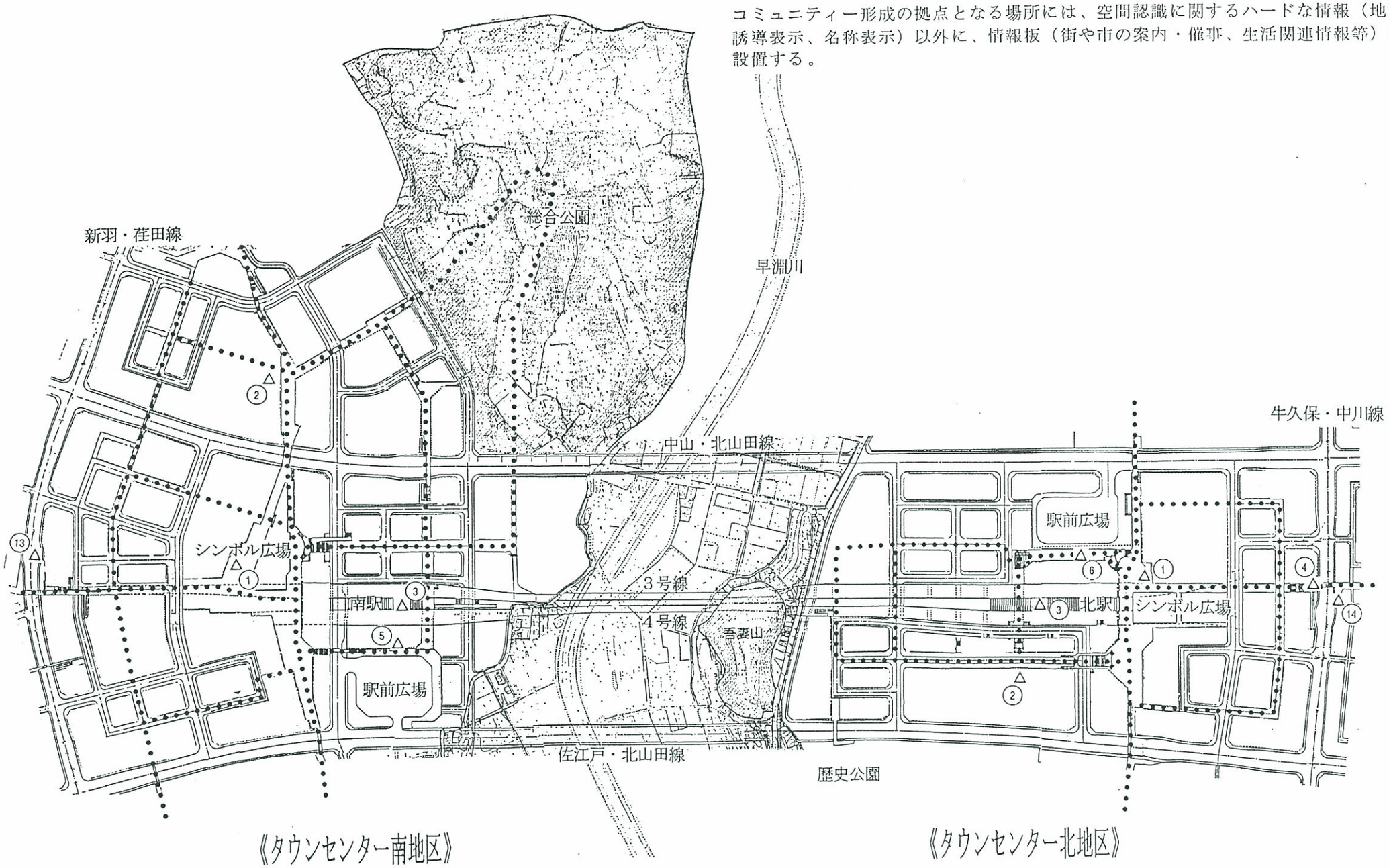
⑤ ポスター掲示板
チューリッヒ



⑥ メッセージボード

⑦ パリの電光掲示板

コミュニティー形成の拠点となる場所には、空間認識に関するハードな情報（地図、誘導表示、名称表示）以外に、情報板（街や市の案内・催事、生活関連情報等）を設置する。



〈凡例〉

・・・・・：人の流れ（歩行者の主要動線）

△　：情報板

サインアイテムごとの配置については、４－２で述べた。
ここでは、配置場所によるアイテムの組み合わせについて述べる。

サインが配置された場所に注目する。
単独のアイテムにより成立している処を単体系とよび、
複数のアイテムにより成立している処を複合系とよぶ。
後者の場合、その組み合わせも色々である。
情報板が組み合わされたものは、単なる通過型のサインではなく、滞留を促すサイン拠点と位置づけ、特にメディアコアとよぶことにする。
更に、メディアコアは、ストリートファニチャー（ベンチ、水飲み場、時計、電話等）を併せて設置することにより、快適に滞留できるスペースとすることを提案する。
これら、滞留の快適性を高める装置をスポットとよぶことにする。

以上を右図にまとめる。
単体系 →複合系 →メディアコア系とサインをみると、 →の方向に向かい、通過型から滞留型へその質が変化する。
メディアコア系の特徴は、単にサインを見るだけでなく、待ち合わせをしたり、ベンチに腰掛けてひと休みしたりといった滞留行為が、快適にできることである。

なお、タウンセンターを特徴づけるサインとして、光の発信塔を配置する。タウンセンターの南北に分断された地形、傾斜を勘案し、南北のそれぞれ眺めがよく、見通しのよい地点（VIEW POINT）と、シンボル広場に、光の発信塔を設けることとする。光の発信塔もスポット装置とみなし、VIEW POINTをメディアコアの一種として取り扱うこととする。

以上、設置場所の特性にあわせて、サインが組み合わされて設置されていくことにより、タウンセンターのサインシステムが形成されている。

通過型 ↑ ↓ 滞留型

アイテム ＼ 組み合わせ	地　図	誘導表示	名称表示	情報板	スポット
単体系	誘導表示か名称表示の単体による情報がある				
複合系	地図・誘導表示・名称表示の二つ以上の組み合せからなる複合型の情報がある			バス情報	
メディアコア系	地図・誘導表示・名称表示といった空間の認識に関するアイテム以外に、コミュニティ形成拠点に必要な情報板やスポットがある				

単体系・複合系・メディアコア系のそれぞれの特徴と情報の内容について、設置場所毎に整理した。
単体系 → 複合系 → メディアコア系の変化に伴い通過型から滞留型へと変化し、サイン拠点としての重要度も増していく。
南北のシンボル広場のメディアコアは、地図、誘導表示、名称表示、情報板、スポット装置が揃い、滞留型サインの集大成となっている。

単体系

◇誘導表示か名称表示の単体による情報がある
◇情報《受信地》となる施設や《中継地》で目印となる通りや建造物に名称表示を、同じく《中継地》で人の流れの分岐点や目的地までの道筋の350以内毎に誘導表示を設置する。
◇単体による通過型サインである。目的地の確認と中継地点での確認の役割を担う。
共架や付帯化を図ることが、必要。

	地図	誘導表示	名称表示	情報	スポット
分岐点		○			
主要施設・目印			○		

複合系

◇地図・誘導表示・名称表示の二つ以上の組み合せからなる複合型の情報がある
主に情報の《発信地》であり、地図＋誘導表示＋名称表示、地図＋誘導、地図＋名称表示という地図を主体とした組み合せである
◇情報の《発信地》であるブリッジや、バスターミナル、もしくは、情報の《中継地》である振り分け（誘導）の必要な主要施設に設置する
◇タウンセンターへの導入部、もしくは人の流れが多い場所に設置する、複合型の拠点であるが、メディアコア系と異なり、通過型の装置を展開する

	地図	誘導表示	名称表示	情報	スポット
バスターミナル	○	○		○ バス	
バス停		○	○	○ バス	
ブリッジ	○	○	○		
駐車場	○	○			
主要施設		○	○		

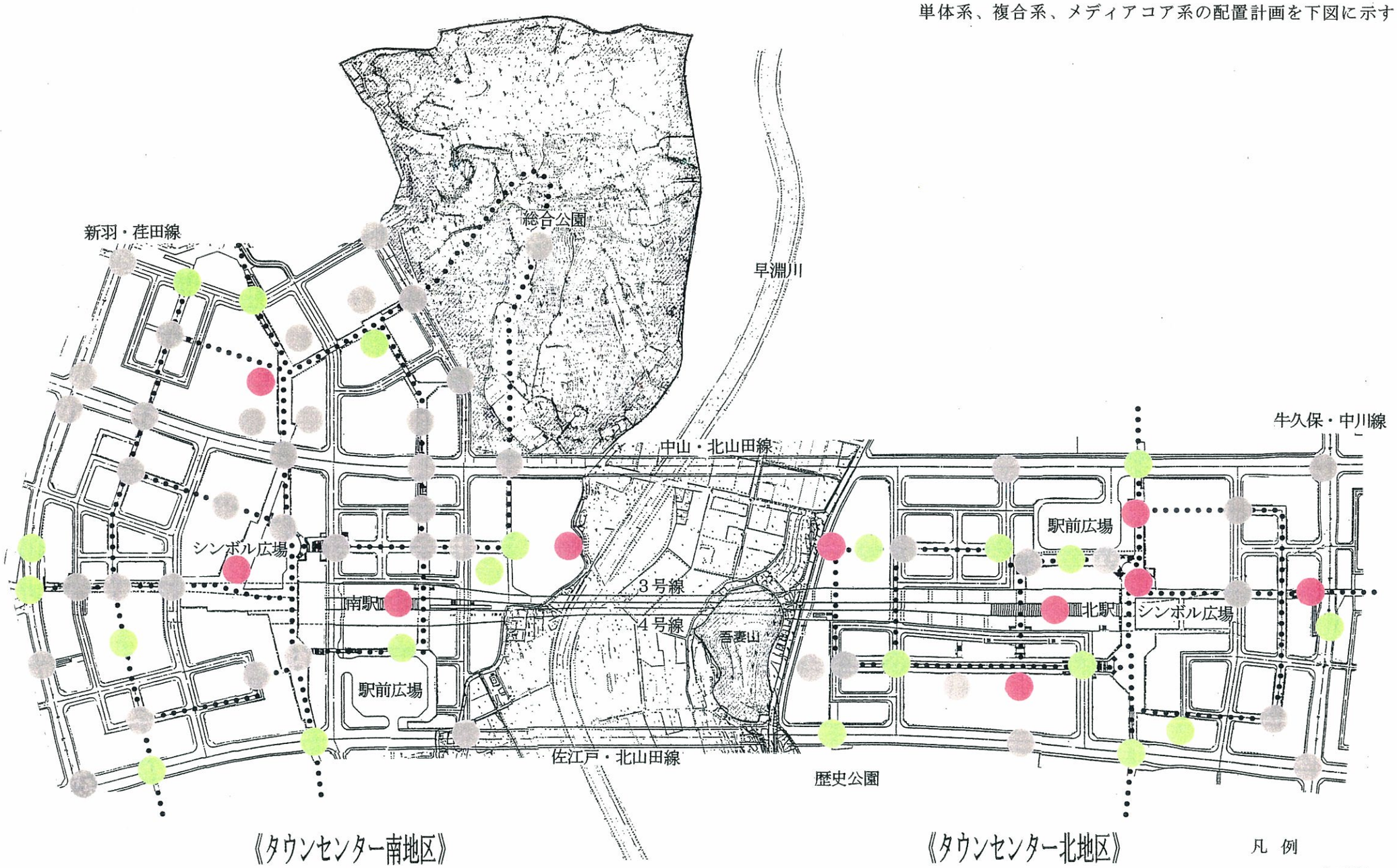
メディアコア系

◇地図・誘導表示・名称表示といった空間の認識に関するアイテム以外に、コミュニティー形成拠点に必要な情報板やスポットがある。
◇情報の《発信地》となる、街のシンボル的な場所・人の集まる場所・主要交通機関の駅・眺めがよく見通しのよい光の発信地として適切な場所に設置する。
◇コミュニティー形成拠点として、人が集まり、滞留する空間・装置を演出する。
◇各々の場に名称（愛称）をつける。

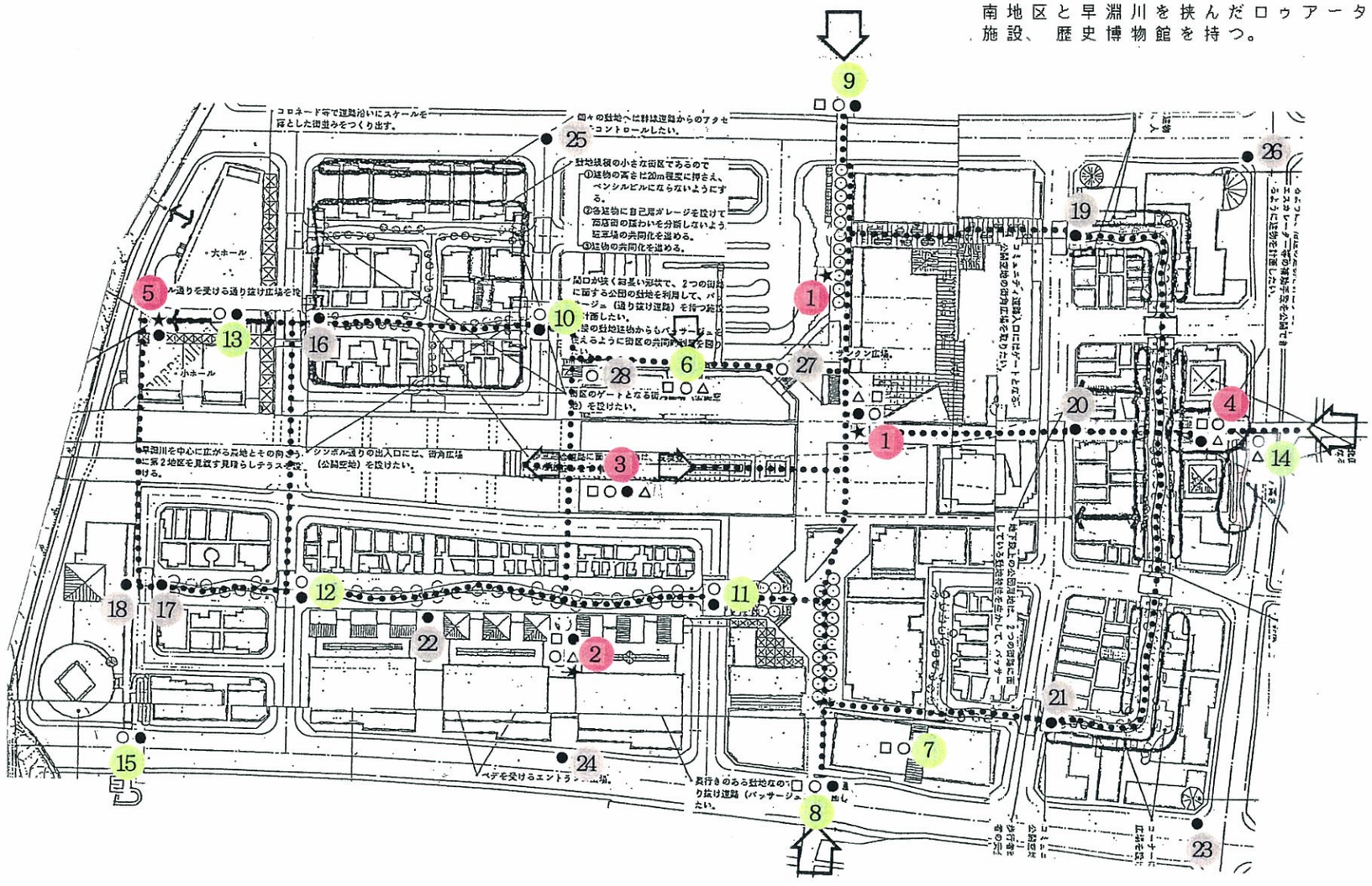
	地図	誘導表示	名称表示	情報	スポット
シンボル広場	○	○	○	○	◎ 模　光　SF
区総合庁舎	○	○	○	○	○ 模
東側モールエントランス広場	○	○	○	○	○
駅	○	○	○	○ 伝	
スポーツ文化施設前 市民ホール前			○		○ 光

〈凡例〉模：模型、光：光の発信機、ＳＦ：ストリートファニチャー、バス：バス情報、伝：伝言板

単体系、複合系、メディアコア系の配置計画を下図に示す。



《タウンセンター北地区》
北地区は南北に700m、東西に400mと広がり、面積は２８ha、アッパータウンとロウアータウンの高低差は13.0mある。
北街区の施設規模ゾーン別面積は、核的複合施設系3.7ha、大規模商業系1.2ha、中小規模商業系3.3ha、業務系1.5ha、商業・住宅系1.9ha、その他3.8haで、合計１５．４haとなっている。
南地区と早淵川を挟んだロウアータウン側に、文化系ゾーンがあり、市民文化施設、歴史博物館を持つ。



〈 凡　　例 〉

□	：	地　　図	
○	：	誘導表示	方向（行先）、距離
●	：	名称表示	通り、施設、交差点、橋
△	：	情報板	街・市の案内（ポスター） 伝言板、TEL、時計
★	：	スポット	模型、光の発信 ストリートファニチャー
⇨	：	アクセスポイント	
••••	：	人の流れ	
●	：	メディアコア系	
●	：	複合系	
●	：	単体系	

	No.	位　置	□ 地 図	○ 誘導表示	● 名称表示	△ 情報板	★ スポット	備　考
メディアコア系	1	シンボル広場	○	○	○ 広場 or スポット名	○ 街の情報	○ 模 型 光の発信	
	2	東側モール・エントランス広場	○	○	○	○ 街の情報	○	
	3	駅	○	○	○ 駅舎 （3ヶ所）	○ 伝言板		待ち合わせスポット
	4	北側街区入口	○	○	○ 通り名 ブリッジ名	○		
	5	市民文化ホール中			○		○ 光の発信	
複合系	6	駅広前（駅への通路）	○	○		○ バス情報		駅利用者 の誘導 バス利用者 〃 地下鉄利用者 〃
	7	立体駐車場	○	○				
	8	東側ブリッジ（右）	○	○	○ ブリッジ 通り名			
	9	西側ブリッジ	○	○	○ ブリッジ 通り名			
	10	西側モール		○ 市民ホールへ	○ モール 通り名			
	11	東側モール（右）		○	○ モール			
	12	東側モール（中）		○	○ モール 通り名			
	13	市民文化ホール		○ センター南へ 施設内通路	○ ホール			
	14	北側バス停		○		○ バス情報		
	15	東側ブリッジ（左）		○ 遺跡へ	○ ブリッジ 通り名			位置；橋の手前に

《メディアコア系》
◇地図・誘導表示・名称表示といった空間の認識に関するアイテム以外に、コミュニティー形成拠点に必要な情報板やスポットがある。
◇情報の《発信地》となる、街のシンボル的な場所・人の集まる場所・主要交通機関の駅・眺めがよく見通しのよい光の発信地として適切な場所に設置する。
◇コミュニティー形成拠点として、人が集まり、滞留する空間・装置を演出する。
◇各々の場に名称（愛称）をつける。

《複合系》
◇地図・誘導表示・名称表示の二つ以上の組み合せからなる複合型の情報がある。
主に情報の《発信地》であり、地図＋誘導表示＋名称表示、地図＋誘導、地図＋名称表示という地図を主体とした組み合せである
◇情報の《発信地》であるブリッジや、バスターミナル、もしくは、情報の《中継地》である振り分け（誘導）の必要な主要施設に設置する。
◇タウンセンターへの導入部、もしくは人の流れが多い場所に設置する、複合型の拠点であるが、メディアコア系と異なり、通過型の装置を展開する。

《単体系》
◇誘導表示か名称表示の単体による情報がある
◇情報《受信地》となる施設や《中継地》で目印となる通りや建造物に名称表示を、同じく《中継地》で人の流れの分岐点や目的地までの道筋の350以内毎に誘導表示を設置する。
◇単体による通過型サインである。目的地の確認と中継地点での確認の役割を担う。
共架や付帯化を図ることが必要。

凡 例

□ ： 地　図

○ ： 誘導表示　方向（行先）、距離

● ： 名称表示　通り、施設、交差点、橋

△ ： 情報板　街・市の案内（ポスター）
伝言板、TEL、時計

★ ： スポット　模型、光の発信
ストリートファニチャー

	No.	位　　置	□ 地 図	○ 誘導表示	● 名称表示	△ 情報板	★ スポット	備　　考
単体系	16	西側モール（左）			○ モール 通り名			
	17	東側モール（左）			○ モール			
	18	博物館前			○ 博物館			
	19	街区北側ラダー状補助幹線道路（西）			○ 通り名			
	20	街区北側ラダー状補助幹線道路（中央）			○ 通り名			
	21	街区北側ラダー状補助幹線道路（東）			○ 通り名			
	22	東側モール・エントランス広場			○ モール 広場名			
	23	街区北東角			○ 通り名			車両系の誘導 表示を共架で設置
	24	街区東側幹線道路			○ 通り名			
	25	街区西側幹線道路			○ 通り名			
	26	街区北西角			○ 通り名			
	27	サンクン広場		○				
	28	駅広前（左角）		○				

凡 例

□ ： 地　図

○ ： 誘導表示　方向（行先）、距離

● ： 名称表示　通り、施設、交差点、橋

△ ： 情報板　街・市の案内（ポスター）
伝言板、TEL、時計

★ ： スポット　模型、光の発信
ストリートファニチャー

《タウンセンター南地区》
南地区は南北に700m、東西に650mと広がり、面積は４５ha、アッパータウンとロウアータウンの高低差は14.0mある。
南地区の施設規模ゾーン別面積は、核的複合施設系2.8ha、大規模商業系2.4ha、中小規模商業系3.7ha、業務系4.4ha、商業・住宅系4.4ha、その他9.5haで、合計２７．２haとなっている。
特に、南地区にのみ行政関連施設ゾーンがあり、公共公益施設が多い。また、業務系ゾーンも北地区の約３倍となっている。
北地区と早淵川を挟んだロウアータウン側に、スポーツ・レクリエーション施設と広大な総合公園を持つ。

〈 凡　　例 〉

□	：	地　　図	
○	：	誘導表示	方向（行先）、距離
●	：	名称表示	通り、施設、交差点、橋
△	：	情報板	街・市の案内（ポスター） 伝言板、TEL、時計
★	：	スポット	模型、光の発信 ストリートファニチャー
⇨	：	アクセスポイント	
••••	：	人の流れ	
●	：	メディアコア系	
●	：	複合系	
●	：	単体系	

	No.	位　置	□ 地 図	○ 誘導表示	● 名称表示	△ 情報板	★ スポット	備　考
メディアコア系	1	シンボル広場	○	○	○ 広場 or スポット名	○ 情 報	○ 模 型 光の発信	フル装備
	2	区庁舎前	○	○	○ 庁舎前	○ 情 報	○ 模 型	
	3	駅中央改札前	○	○	○ 駅	○ 伝言板		駅出口（3ヶ所）には 駅名と誘導
	4	スポーツ文化施設前			○		○ 光の発信	
複合系	5	駅広場前（バスターミナル）	○	○		○ バス情報		バスの乗降 バス利用者の誘導 地下駐車場：利用者の考察
	6	佐江戸・北山田線 （ブリッジ北）	○	○	○ ブリッジ 通り			周辺との関係を重視 ②
	7	佐江戸・北山田線 （ブリッジ南）	○	○	○ ブリッジ 通り			周辺との関係を重視 ②
	8	新羽・荏田線 （ブリッジ）	○	○	○ ブリッジ			周辺との関係を重視 ②
	9	立体駐車場	○	○				周辺との関係を重視 ②
	10	センター西側境界道路 （ブリッジ北）	○	○	○ ブリッジ 通り			周辺との関係を重視 ②
	11	立体駐車場	○	○				
	12	核的複合施設2－A		○ 施設内	○ ビル名			通り抜け出口（3ヶ所）につい ても設置の際、検討する
	13	南側バス停		○		○ バス情報		
	14	広場（病院前）		○	○ 広場			
	15	スポーツ、レクリエーション街区 中央		○	○ スポーツ施設名			

《メディアコア系》
◇地図・誘導表示・名称表示といった空間の認識に関するアイテム以外に、コミュニティー形成拠点に必要な情報板やスポットがある。
◇情報の《発信地》となる、街のシンボル的な場所・人の集まる場所・主要交通機関の駅・眺めがよく見通しのよい光の発信地として適切な場所に設置する。
◇コミュニティー形成拠点として、人が集まり、滞留する空間・装置を演出する。
◇各々の場に名称（愛称）をつける。

《複合系》
◇地図・誘導表示・名称表示の二つ以上の組み合せからなる複合型の情報がある。
主に情報の《発信地》であり、地図＋誘導表示＋名称表示、地図＋誘導、地図＋名称表示という地図を主体とした組み合せである
◇情報の《発信地》であるブリッジや、バスターミナル、もしくは、情報の《中継地》である振り分け（誘導）の必要な主要施設に設置する。
◇タウンセンターへの導入部、もしくは人の流れが多い場所に設置する、複合型の拠点であるが、メディアコア系と異なり、通過型の装置を展開する。

《単体系》
◇誘導表示か名称表示の単体による情報がある
◇情報《受信地》となる施設や《中継地》で目印となる通りや建造物に名称表示を、同じく《中継地》で人の流れの分岐点や目的地までの道筋の350以内毎に誘導表示を設置する。
◇単体による通過型サインである。目的地の確認と中継地点での確認の役割を担う。
共架や付帯化を図ることが必要。

凡 例

□ ： 地　図

○ ： 誘導表示　方向（行先）、距離

● ： 名称表示　通り、施設、交差点、橋

△ ： 情報板　街・市の案内（ポスター）
伝言板、TEL、時計

★ ： スポット　模型、光の発信
ストリートファニチャー

	No.	位　置	□ 地 図	○ 誘導表示	● 名称表示	△ 情報板	★ スポット	備　考
単体系	16	核的複合施設 2－B 入口			○ 施設名			入口 2ヶ所
	17	北側シンボルロード 南入口			○ モール			
	18	北側シンボルロード 北入口			○ モール			
	19	南側シンボルロード 北入口			○ モール			
	20	南側シンボルロード 南入口			○ モール			
	21	郵便局			○ 郵便局			
	22	警察署			○ 警察署			入口 3ヶ所
	23	総合病院			○ 総合病院			
	24	中山・北山田線 （ブリッジ南）			○ ブリッジ 通り			
	25	中山・北山田線 （ブリッジ中央）			○ ブリッジ 通り			
	26	中山・北山田線 （ブリッジ北）			○ ブリッジ 通り			
	27	中山・北山田線 公園入口 ブリッジ			○ 通り ブリッジ			
	28	センター北東角 佐江戸・北山田線			○ 通り			
	29	センター南東 角 新羽・荏田線 佐江戸・北山田線交差点			○ 通り			
	30	新羽・荏田線 東ブリッジ			○ 通り			

凡 例

□ ： 地　図

○ ： 誘導表示　方向（行先）、距離

● ： 名称表示　通り、施設、交差点、橋

△ ： 情報板　街・市の案内（ポスター）
伝言板、TEL、時計

★ ： スポット　模型、光の発信
ストリートファニチャー

	No.	位　置	□ 地 図	○ 誘導表示	● 名称表示	△ 情報板	★ スポット	備　考
単体系	31	新羽・荏田線 中山・北山田線交差点 東			○ 通り			
	32	新羽・荏田線 中山・北山田線交差点 西			○ 通り			
	33	センター南西角 新羽・荏田線			○ 通り			
	34	センター北西角 北側ラダー状補助幹線道路			○ 通り			
	35	北側ラダー状補助幹線道路 ブリッジ 西（公園入口）			○ ブリッジ			
	36	北側ラダー状補助幹線道路 ブリッジ 東（公園入口）			○ ブリッジ			
	37	総合公園			○			入口の各箇所に設置を検討する 総合地図は施設系とし、施設側で検討
	38	シンボル広場 階段前		○				
	39	シンボル広場　東北		○				
	40	東側中小商業ゾーン　北		○				
	41	東側中小商業ゾーン　南		○				
	42	南側シンボルロード　中		○				
	43	中央中小商業ゾーン　中		○				
	44	業務ビル入口		○				
	45	北側商店街 中央		○				

凡 例

□ ： 地　図

○ ： 誘導表示　方向（行先）、距離

● ： 名称表示　通り、施設、交差点、橋

△ ： 情報板　街・市の案内（ポスター）
伝言板、TEL、時計

★ ： スポット　模型、光の発信
ストリートファニチャー

	No.	位 置	□ 地 図	○ 誘導表示	● 名称表示	△ 情報板	★ スポット	備 考
単体系	46	西側中小商業ゾーン 中		○				
	47	行政ゾーン 入口		○				
	48	ビジネスコア 中央		○				

凡 例

□ ： 地 図

○ ： 誘導表示 方向（行先）、距離

● ： 名称表示 通り、施設、交差点、橋

△ ： 情報板 街・市の案内（ポスター）
伝言板、TEL、時計

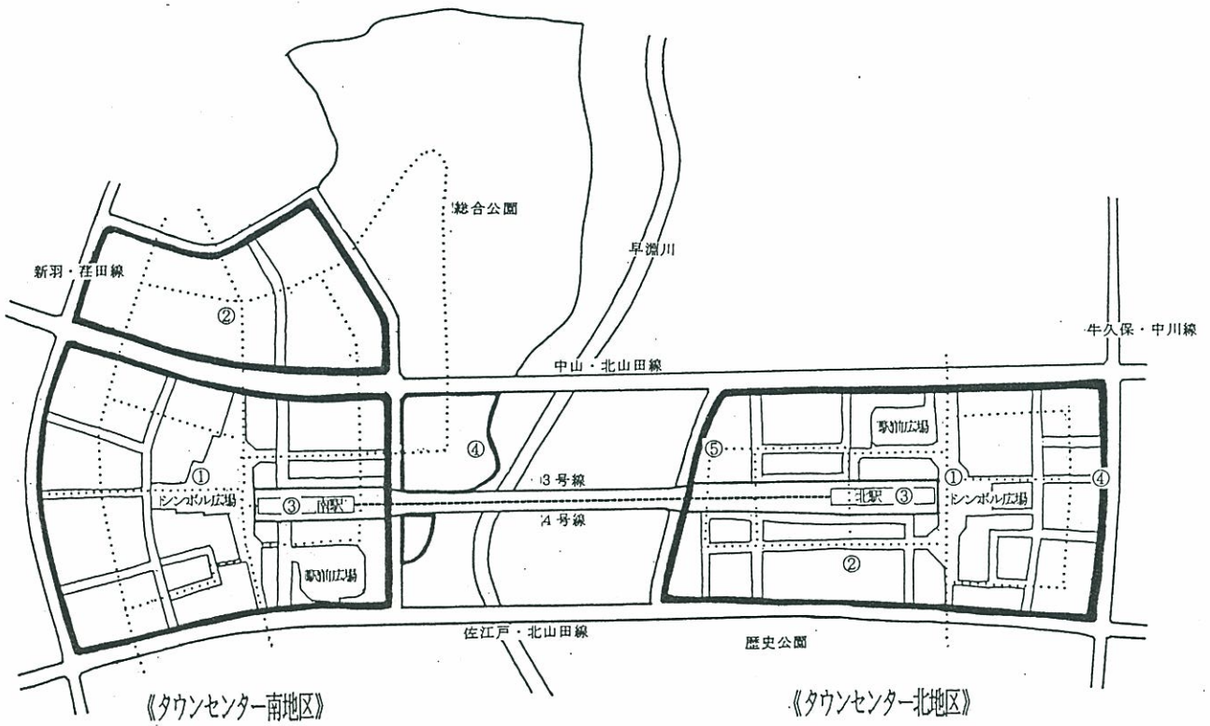
★ ： スポット 模型、光の発信
ストリートファニチャー

５．メディアコア

５－１　メディアコアの意味
５－２　メディアコアの構成
5-2-1 メディアコアの構成アイテム一覧
5-2-2 メディアコアの場所別構成アイテム
５－３　メディアコアの参考例

〈役　割〉

タウンセンターでは、わかりやすいだけでなく、うつくしく・やさしい、タウンセンターらしいサインの創出を方針としている。その一環で、コミュニティーの活性化を促す情報拠点の創出がある。
タウンセンター全体の要所々々に必要なサインを設置するだけでなく、そこへ行けば、全ての情報を手にいれることができる情報拠点（メディアコア）をつくり、コミュニテー形成の核とする。
また、メディアコアはただ様々な情報を提供するだけのスペースではなく、人々が集い、楽しんで過ごすことのできる滞留型の空間の演出を必要とする。
街の構成をよりわかりやすく表現した模型やパンフ等を設置する、イベントやお知らせ等の新鮮な情報を発信する、情報の伝達・収集に役立たつ電話、伝言板、時計等を設置する、ストリートファニチャーを使って休憩・語らいの場を設ける、光の街を特徴づける光の発信塔を設置する等の工夫を凝らし、ライブリッドシテーを実現するための効果的なスペースとしての役割を担う。



〈配　置〉　人が集まる要所や分岐点であり情報の核となる場所

《タウンセンター北地区》

① シンボル広場：最も人が集まり、賑わいのあるタウンセンターの象徴的広場
構成要素はフル装備で、最大規模のコミュニテー形成拠点
センター北駅の北側に位置する最も広い広場。周囲を核的複合施設及び商業施設のコロネードに囲まれる。
広場は、駅前広場やシンボル道路より一段高くなっていて、駅から東・北・西の動線上にあり、人が最も多く集まる場所である。人々はここで集い、イベントを楽しんだり憩ったりする。また、待ち合わせ場所としても適当である。
この広場に面した核的複合施設の入口に、フル装備のメディアコアを設置する。光の発信機は見晴らしのよい、駅前広場に面したデッキに設置する。

② 東側モール　エントランス広場：モール内にあるイベント広場
待ち合わせの情報基地

③ 駅改札前：タウンセンターの玄関
待ち合わせ、目的地への振り分けの場

④ 北側街区入口：バスで来た人と徒歩で来た人にとっての玄関
目的地への振り分けの場

⑤ 市民文化ホール前：タウンセンター北に向けて眺望の開けた場所
光の発信基地
センター地区の最も南側にあるこのホールは、風の街をはさんで南地区と向かい合う場所に位置する。
このホールの南側は多少スペースがあり、ホールのイベントに来た人や散歩する人々が憩う場所である。
ここには場所を示す名称板と光の発信機を設置し、街のイメージを光を用いて表現する。

《タウンセンター南地区》

① シンボル広場：最も人が集まり、賑わいのあるタウンセンターの象徴的広場
構成要素はフル装備で、最大規模のコミュニテー形成拠点

② 区総合庁舎前：行政センターとして色々な立場の人たちが集まる場所
シンボル広場に次ぐ規模のコミュニティー形成拠点
センター南駅から西へ向かって進むと、区庁舎前にでる。
さらに西へ向かうと総合病院に、北へ向かうと業務系ゾーン・総合公園にでる。この地域は、行政・業務等目的がはっきりした人々が多く集まるものと考えられる。
高低差は南地区で最も大きい。ここに、フル装備のメディアスポットを設置する。

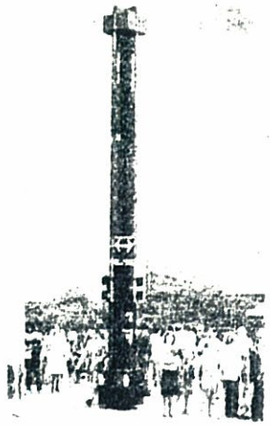
③ 駅改札前：タウンセンターの玄関
待ち合わせ、目的地への振り分けの場

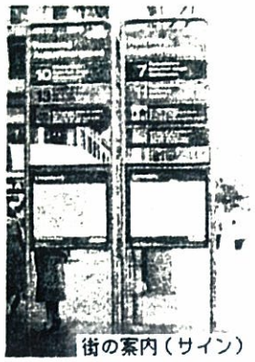
④ ｽﾎﾟｰﾂ文化施設前：タウンセンター北に向けて眺望の開けた場所
光の発信基地

アイテムの種類を示す

基本	A	地　　図…センター全体、現在地、目的地の確認 誘導表示…目的地までの距離・方向表示、現在地の確認 名称表示…場所名表示、現在地確認
情報板	B	案　内　板…街の情報を伝える 掲　示　板…ポスター等の掲載 伝　言　板…情報伝達・交換
スポット	C	模　　型…センター全体をよりわかりやすく把握する装置 光の発信機…『光の街』をアピールするシンボル、定刻を光で表現する
	D	ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ …手持ち情報 Ｔ　Ｅ　Ｌ…情報交換・伝達
	E	時　　計…時間を伝える ベ　ン　チ…休息、コミュニケーション ｺﾞﾐ箱･灰皿…休息、美化 水　飲　場…休息
	F	自動販売機…休息 売　　店…休息 ト　イ　レ 交　　番…情報入手

Aは、空間の認識に関する基本アイテムである
BとDは、メディアコアならではの情報提供のアイテムで、空間の認識に関する情報以外の生活に関連した情報など、様々な情報を提供する
Cは、タウンセンターらしさ（ライブリッドシティ）としての特徴を示す装置である
Eは、ストリートファニチュアで、メディアコア（滞留型の情報拠点）としてのスペースを演出する装置である
Fは、メディアコアのスポット装置として望ましいものであるが、必ずしも備わっていなければならないというものではない。



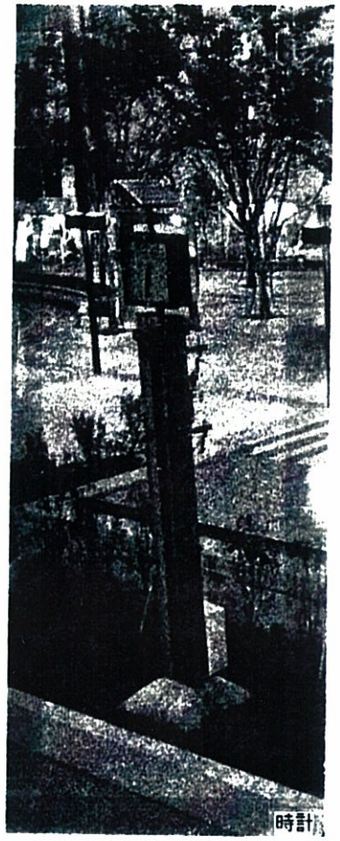


街の案内（サイン）

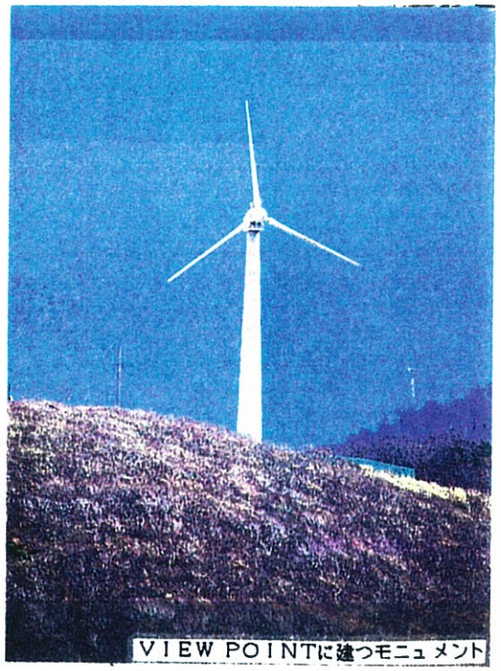
模型

シンボルタワー

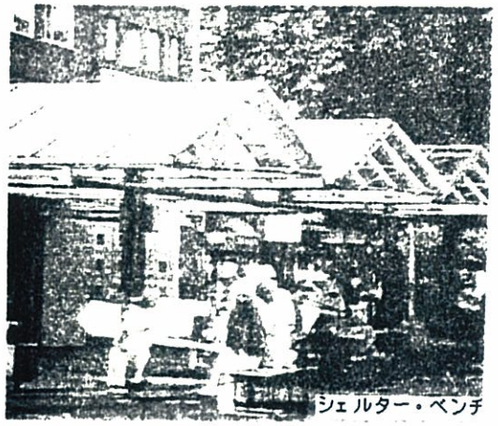
インフォメーション



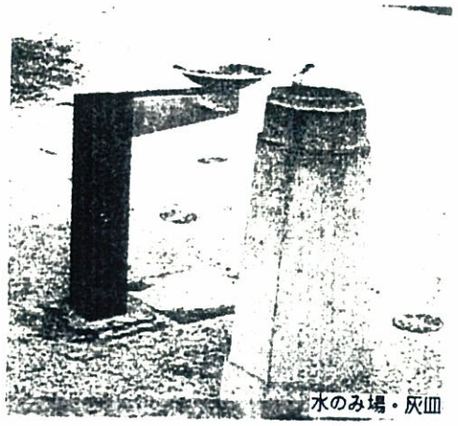
時計



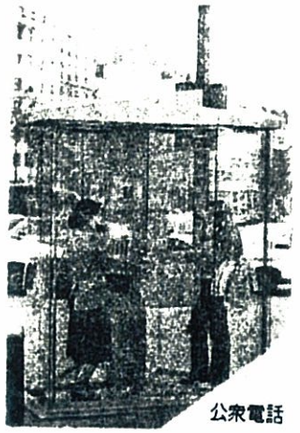
VIEW POINTに建つモニュメント



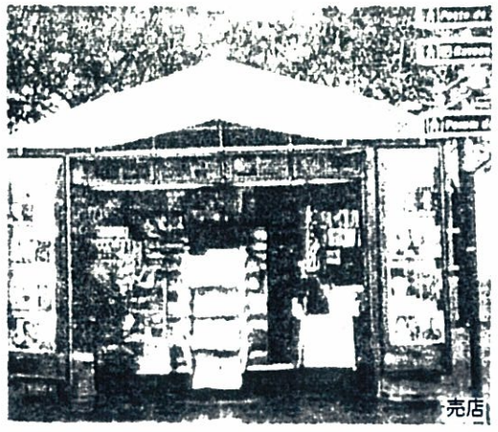
シェルター・ベンチ



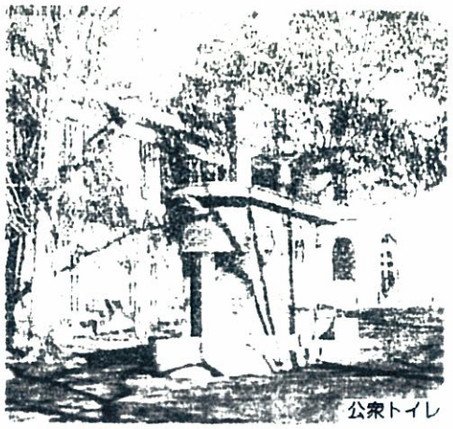
水のみ場・灰皿



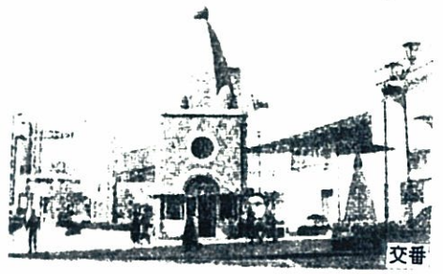
公衆電話



売店



公衆トイレ



交番

メディアコアの場所別構成アイテムを以下に示す。

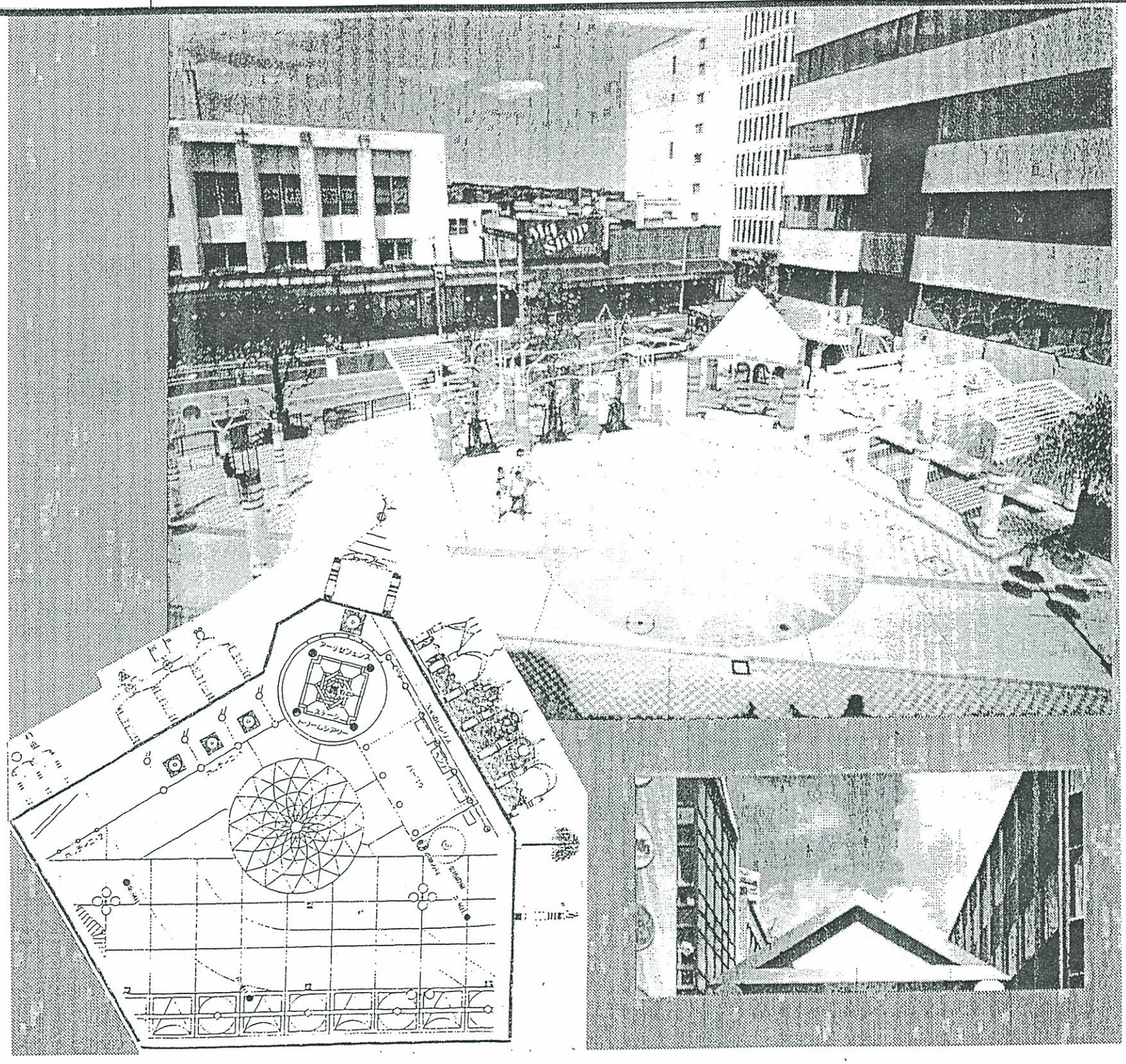
地区				北地区					南地区			
アイテム ＼ 機能				ｼﾝﾎﾞﾙ広場	東側モール エﾝﾄﾗﾝｽ広場	駅改札前	北側街区入口	市民文化ホール中	ｼﾝﾎﾞﾙ広場	区総合庁舎前	駅改札前	スポーツ文化施設前
				フル装備	待合わせ情報基地	待ち合わせ振り分け	振り分け	光の発信	フル装備	振り分け情報	待合わせ振り分け	光・音の発信
サイン基本	A	名称表示	場所名表示、現在地確認	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		地図	ｾﾝﾀｰ全体・現在地・目的地の確認	○	○	○	○		○	○	○	
		誘導表示	目的までの距離・方向 現在地の確認	○	○	○	○		○	○	○	
情報板	B	案内板	街の情報を伝える	○	○	○			○	○		
		掲示板	ポスター等の掲示	○	○	○			○	○		
		伝言板	情報伝達・交換	○	○	○			○		○	
スポット	C	模型	ｾﾝﾀｰ全体をよりわかりやすく把握する	○					○	○		
		光の発信塔	光の街をｱﾋﾟｰﾙするｼﾝﾎﾞﾙ定刻を光で表現する	○				○	○			○
	D	ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ	手持ち情報	○	○				○	○		
		ＴＥＬ	情報交換・伝達	○	○		○		○			
	E	時計	時間を伝える	○			○		○			
		ベンチ	休息、コミュニケーション	○					○			
		ｺﾞﾐ箱、灰皿	休息、美化	○					○			
		水飲場	休息	○					○			
	F	自動販売機	休息	△					△			
		売店	休息	△					△			
		トイレ		△					△			
		交番	情報入手	△					△			

事例1：パークシティ新川崎

コミュニティスポットとして環境施設整備を計った例。
シンボル的なゲートを連続性を持って配し、やはりシンボルともなる時計塔も付属して設置している。
ゲート内には掲示板、ベンチが置かれ住民の情報交換の場、コミュニケーションを図る場として活用できる。

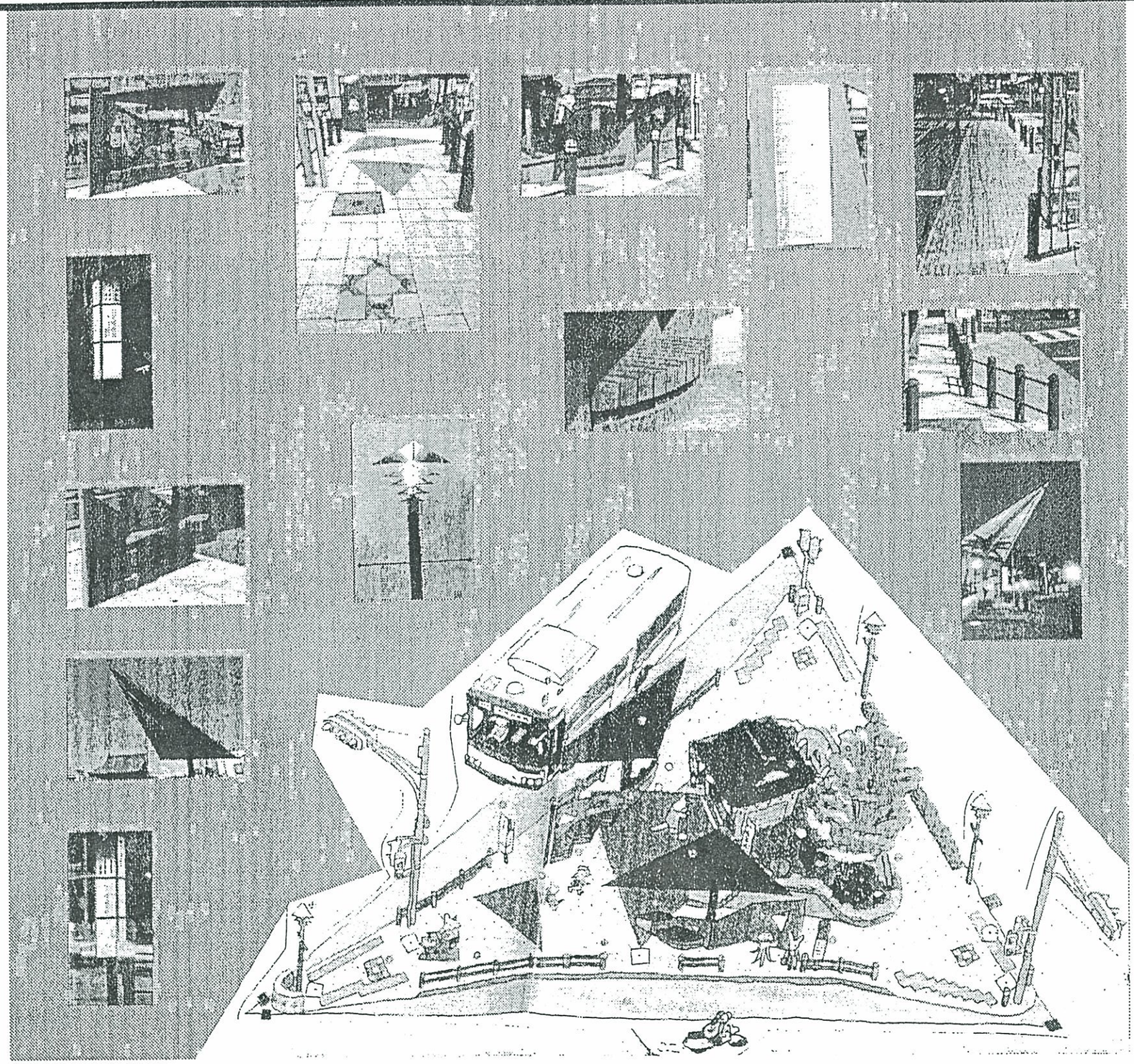
事例2：八王子ショッピングモール

コミュニティスポットとして環境施設整備を計った例。
シンボル的なゲートを連続性を持って配し、床タイルも広場としての意味を持つようにデザインされている。全体のデザインも明るい色が使用されており、そこに来るのが楽しくなるような工夫がされている。



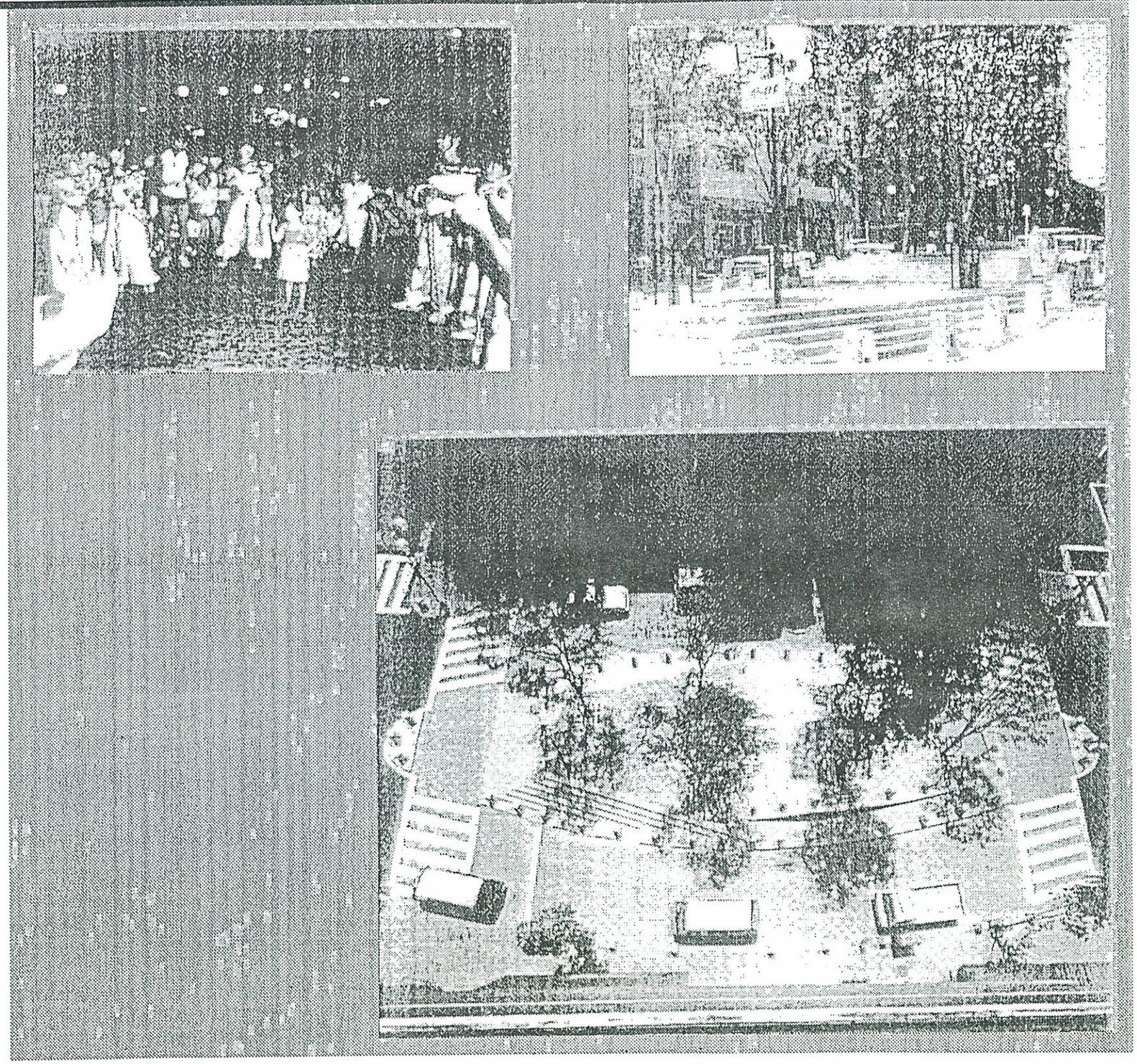
事例3：世田谷区バス停のある小広場（公募）

世田谷区で、安全で快適な歩行空間として、バス停を含めた小広場を計画。その計画や整備をするにあたって、地域の特性や歴史に対しての配慮が必要と言うことで、バス停を含めた小広場の設計に区民も参加してもらい、身近な公共施設に関心をもってもらおうと「バス停のある小広場」と言う名で公募をすることにした。その中で「四季のある小広場」をもとに実施されたものである。



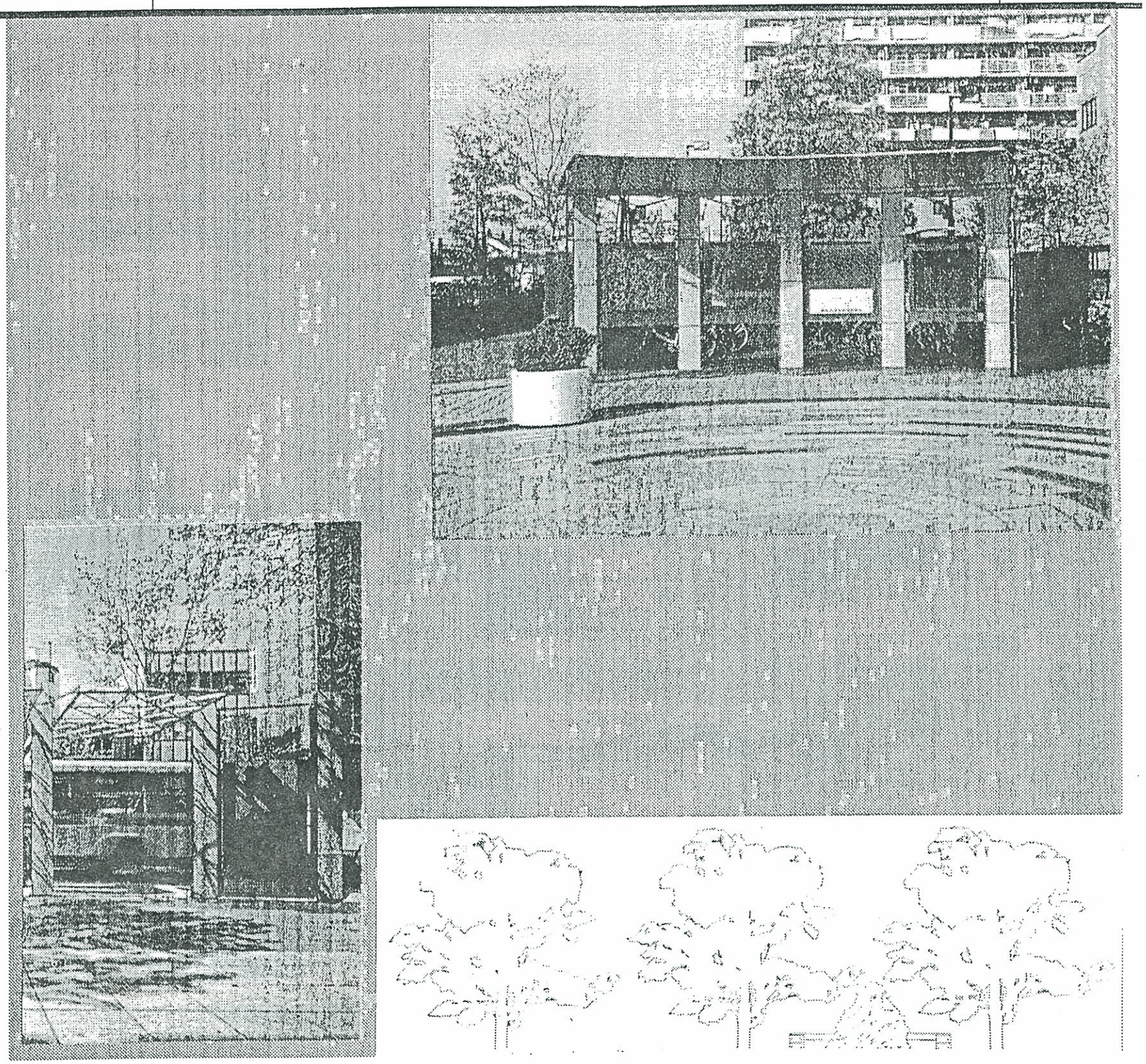
事例4：麻布十番多目的広場

ショッピングモール整備の一環として、買い物客の憩いの場となるよう、また、地元住民のコミュニケーションの広場として活用できるよう計画されたものの例。
小広場自体が、周辺道路や歩道から広場の周囲の設けられた階段を利用して浮き上がっており、独立したスペースを形成している。イベントなども開催できるように計画された広場である。



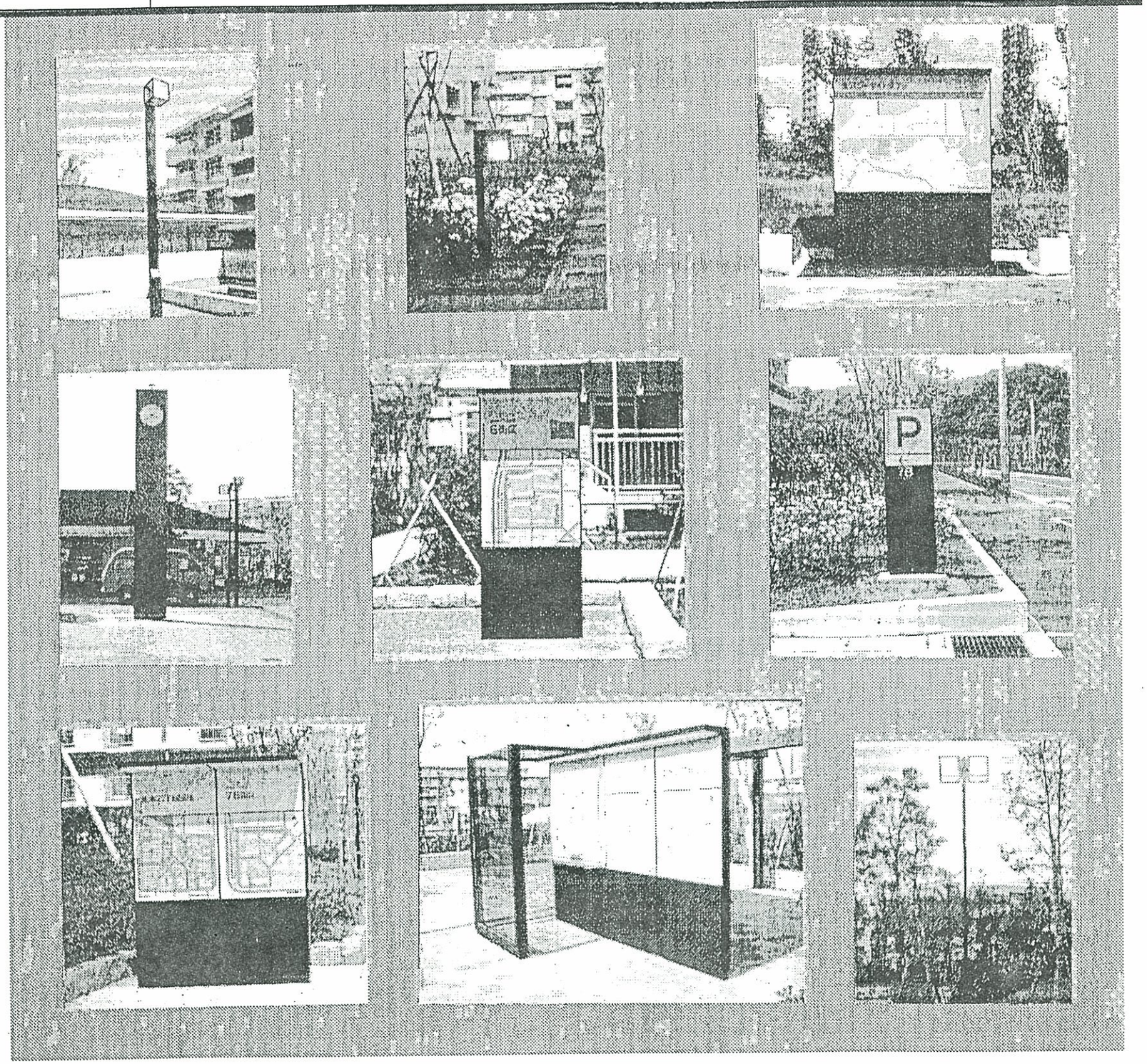
事例5：鶴見プロジェクト

環境デザインプロジェクトとして、道路・広場・地下道等の整備を一環して行なった例。
配置する什器はモジュール化されており、それをユニットとして案内板・掲示板などのサインのみならず、電話ボックス・パーゴラ等のストリートファニチュアにも使用している。
異なった広場、道路等でそれらを眺めても違和感がなく、統一されたデザイン計画であることがわかる。



事例6：金沢シーサイドタウン

住宅団地内の核づくりとして情報センター、シンボル化した時計塔を計画した例。
配置するサインはモジュール化されており、それをユニットとして案内板・掲示板などに使用している。
異なった場所でそれらを眺めても違和感がなく、統…されたデザイン計画であることがわかる。



6．今後の検討事項

6－1 総合化と設置管理主体の考え方

6-1-1 関連領域の整理

6-1-2 設置・管理の考え方

6－2 経年変化を視座にいれたサイン計画

タウンセンターにおける歩行者系公共サインを軸に、それに関わる他領域の整理と今後の課題を下表に示す。

課　題	関　係　領　域	今　後　の　課　題
既存サインシステムの内包	◆住居表示系 （住居表示街区案内図、住居表示板、住居番号表示板） ◆バス停	・情報の重複をさけ、デザインを統一するために、最初の段階から本計画の中にとりこむ。（市民局と調整） ・場の利用なのか、本計画への内包化なのか、要検討。（交通局と調整）
内容の整合	◆タウンセンター内のサイン ・施設系サイン ・車両系サイン ◆周辺地区（ニュータウン全体）のサイン ◆情報パンフ	・原本の一元化と管理体制の強化が急務。 ・地図→誘導表示→名称表示→施設内サインという連携がスムーズにいくよう、内容の統一・整合をはかる。特に、駅、総合公園をはじめとする主要施設は、注意が必要。（交通局、緑政局等との調整） ・特に交通標識との連携・整合をはかる。 ・接点部分がスムーズにつながるよう、統一・連携をはかる。 ・手持ち式の情報との連携・整合を目指す。 ・民間サインとの連携も、今後の大きな課題である。
デザインの統一	◆施設系サイン ◆車両系サイン ◆ＳＦ（ストリートファニチャー） ◆ＳＥ（ストリートエクイップメント）	・デザインのコンセプトをうちだし、統一感を演出する（デザインモチーフ、ロゴタイプ、シンボルカラー）
共架の推進	◆車両系サイン（交通標識） ◆ＳＦ（街灯）	・サインの設置場所をあらかじめ定めて集約し、煩雑をさける。設置主体との調整が課題である。
付帯化の推進	◆建築計画（建物壁面） ◆土木・造園計画（道路路面、ＳＦ、ＳＥ）	サイン付帯に有効な『面』の活用を図る。 所有管理者との調整が課題である。

本計画で提案したメディアコア系、複合系、単体系のサインの設置、および、管理の考え方について、右表に整理する。

設置・管理の主体が異なっていても、センター全体が統一されたサインシステムを形成するよう、その内容、デザイン、位置について、各者間で、調整をはかっていくことが、必要である。

分　類	設置位置	設置者	管　理	備　考
メディアコア系	・公共用地 ・駅舎内や公益施設内も検討	・公共用地内物件は、公団 ・宅地内設置物件は、各設置主体	・公共用地設置物件は、道路付属物として、道路局が管理 （シンボル広場は、緑政局） ・宅地内設置物件は、各宅地所有者	・一部道路占用物となような施設を含む
複合系	・公共用地			
単体系	・公共用地 ・一部の名称表示（建物施設名称）は、宅地内			・宅地内設置サインのデザインの調整が必要

タウンセンターはこれから開発され、徐々に施設が建ち上がっていく地域であり、めざましく変化する地区であるから、その変化に対応したサイン整備が特に必要である。まずは、本計画で提案した最終形を示すことが重要であるが、開発段階毎にどのサインが必要か、設置すべきサインを整理することも必要である。

アイテムで考えれば、まず、アクセスポイント（ex. 駅）における地図が必要であり、次に、各施設が完成した時点での名称表示と誘導表示が必要であろう。

また、サインの使命（有効期限）を考えると、

①仮設的なもの…各々の事業の完成時点まで機能すればよいもの
②常設的なもの…事業全体の完成後も機能が継続するもの
③完成時に新設するもの…事業全体の完成時点で機能するもの

以上のように分類できる。

開発が完了した後の種々の変化に対応できるように整備しておくことも必要である。追加・削除、あるいは更新が可能な材質や形態を考慮して計画することが欠かせない。

④追加・削除で対応する…部分的な差し替え、張り替え等で順次対応していく
⑤更新で対応する…耐用年数を決め、その年度毎に内容を新しく切り替えていく

以上の２通りが考えられる。

以上述べた点を考慮し、区画整理等のタイムスケジュールや利用者のニーズを考え、実施に向け、サイン設置の優先順位を検討していく事が重要である。

Ⅱ．タウンセンターネーミング計画策定

０．はじめに

０－１本計画の視点

港北ニュータウンは、２１世紀型の新たな都市ライフスタイルの創出を掲げた都市づくりを実現しようとしている都市です。ここでは、開発手法自体が従来の都市開発手法とは大きく異なる「ハイブリッド」な手法で取り組まれているという斬新な特性を持っていますが、この手法の先進性とともにもうひとつの特性として注目されていることは、ここに出現する都市が、神奈川県下はもとより、首都圏においてもまた、今世紀最後の大規模な都市として誕生することです。

この新都市を中心に新しい「区」が生まれることからも、都市そのものの規模の大きさを示すとともに、そこに託された、２１世紀へ向けた豊かさへの願いをうかがうことができます。

港北ニュータウンは、タウンセンターだけに限ってさえみても、相当の規模を有し、大小合わせて膨大な数の道路や街区、それに橋や広場、公園、駅などができるわけですが、これらには、それぞれ「名前」が必要になってきます。もちろん、全てのものが一度にできあがるわけではありませんので、つくる度に、ひとつひとつつけていけば良いという考え方もあるかとは思われます。

また、この「名前」をつける作業には、たくさんの人々が携わっています。決定権を持つ人だけでも、市総務局（新区）、市交通局（駅）、市道路局（道路、橋梁）、市緑政局（広場、公園）、市市民局（住居表示）などに分かれ、この他にも、地権者や住人、住宅・都市整備公団など、関係者はさらにたくさんになります。

このような状況を考えますと、例えば、１個の名前をつけるにも様々な人々に集まっていただき、それぞれの意見や考えを聞き、調整しながら毎回名前を決定していくというのはかなり大変な作業量になっていくことが予測されます。

しかも、最終的には、相当な数の名前をつくることになりますから、ある道路と別の道路が似たような名前になってしまった、あるいは、隣り合わせの道路と公園が、何の関連性も整合性もない名前を持ってしまった、などの問題を生む可能性が高く、もしそのようにして大量の名前が出現すると、全体で見るとバラバラで、ごった煮の名前をつけられていることになってしまいます。

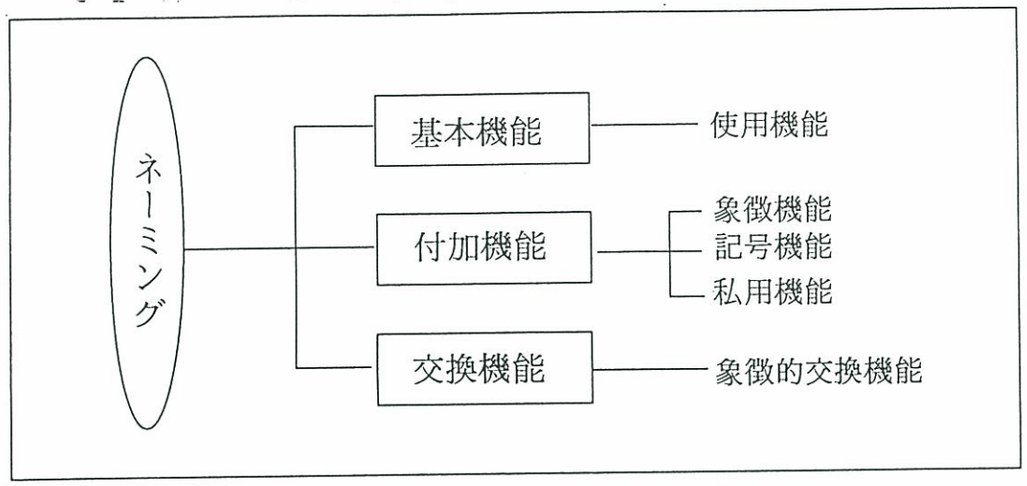
では、どうしたらこのような混乱を避け、新しい都市にふさわしい名前を生み出すことができるのかというと、膨大な数の「名前」をつけるという作業に、ある作業システムをつくる必要があるのではないかと思われてきます。

「港北ニュータウン」と「タウンセンター」は、街づくりが開発の理念に基づいて展開されています。それだけに、理念や思いと無関係な名前が整合性もなくつけられることは、本来の指針からはずれることになってしまうわけです。「名前」をつけることもまた、街づくりの大切な要素です。魅力のある名前は、街の魅力を引き上げ、街のイメージを高めていくことができます。

ところで、「名前」は、文字通り名前として使う最も基本的な機能として使用機能を持っていますが、実は単に使用される以外にも、いくつかの役割を果たしています。たとえば、その名前に何かを象徴させたり、何かの意味を込めたりという、象徴機能。名前からあるイメージを連想させる、記号機能。そして、使うことによって、名前とともにその名を持つものにも愛着を感じるようになる、私用機能など、いくつかの付加的な機能があります。逆にいえば、象徴させたい、親しまれたいモノ、コトを意図的に組み込むことを目指して、生み出すべき「名前」の方向性を決定することができるわけです。

「港北ニュータウン」「タウンセンター」は、従来にない「ハイブリッド」な手法で取り組まれている新しい街です。それだけに、その手法のオリジナリティがネーミングにもきちんと反映されているべきです。ネーミング自体もまた「港北ニュータウン」「タウンセンター」にふさわしい魅力と個性を持つために、ネーミングもまた街づくりであるという認識のもとに、街の開発同様「ハイブリッド」な手法を応用したネーミング作業で取り組むべきであると考えられます。

ネーミング及び、ネーミング作業の持つ意味について、少し考えてみましょう。
ネーミングの機能は、一般的に次のようにいわれています。



基本機能＝使用機能は、文字通り、名前として使う機能です。単に名前としての機能だけ果たせば十分なのであれば、他と区別できれば良いわけですから、例えば、国の名前が「Ｋ－１３」でも良いし、市町村名をやめて、全て郵便番号か、市外局番を代わりにしても良いことになります。（ｅｘ．横浜は「０４５」、東京は「０３」）しかしながら、実際、名前は、ほかにもいくつかの役割を果たしているのです。

身近なところで、「みなとみらい２１」を例にとって見ていくことにします。

象徴機能は、その名前に、何かを象徴させる、何かの意味を込めて機能させることです。「みなとみらい２１」は、人々の横浜に対する２１世紀への思いが込められています。　記号機能は、逆に、ある名前を聞いたときに人々が受けるイメージを引き出す機能です。「亀」という名前のスポーツカーがあっても、何となく遅そうなイメージを持つので、まず名前として採用されることはありません。この機能を「みなとみらい２１」で見てみると、明るさや近未来性、やさしさなど、高感度なイメージが浮かんできます。
私用機能は、その名前を使うことで使う人に参加性を与え、名前とともに、そのものに愛着を与える機能です。ペットに名前をつけたり、船や列車に名前をつけることは、その機能を良く現わしています。また、「みなとみらい２１」のように、ネーミングを公募することは、人々の参加性や愛着を育んでいくためにも良い方法であるといえます。

なお、象徴的交換機能とは、例えば「ケネディ空港」のように、ある人名を名前にすることで、人々の思いを故人に贈ることがそれに当たります。

これらのことを、今回のタウンセンターのネーミング作業に当てはめて考えていくと、かなりいろいろな可能性に期待できそうです。
まず、象徴機能としては、タウンセンターの「開発の理念」を象徴するネーミングにしていくことが可能です。今回は、数多くのものにネーミングしなければなりませんが、このような複数のものに、きちんと開発の理念に基づいた名前をつけることによって、それだけ理念は、深く、広く理解され、伝わっていくことでしょう。
記号的機能もあります。特に、これからのニュータウンへの入居者やセンター施設への企業誘致を考えるとき、県下の他のニュータウンや商業施設ではなく「港北」を選ばせるために、イメージの高い名前は不可欠です。もちろん、完成後の来街者にとっても、「ダサイ」名前の街に行くよりは、何かありそうな感じの街に行くことでしょう。
私用機能は、やはり、住民参加によるネーミングの公募がまず思い浮かびますが、候補となるネーミング案について住民にアンケートをとることも、コミュニケーションづくりの一環として実現したいことです。また、ネーミングを材料に、「市や公団」、「住民」、「地権者」が話し合うことも、コミュニケーションの活性化のひとつですし、さらには、タウンセンターの街区表示のネーミングをきっかけに、自治会組織づくりを同時に進めるなどのことも期待できるでしょう。
このようにして、人々が、タウンセンターの開発理念と開発方針を理解していくことで、そこに現われる様々なビルやお店や施設のデザイン・性格が少しでも理念に近づいていくことが可能になります。

そして、何よりもこのような形で、ネーミング作業を通じて人々がタウンセンター開発の理念を理解し、タウンセンターへの愛着を深めることこそが、今回の「港北ニュータウンタウンセンター」の開発手法である、「都市マーチャンダイジングによるハイブリッドな都市づくり」につながることではないでしょうか。

今日まで都市づくりにおけるネーミング作業に、確立された方法が存在するわけではありません。基本的な作業のシステムを場合に応じて変形させて展開している、というのが現状です。しかし、もし、この作業システムそのものが優れて魅力的なものであるとすれば作業システムを応用したネーミングも、ネーミン　作業を取り組んだ全体の作業も、ともに斬新なものになる可能性があるといえましょう。

港北ニュータウンの開発は、前述のように「ハイブリッド」な指針で取り組まれています。そこで、この新しい手法を新都市のあらゆるスケールに対応して生み出されたものと理解していくと開発手法とネーミング作業とは、実はより発展的な関係を内包しているのではないか、と推察することができます。

つまり、今回のネーミング作業に当たっては、従来あるような単に当該地域の特性やコンセプトワードの周辺語意を恣意的に組み合わせるのではなく、ネーミング作業そのものにも基本構想にあったコンセプト・指針を積極的に取り入れ、応用することによって、港北ニュータウン独自のネーミング開発を可能にすることができると考えられるわけです。

では、ネーミング作業は、開発計画のなかにどのように位置づけられるのでしょうか。

実際、これから、この地域ではさまざまな道路や橋、街区、公園などがつくられているわけですが、それら諸施設が、基本構想にあったコンセプト・指針の空間的展開＝ハードとしての定着であるとするならば、同じように、基本構想のソフト的展開・定着作業の第一歩がネーミング作業である、と考えることができます。

なぜならば、ネーミング作業からは、サイン計画はもちろんのこと、たとえばコミュニケーション作業で見ても、住民からの公募やヒヤリングなどによってネーミング作業を通してエリアのＰＲを強化したり、インナーコミュニケーションを活性化したりと、ここから他のさまざまな作業がスタートすることになります。ですから、ネーミング作業とは、いうなれば、ソフト面での基盤整備作業であると表現できるのです。

このように、今回の港北ニュータウン・タウンセンターの斬新で魅力的な基本構想は、ハードとしての諸施設として、ソフトとしてのネーミングとして、両輪によって展開、達成されることになります。しかも、このハードとソフトは、同じ根っこ（構想にあるコンセプト）から生まれているので、違和感のない、共鳴しあうものとして成立します。

そして、また、開発計画全体から見れば、そこに建築、景観、造園等との新たに生み出されていく相互の関係性が見えてくるはずですし、それら多くの作業と望ましい影響を与えあいながらネーミング作業を進行させていくことが、港北ニュータウンならではの共同作業を展開することになっていきます。

そこで、今回は、ニュータウンの開発理念および手法にあわせた港北ニュータウン、タウンセンター方式ともいうべきアプローチを模索してみました。

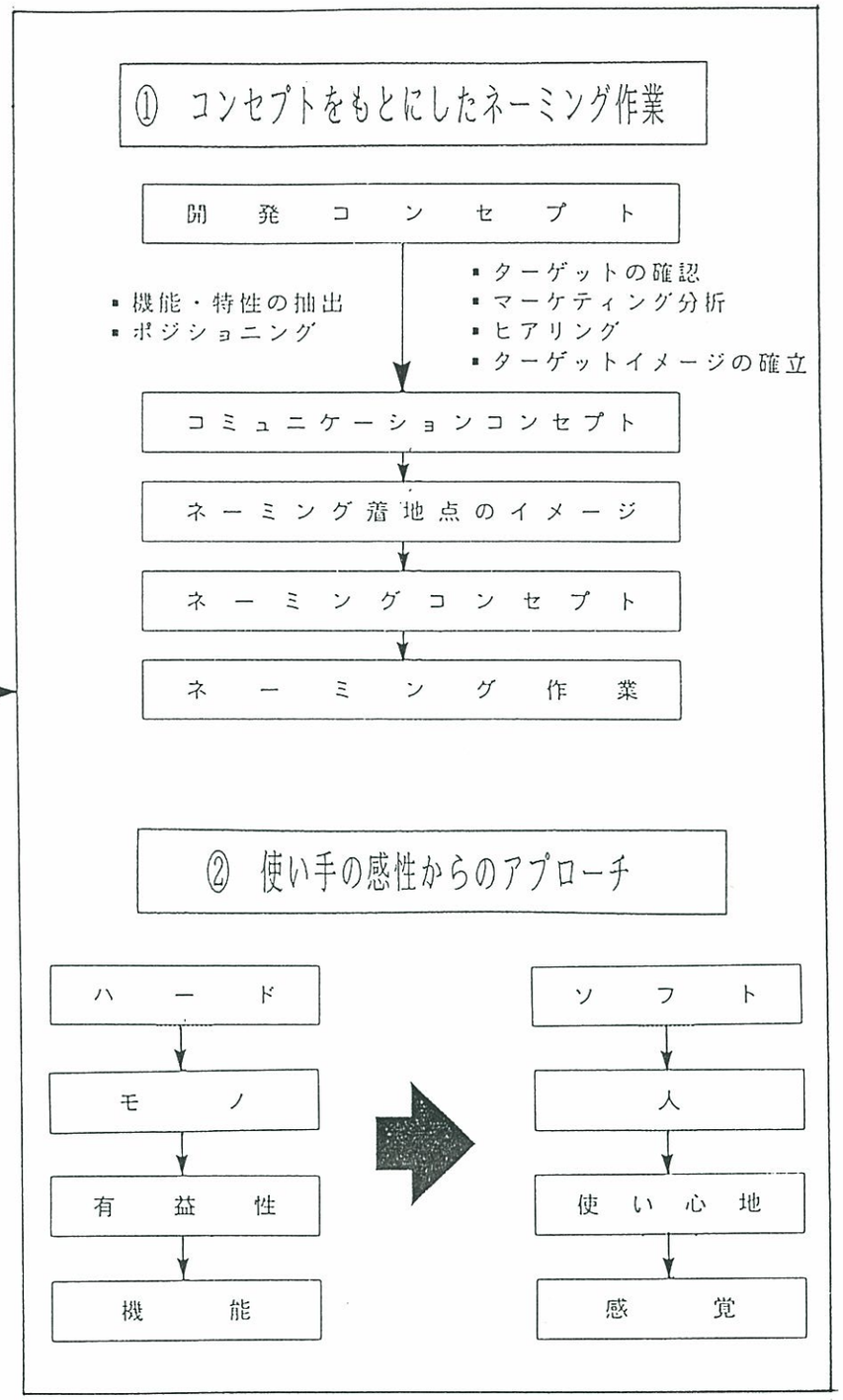
以下は、今回の作業に関する一連の流れをまとめたものです。

恣意性から必然性を持つネーミングへ

開発された都市や地域は、それぞれ固有の名前を与えられていますが、それらは従来、恣意的につけられる例が多く見受けられます。例えば、歴史、自然、地形、開発理念などからランダムに引き出し、それを町名や通りや橋などに散りばめる方法です。これは、ひとつひとつは面白いネーミングになる可能性はあるものの、客観的な視点から見ると、全体としての統一感や調和あるいは、相乗効果といった面に欠け、結果的にはインパクトが弱いということになる場合が多いようです。また、思いつきといったある種の偶然性も伴って抽出されたネーミングは、それをふるいにかける段階で、フィルター自体にも必然性がないことが多いために、つける側の好みや感覚で選ばれてしまうということになりがちです。このように恣意的なネーミングではなく、ネーミングのための科学的であり論理的なシステムをつくる必要が生じてきているといえます。

「コンセプト」と「使い手の感性」からアプローチするネーミングの時代へ

一般的に、ネーミング作業においては、市場や競合の分析から抽出したセールスポイントを、訴求しようとするターゲットに結びつけてネーミングコンセプトをつくり、ネーミングのフィルターを拾いだしていくという方法がとられます。これらは、もちろん思いつきや感覚でつくっていくものとは一線を画してはいますが、今日では、この手法は限界に達し、新しく予想されるユーザーの感性を取り入れ、共感を得ようとする新たな方法論が展開されつつあります。



港北ニュータウン及びタウンセンターは２１世紀型都市生活のプロトタイプ創出にふさわしい、従来にない、新しい理念と手法によって開発されようとしています。

従来にない理念と手法によって開発される都市のためのネーミングには、やはり、従来にない理念と手法によるネーミング作業システムが存在するはずです。

タウンセンターの開発理念と手法を活かすことによって港北ニュータウンタウンセンターにふさわしいオリジナルなネーミング作業を展開することができると考えます。

〔港北ニュータウン、タウンセンターの開発理念と手法〕

①〈コンセプト主義〉

- 街づくりの理念を実際の時空間に定着させる作業としてとらえる
- 作業チームの共通認識 ＝ 「コンセプト」を合言葉にすることで、作業の共有化、共同化を図る
- コンセプトは、単に作業の内容を示す言葉ではない作業に取り組む姿勢それ自体を示す言葉である

②〈都市ＭＤ手法〉（マーチャンダイジング）

都 市 を

- ハードではなく　人から考える
- モノではなく　くらしから発想する
- 機能ではなく　シーンから創造する

③〈カオス&ダイナミズム展開〉

- カオス＝初期段階で都市の細部まで決定してしまうのではなく、使い手の参加により、時間をかけて都市自体が成長・進化をとげているような多様性・可能性を示す
- コンセプト→シーン→ストーリーによる　人々の心の様子を予測、設定する
- 環境／施設／オペレーション／コミュニケーション　各系のデザインコードが相互に共鳴し合いながら都市デザインの作業を行う
- 更に使う人の手で深化され、デザインしていくことのできる自由度を確保する

→

- コンセプトを核にしたネーミング作業
- 都市ＭＤ手法にのっとったネーミング作業
- カオス&ダイナミズムを生むネーミング作業

〈ネーミング作業の方針〉

コンセプトを核にした ネーミング作業

「コンセプト」を単に作業スタート時の「かけ声」で終わらせるのでなく、作業の目標、内容、姿勢、すべてを示すメルクマールとして捉える。

都市MD手法にのっとった ネーミング作業

タウンセンターを使う人々の、生活のシーンの中で、実際に使う人の気分（使い心地の良さ）から発想、創造するネーミングアプローチ

カオス&ダイナミズムを生む ネーミング作業

ネーミングワークだけを切り離して、上記の考え方、手法で取り組むのでなく、環境／建築／オペレーション／コミュニケーションなど他デザインワークとの連関により、スパイラル的なクオリティ・アップを目指す

〈タウンセンター開発へのフィールドバック〉

左のような方針で、ネーミング作業をすることにより

1）何を各作業チームに示すことができるか

2）何を住む人々に与えることができるか

コンセプトについて

1）「コンセプト」を具体的な作業の中でどういうやり方で、形、成果にしていくかを示す

2）タウンセンターの開発理念を直接に、言葉として定着させ、残す

都市MD手法について

1）シーン分析 ── シナリオ統合というやり方で都市MD手法の具体的展開方法を示す

2）気持ち良さを満足させる

カオス&ダイナミズムについて

1）ネーミング作業が、他チームを刺激することで各作業の相互作用とは何かを示す
（＝カオスづくりのプロセスを示す）

2）ネーミングと景観、通りの歩き心地の一致など環境 ── 施設 ── ネームが一体となった計画側にたった街づくりの実践
住民が自らネーミングする、ネームが自然にできあがっていくのを待つ、などの住民参加

［ｐｈａｓｅ　0］ネーミング作業のポジショニング

作業はまず、タウンセンター開発計画とネーミング作業がどのような関係にあるのか明確にし、共通の認識を築くことから始めなければなりません。これによって、タウンセンターのネーミングとは何なのか、それを戦略的に使うにはどのような性格を持たせなければならないのか、など開発計画のなかでのネーミングポジショニングを行っていきます。この段階で、ネーミングに期待している要素が表れてくるとともに、ネーミング作業の大まかな枠組をイメージすることができます。「都市ＭＤ」の開発手法と同様の方法論によって、ネーミング作業のためのフレームをつくります。

（機　能）ネーミング作業のタウンセンター開発計画における戦略的ポジショニングを明確化するとともに、ネーミング作業のフレームづくりを行う

（作業内容）
- タウンセンター開発計画概要の把握（目標、現状、課題）
- 各デザインチーム（環境、建築、コミュニケーション、オペレーション）の戦略、作業状況の把握
- ネーミング作業の戦略的可能性の検討
- ネーミング作業の具体的戦略の立案
- ｐｈａｓｅ１以降の作業フレームの策定
- ｐｈａｓｅ１以降のスタッフ・ノミネート

［ｐｈａｓｅ　1］リサーチ＆ヒアリング

港北ニュータウン及びタウンセンターの開発コンセプトを確認します。特に、すでに使われているキーワードに関しては、より具体的なイメージを把握するとともに、個々のワードの概念の相違を明確にしていくことが必要です。また、開発手法や全体スケジュールを細部にわたって確認していくために、各デザインチームに内容と進行状況をヒアリングしていきます。これと同時に、主として国内の開発地域の類似例を探り、ネーミングの傾向を調査、分析します。

このフェーズで、ネーミング対象となるもの、省いてよいものを仮定することができますが、その際、「ＨＹＵＰＯＬＩＳ」など案として出されているネーミングが、それまでの作業にどの程度繁栄されてきているかも、把握していきます。

次のステップに移行するためのネーミングのフレームの大枠もここで決定されます。

（機　能）
- ネーミングのための予見、素材の収集
- ニュータウン、タウンセンター開発コンセプトの確認

ex.
「東京生活文化」「第４山の手ライフスタイル」
新「横浜生活」
それぞれの違い、使い分けの明確化

（作業内容）
- 各デザインチームの具体的作業内容のヒアリング
- 類似都市施設の事例調査
  （ネーミングの好感度、定着率など）
- ネーミング対象の設定
- 光る都市、「ＨＹＵＰＯＬＩＳ」の縛り具合
- ネーミングチェックのガイドラインづくり
- ｐｈａｓｅ２のスタッフ・ノミネート

〔ｐｈａｓｅ　2〕ターゲットのフェースづくり

ここには、どんな人々が暮らしていくのか。どんなことを考え、どんな行動をとるのか。「都市ＭＤ」開発手法のなかで、すでにいくつかのターゲット・プロフィールを描いてその多面な顔づくりがなされていますが、ここでは、住民参加によって、より多くのシナリオをつくり、ｐｈａｓｅ３のシーン分析へとつなげていくために、すでに住んでいる人のリサーチを交えながらネーミング開発のためのターゲット像を確立していきます。

（機　能）シナリオづくりのためのターゲットの確率

（作業内容）
- ニュータウンにすでに住んでいる人々、働いている人々のリサーチ
- ユーザーとなるターゲットの分析
- タウンセンターを訪れる人々、働く人々のフェースづくり
- これらに基づいて、ネーミングターゲットのフェースづくり
- ｐｈａｓｅ３のスタッフ・ノミネート

〔ｐｈａｓｅ　3〕シーン分析によるシナリオづくり

ｐｈａｓｅ２で確立したターゲットに基づいて、タウンセンターで「起こりうること」を各ターゲットの生活ストーリーとしてつくっていきます。この作業で重要なことは、それぞれのストーリーのなかにタウンセンターがどのように登場してくるか、を分析していくことです。ストーリーにしたがってＣＧを動かしていくなどによって、どのような風景が見えるか、時間によってどのように違うのかなどを類似体験しながら、ネーミングの共通性や差異性を振り分けていきます。

（機　能）
- ネーミングのためのストーリーサンプルの選定、プロトタイプづくり
- ネーミング対象の絞り込み

（作業内容）
- タウンセンター施設開発のシーンの解析、追加リサーチ
- 模型による景観変化のシミュレーション
- ｐｈａｓｅ４のスタッフ・ノミネート

［ｐｈａｓｅ　4］ネーミングプラン作業

ｐｈａｓｅ３でつくったシナリオから解析したシーンを手法として応用して、ネーミングをプランニングしていきます。まず、それぞれのシナリオに内包されている要素を、ネーミングデザインコードとネーミング要素として２つの方法で抽出、分類します。このコードや要素を読み取り、コミュニケーションコンセプトを構築します。

これによって、ネーミングのイメージを大体どのあたりに着地させるべきか、その感触がつかめてきます。着地点を決定したら、次のステップとして、ネーミング開発のための、表現コンセプトを構築し、具体的なネーミング作業へと移行していきます。なお、住民からネームを公募することと住民の間からネームが自然発生的に生まれてくる余地を残すという方法で、住民参加によるネーミング作業の可能性もさぐります。

また、タウンセンターの南と北の特性をより明確に表現するために２つのプランナーチームを用意し、それぞれ別の地区に関する作業を展開します。

（機　能）シーン手法によるネーミング案づくり

（作業内容）
- ・ネーミングデザインコードとーネーミング要素の抽出
- ・コミュニケーションコンセプトの構築
- ・表現コンセプトの構築
- ・ネーミングの公募
- ・ネーミング案
- ・デザイン化
- ・チェックワークのフレームづくり

［ｐｈａｓｅ　5］プランのチェックと修正

ｐｈａｓｅ４で作成したネーミング案の実効性を検証し、必要に応じて修正をしていきます。ヒアリングが主体となりますが、ただ単に語感や好みを並列に尋ねるのではなく、例えば、住むとしたら、遊びに行くとしたら、働く場所としては、など立場を置き換えてみるような工夫を加えたヒアリングを実施します。また、ガソリンスタンドなどの道をよく聞かれる人、よく教える人をも対象として、従来あまり考えられなかった具体的なフィルターも加えます。

（機　能）ネーミング案の実効性の検証
検証結果による修正作業

（作業内容）
- ・ネーミング案のヒアリング
  （一般、住人、外国人、働いている人、SSなど）

以下は、ネーミングチームの主体ワークの終了後の作業です。

［ｐｈａｓｅ　6］

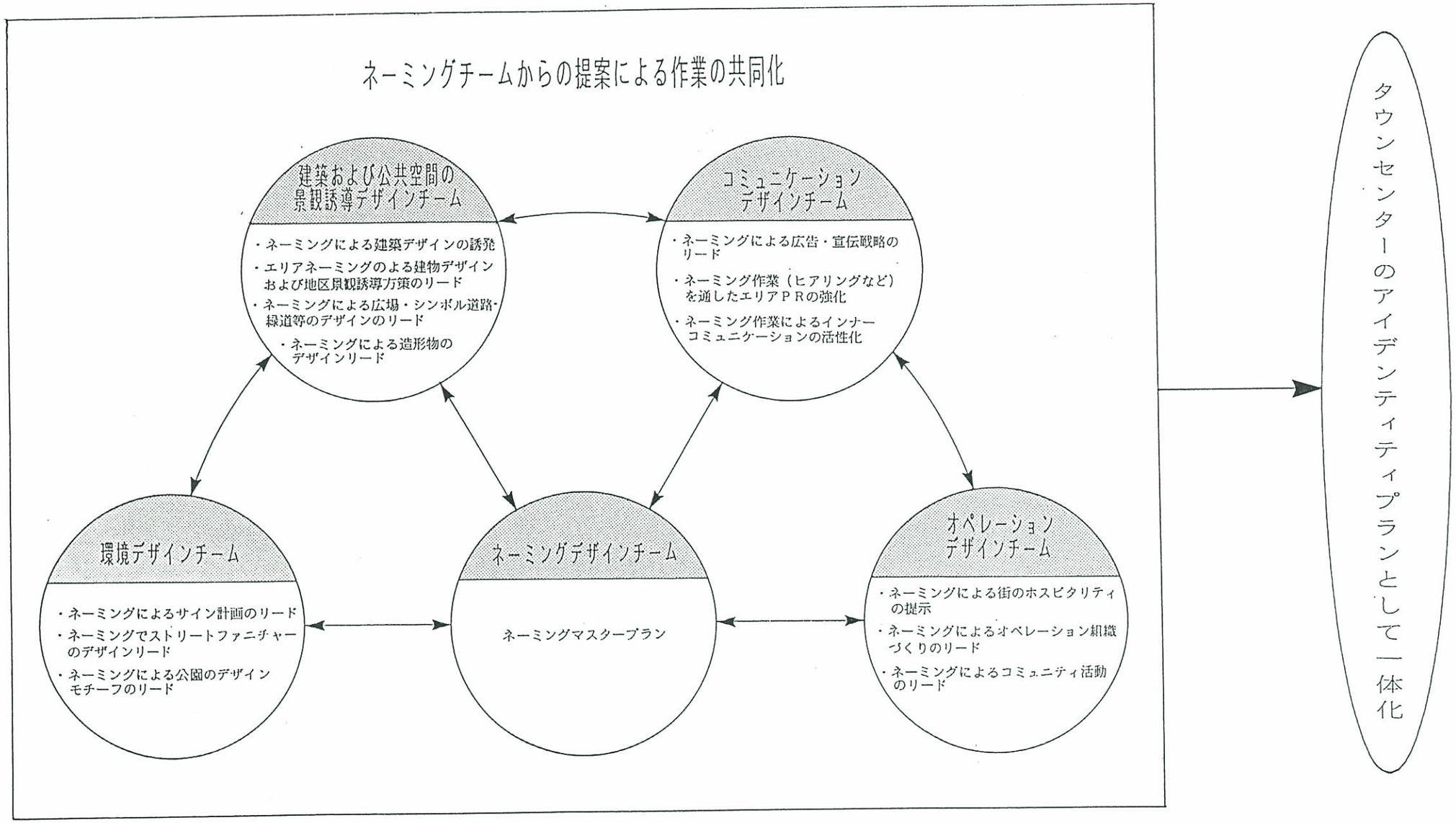
チェック機関による、評価、審査、法的措置作業

［ｐｈａｓｅ　7］

他のデザインチーム作業への反映

	phase 0 ネーミング作業のポジショニング	phase 1 リサーチ＆ヒアリング	phase 2 ターゲットのフェースづくり	phase 3 シーンの分析によるシナリオづくり	phase 4 ネーミングプラン作業	phase 5 プランのチェックと修正	phase 6 チェック機関による評価・審査・法的措置作業	phase 7 他のデザインチーム作業への反映
機能	ネーミング作業のタウンセンター開発計画における戦略的ポジショニングの明確化 ネーミング作業のフレームづくり	ネーミングのための予見、素材の収集	シナリオづくりのためのターゲットの確立	ネーミングのためのストーリーサンプルの選定、プロトタイプづくり	シーン手法によるネーミング案づくり	ネーミング案の実効性の検証 検証結果による修正作業		
作業内容	・タウンセンター開発計画の把握 ・各デザインチームの戦略、作業状況の把握 ・ネーミング作業の戦略的可能性の検討 ・ネーミング作業の具体的戦略の立案 ・phase 1 以降の作業フレームの策定	・港北ニュータウンタウンセンターの開発コンセプトの確認 ・各デザインチームの具体的作業内容のヒアリング ・類似施設の事例調査（ネーミングの好感度、定着率など） ・ネーミング対象の仮設定 ・ネーミングチェックのガイドラインづくり	・居住者のリサーチ ・ユーザーとなるターゲットの分析 ・訪れる人、働く人のフェースづくり ・ネーミングターゲットのフェースづくり	・ネーミング対象の絞り込み ・タウンセンター施設開発のシーンの解析、追加リサーチ ・模型による景観変化のシュミレーション	・ネーミングデザインコードとネーミング要素の抽出 ・コミュニケーションコンセプトの構築 ・表現コンセプトの構築 ・ネーミング案 ・デザインサンプル案 ・ネーミングの公募計画の立案	・ネーミング案のヒアリング（一般、住人、外国人、周辺企業、商店勤務者、ＳＳなど）		
シフト例	ディレクター　1名 チームマネージャー　1名	リサーチチーム（2～3名）1チーム プランナーチーム　1～2チーム アシスタントスタッフ　1名					1名 2～3名 2名 1名 1名	
作業期間	2w～4w	4w～6w	3w～6w	3w～6w	4w～6w	6w～8w		

コンセプトを核にしたネーミング作業、都市ＭＤ手法にのっとったネーミング作業、カオス＆ダイナミズムを生むネーミング作業これらを実際に展開していくに当たっては、他のデザインチームとの関連性および共同化も大切なポイントです。コンセプトも、手法も、ネーミングの作業のなかで展開することによって実現する、開発思想のアプリケーションのひとつであり、また、カオス＆ダイナミズムは、ネーミングチームから各デザインチームへ、逆に、各チームからネーミングチームへ、自由で刺激的で、高度にインテリジェントな相関関係を築くことでもあります。このように、ネーミング作業の展開がそれぞれのステージで互いに影響を与え合うことによってクリエイティブレベルを高め、好ましい競合を生むことが望ましいと考えられます。一見違うカテゴリーの様々な「知」のモチーフが一定の法則を持った螺旋の上昇を描きながら、結合、融合し、一体となって、都市をデザインする。それが、港北ニュータウンタウンセンター、全プロジェクトをハイブリッド化する方法であると思われます。



資料　ネーミング対象選定のためのシート

①ＴＣ全体・第１地区・第２地区・中間地区

②幹線・準幹線

③シンボル道路・歩行者専用道路

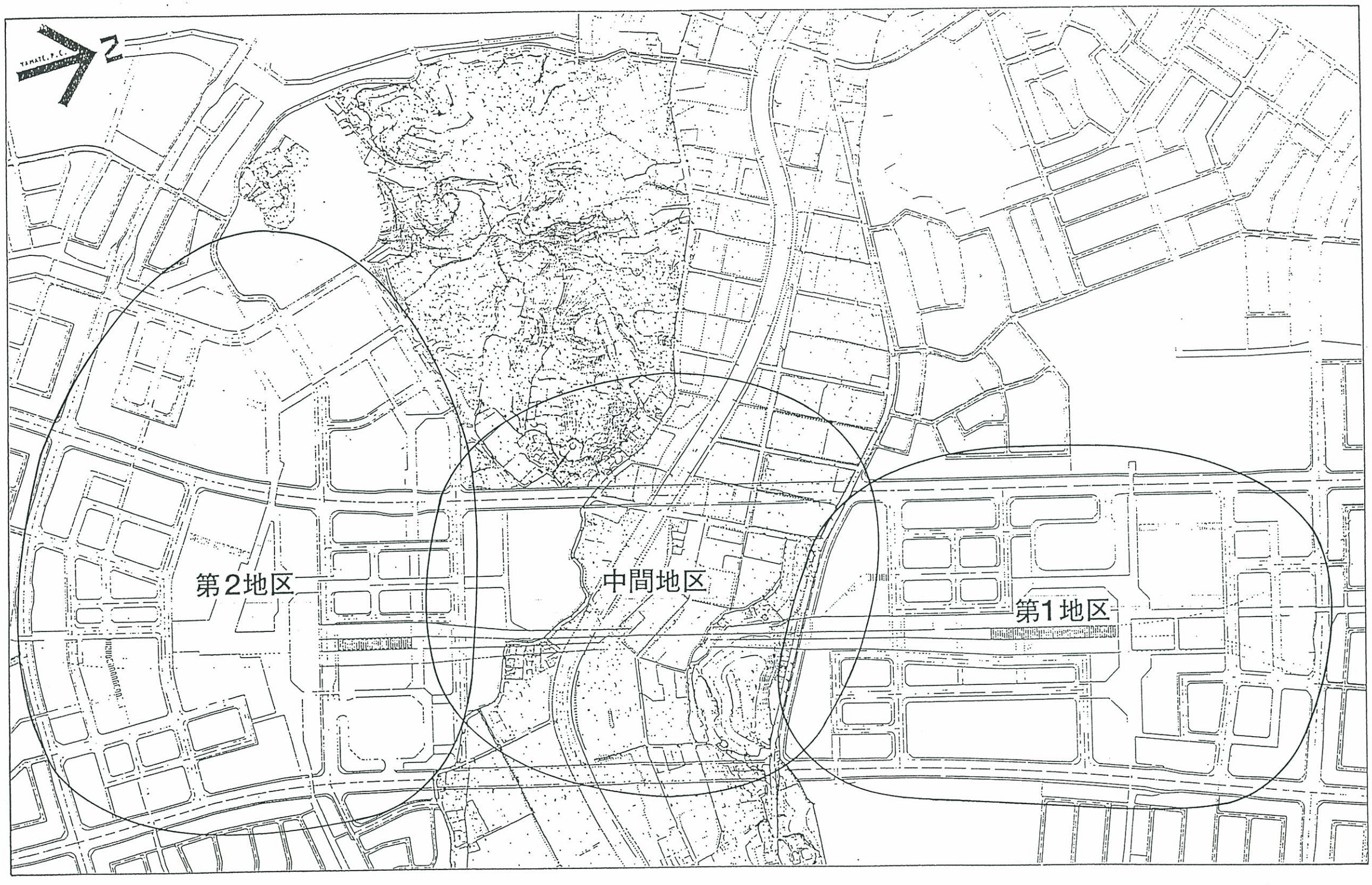
④交差点（辻）

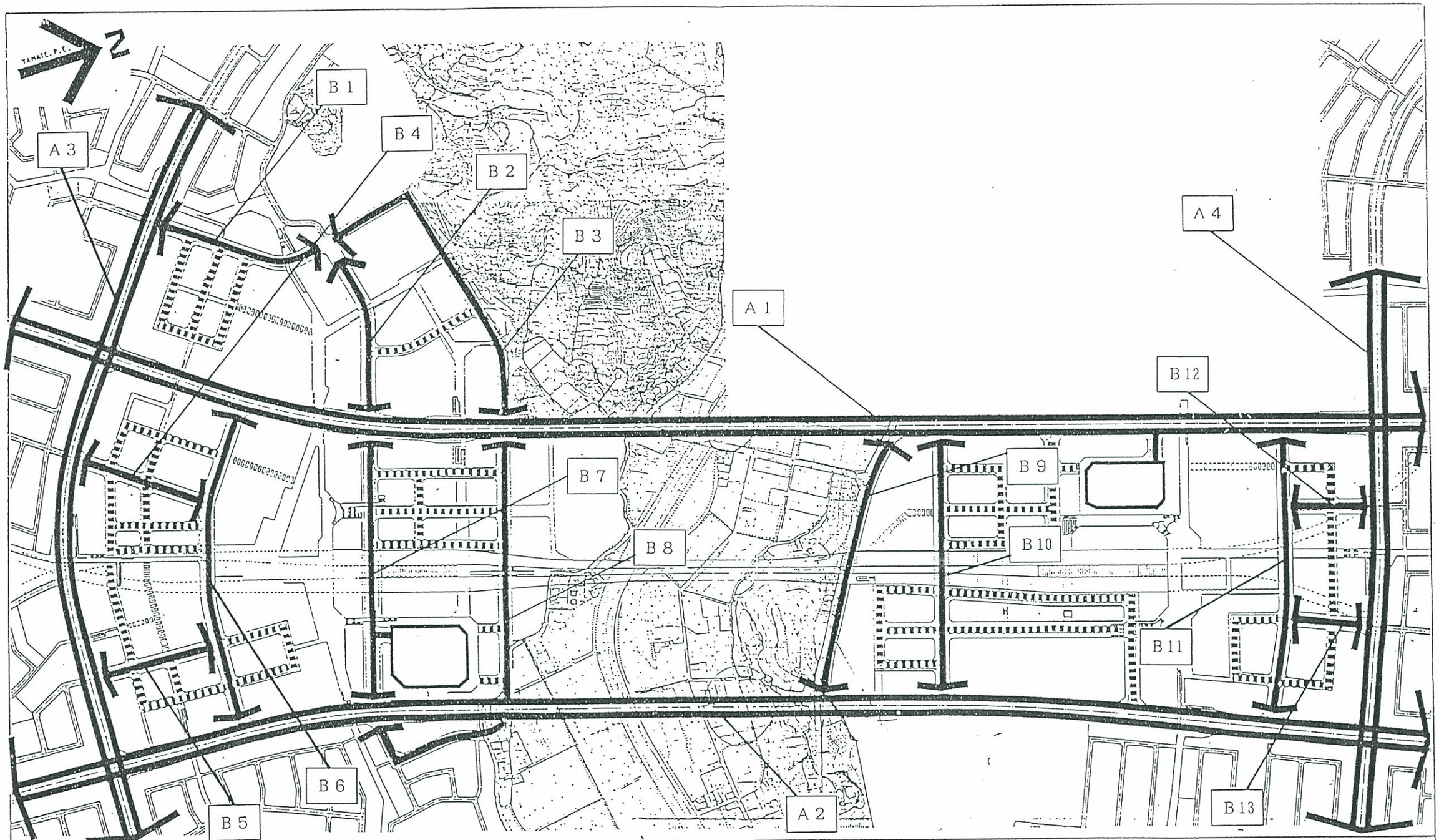
⑤坂

⑥橋

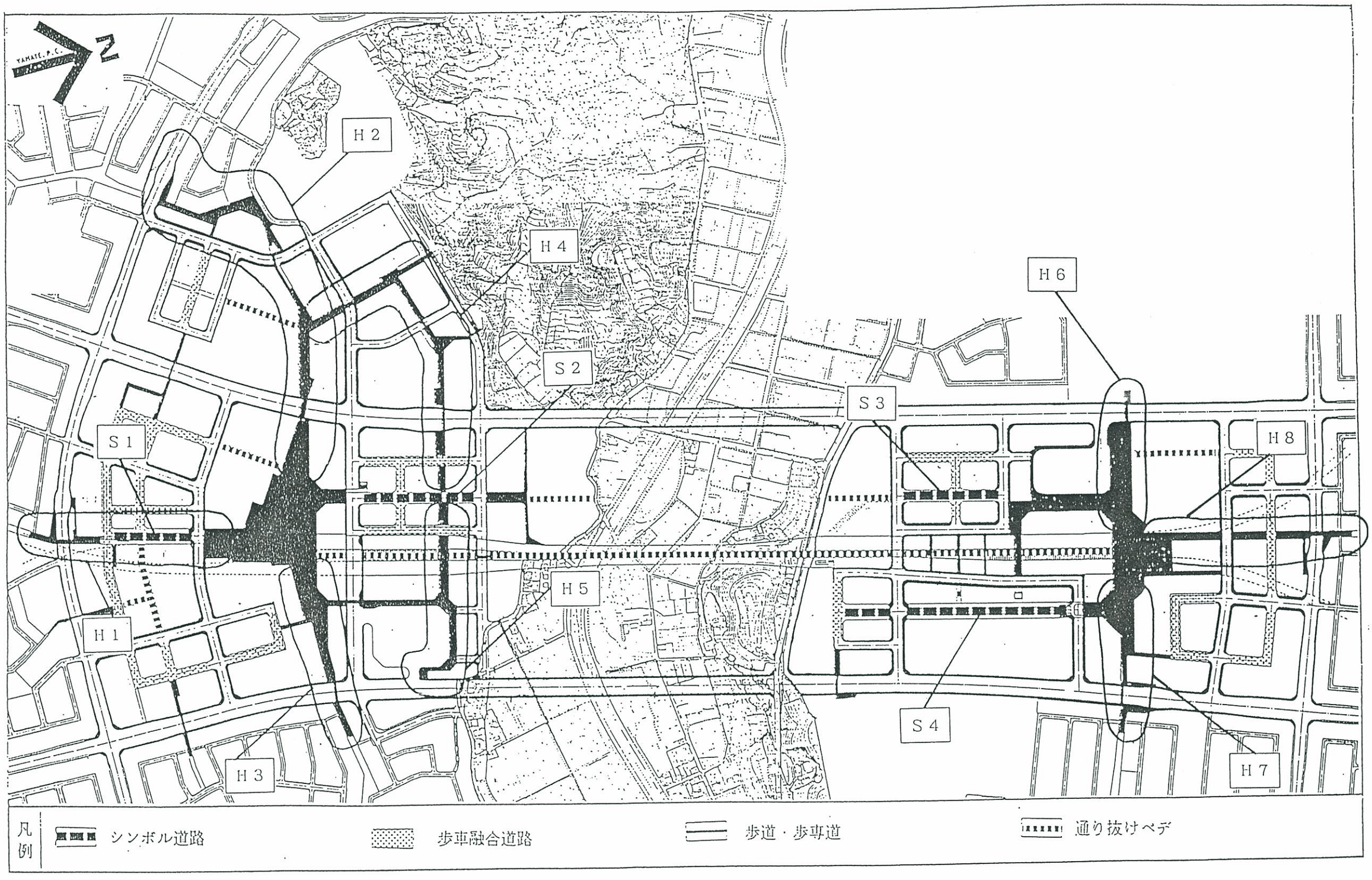
⑦緑地・公園・広場・施設・駅

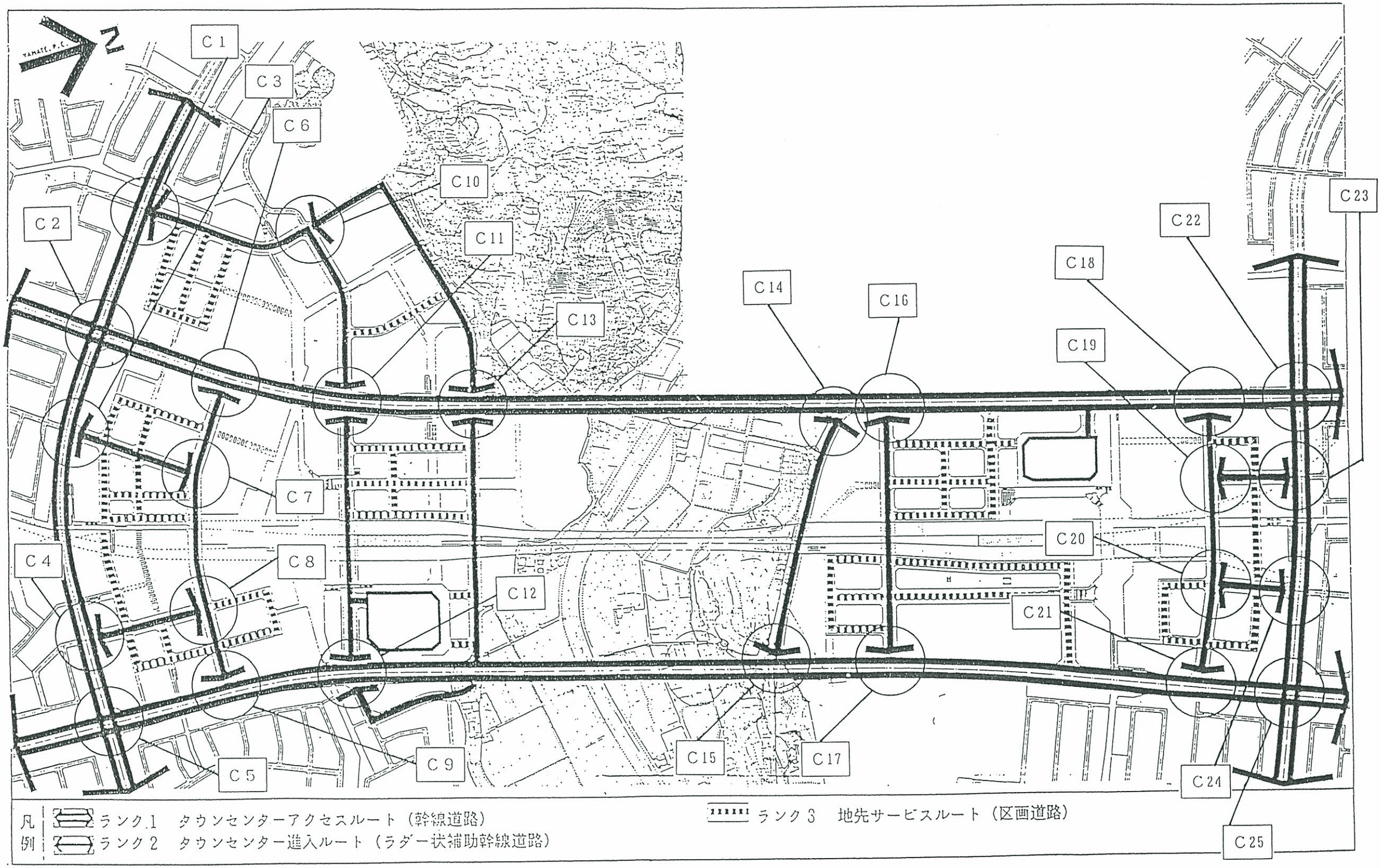
⑧界隈（ゾーン）

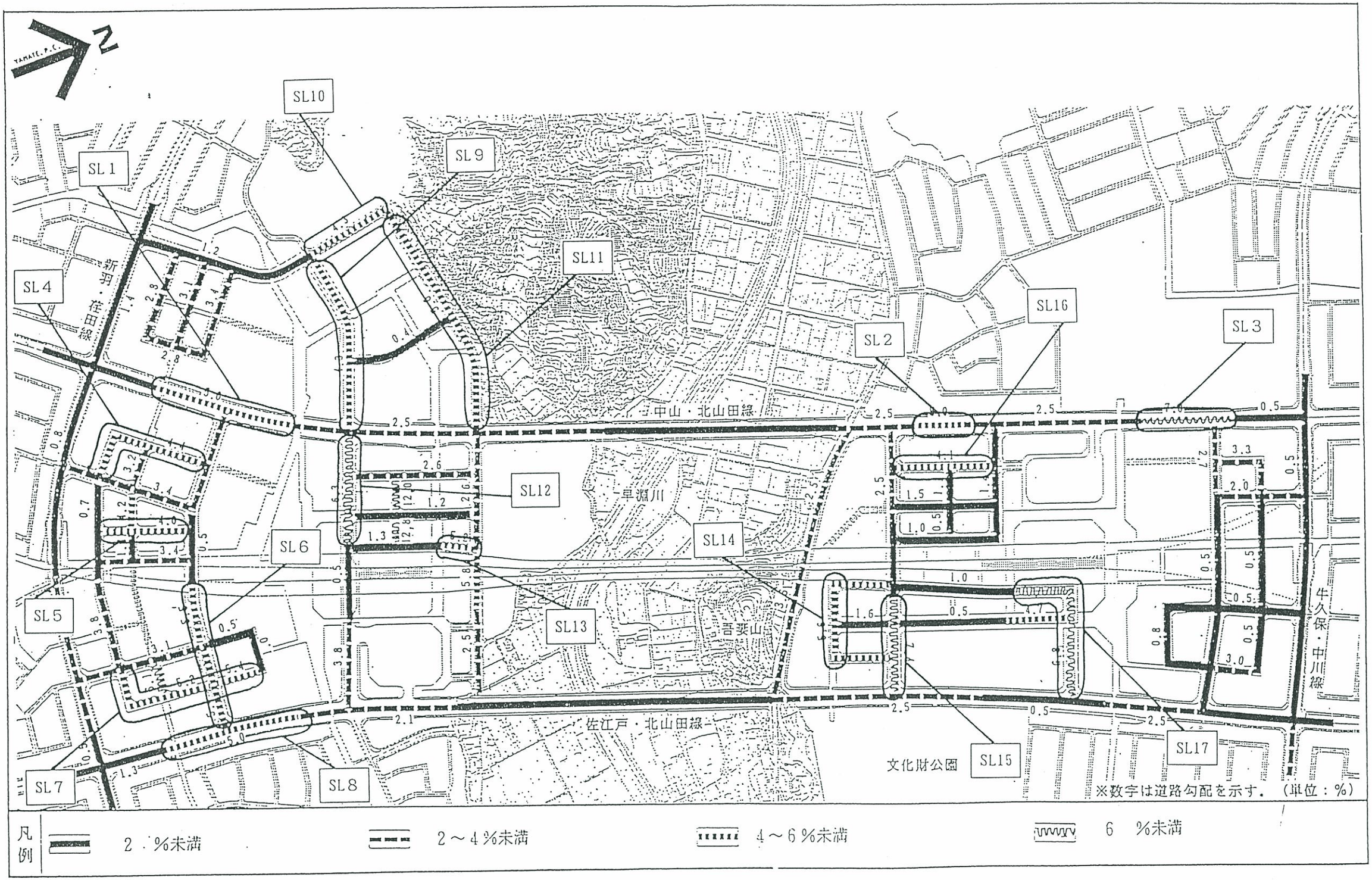

第2地区
中間地区
第1地区

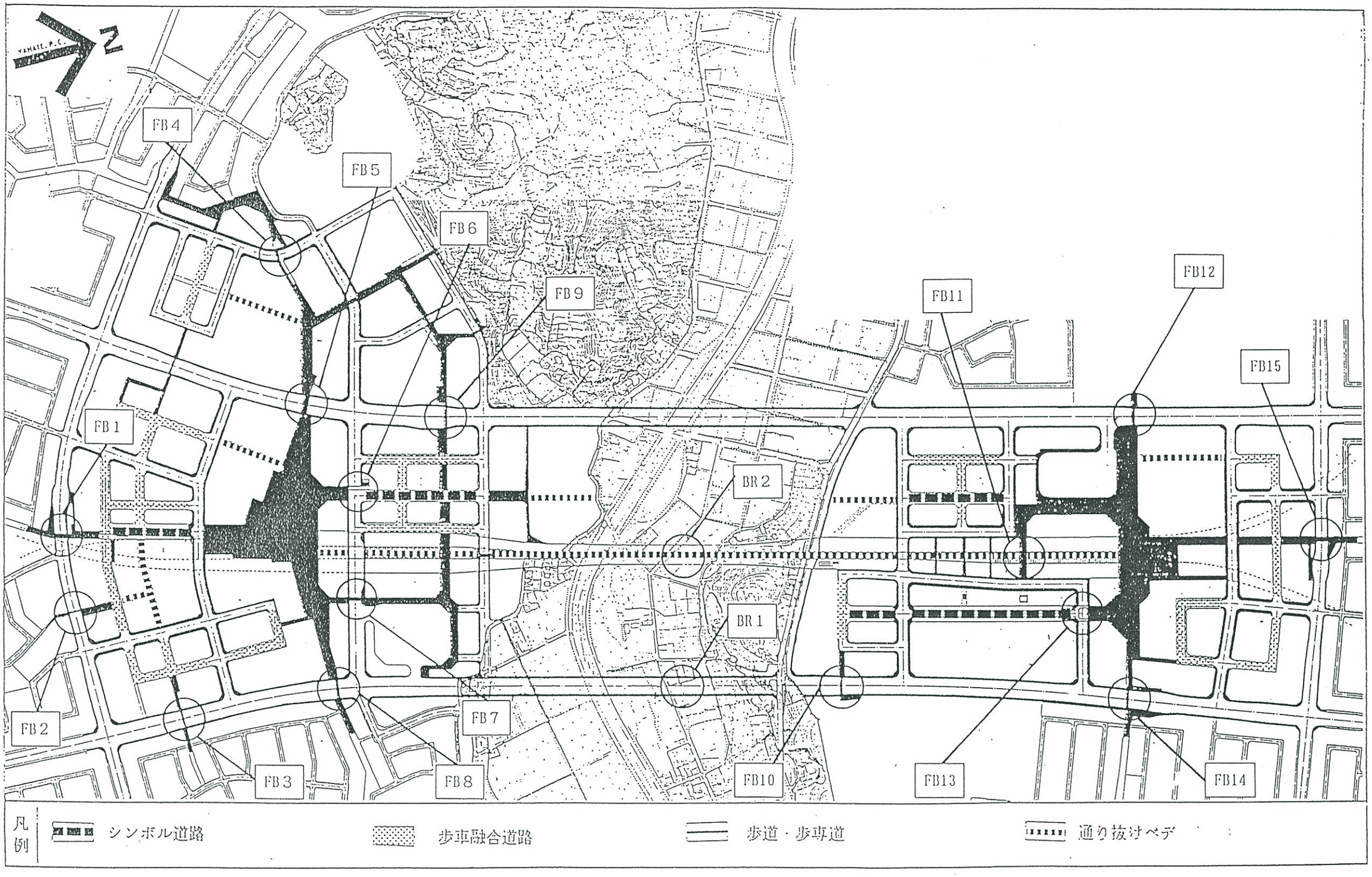


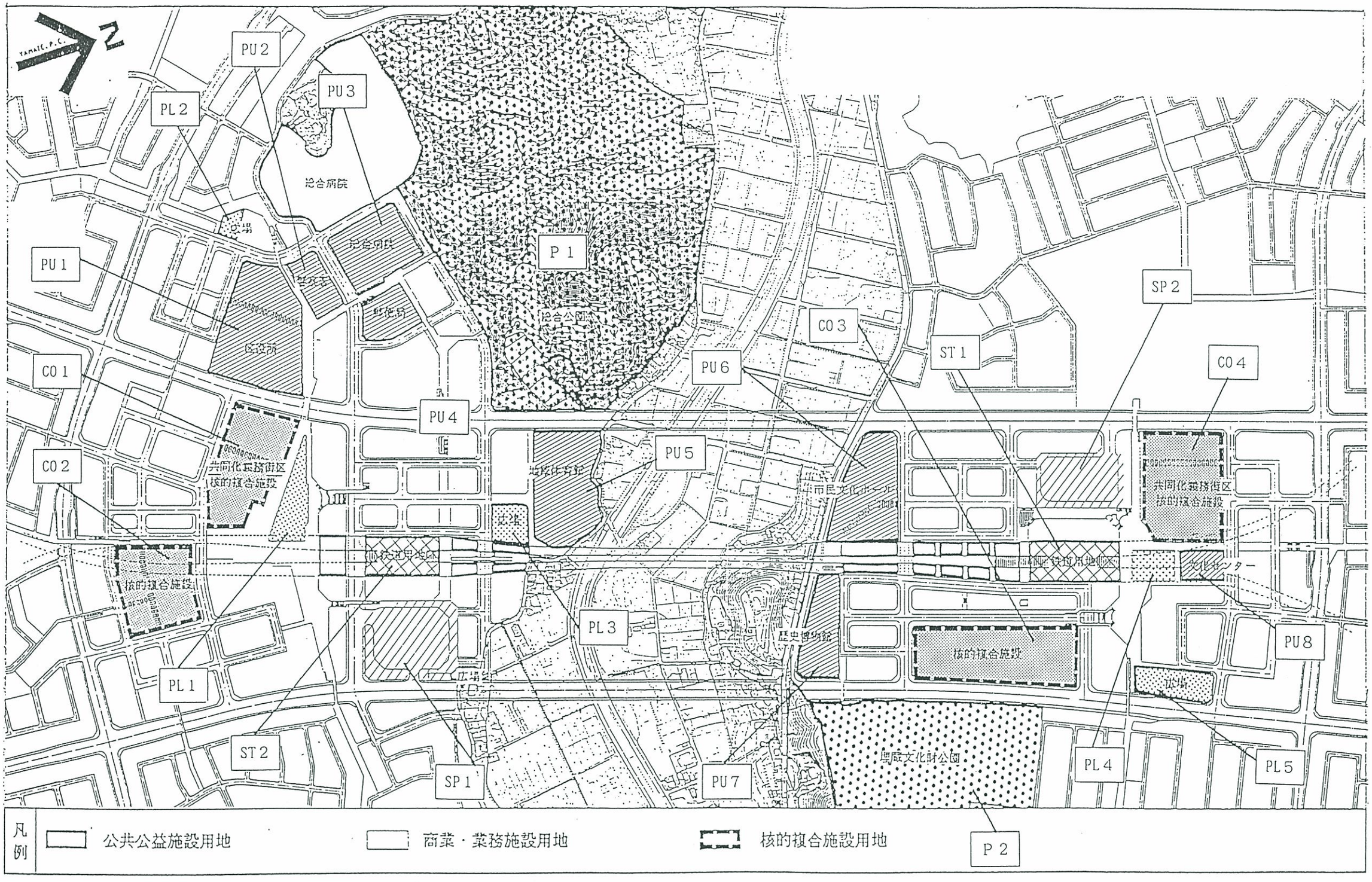
凡例
- ランク1　タウンセンターアクセスルート（幹線道路）
- ランク2　タウンセンター進入ルート（ラダー状補助幹線道路）
- ランク3　地先サービスルート（区画道路）

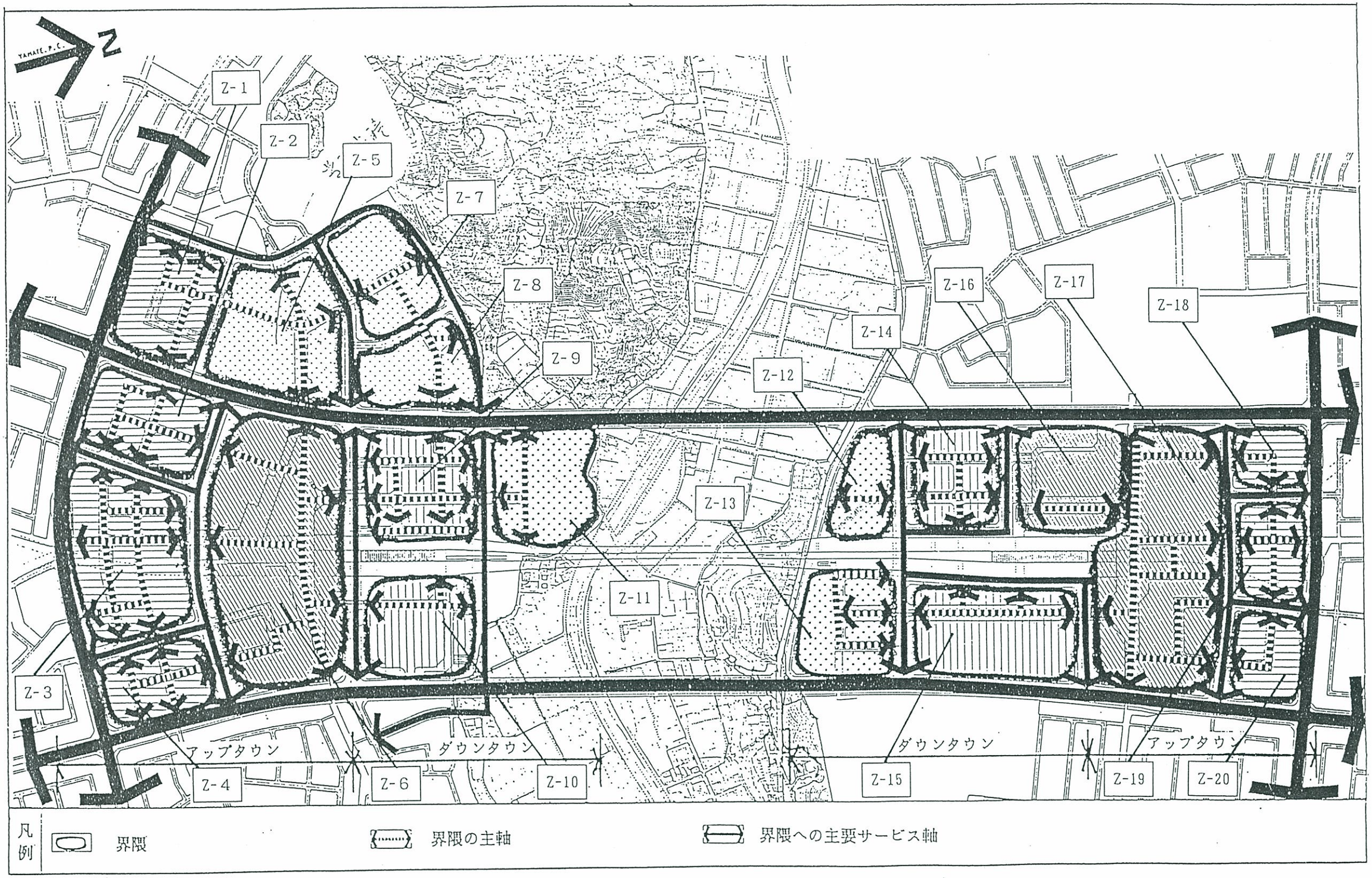

N
H 2
H 4
H 6
S 2
S 3
S 1
H 8
H 5
H 1
S 4
H 3
H 7
凡例
シンボル道路
歩車融合道路
歩道・歩専道
通り抜けベデ


C 1
C 2
C 3
C 4
C 5
C 6
C 7
C 8
C 9
C 10
C 11
C 12
C 13
C 14
C 15
C 16
C 17
C 18
C 19
C 20
C 21
C 22
C 23
C 24
C 25
凡例
ランク1　タウンセンターアクセスルート（幹線道路）
ランク2　タウンセンター進入ルート（ラダー状補助幹線道路）
ランク3　地先サービスルート（区画道路）


SL10
SL1
SL9
SL11
SL4
SL16
SL2
SL3
新羽・在田線
中山・北山田線
SL12
早淵川
SL6
SL14
SL5
SL13
吉英山
牛久保・中川線
佐江戸・北山田線
文化財公園
SL15
SL17
SL7
SL8
※数字は道路勾配を示す。（単位：%）
凡例
2 %未満
2～4%未満
4～6%未満
6 %未満


YAMATE P.C.
FB4
FB5
FB6
FB9
FB11
FB12
FB15
FB1
BR2
BR1
FB2
FB7
FB3
FB8
FB10
FB13
FB14
凡例
シンボル道路
歩車融合道路
歩道・歩専道
通り抜けペデ


N
PU 2
PU 3
PL 2
総合病院
PU 1
P 1
総合公園
CO 3
SP 2
ST 1
CO 4
CO 1
PU 6
PU 4
PU 5
CO 2
共同化業務街区
核的複合施設
市民文化ホール
共同化業務街区
核的複合施設
広場
文化センター
核的複合施設
PL 3
歴史博物館
PU 8
PL 1
広場
広場
ST 2
SP 1
PU 7
埋蔵文化財公園
PL 4
PL 5
P 2
凡例
公共公益施設用地
商業・業務施設用地
核的複合施設用地


YAMATE. P.C.
N
Z-1
Z-2
Z-5
Z-7
Z-8
Z-9
Z-12
Z-14
Z-16
Z-17
Z-18
Z-13
Z-11
Z-3
アップタウン
ダウンタウン
ダウンタウン
アップタウン
Z-4
Z-6
Z-10
Z-15
Z-19
Z-20
凡例
界隈
界隈の主軸
界隈への主要サービス軸